

日
本
語
(10)

中級用





ジ・カバルカンチ (エミリアノ・アウグスト・カバルカンチ・デ・アルブケルケ) — Di Cavalcanti (Emiliano Augusto Cavalcanti de Albuquerque) —

ジ・カバルカンチは、一八九七年リオ・デ・ジャネイロに生まれた。一九一七年サン・パウロの法科大学に入ったが、途中で退学した。在学中から絵をかいていたが、一九二二年、画集を世に出し、はじめて認められた。一九二五年から二年間、一九三五年から五年間ヨーロッパに滞在して絵画修業に励んだ。エコーレ・ド・パリ派の影響 (えいきよう) をうけたが、彼独自のものを失わず、ブラジル一流の近代画家として大成した。彼の絵は、国内はもとより、欧米 (おうべい) でも賞賛され、美術館にも陳列されている。

日本語（10）

中級用

目次

ブラジル国歌

詩

- | | |
|-------------|------------|
| 一 窓 | 江口 榛一 |
| 二 みかん | 坂本 越郎 |
| 三 ほしがき | 小穴 哲夫 |
| 四 村で | ザリナ・ロリン |
| 五 深い深い眠りの中に | マヌエル・ハンデイラ |
| 六 耳を動かす練習 | 国分 一太郎 |

伝記

リオ・ブランコ

劇

朗読会

文学作品を読む

- | | |
|--------|----------------------|
| 一 イアラ | ジョゼー・デ・アレンカル |
| 二 子鹿物語 | マージョリ・キナン・ローリ
ングス |

三 清兵衛とひょうたん 志賀直哉

四 魔術

芥川竜之介

心をみがき からだを鍛える

一 たゆまぬ努力

二 ソクラテス

三 わたしたちは中学生

四 冬休みがすんで

五 余暇の利用

六 勝利の日のために

浜べの歌

森の水草

知識を求めて

一 植物の生き方

一 ブラジルの植物

三 動物の生態

四 ブラジルの動物

五 光と色と音

イ 光について

ロ 色について

ハ 音について

旅愁

手紙

一 実用的な手紙



- イ 転居の通知
- ロ クラス会の案内
- ハ 本の注文
- ニ 問い合わせ
- ホ その返事
- 二 ところの手紙
- イ 合宿地から
- ロ 日本のまだ見ぬ友へ
- ハ フィリップの手紙
- 三 手紙のエチケット
- 四 人をさすことば
- 五 大意や要旨のとらえ方

山内義雄 訳

生産と商品

- 一 織物の話
- 二 紡績工場を見る
- 三 商品と価格

政治と選挙

- 一 政治のしくみ
- 二 ブラジルの政治
- 三 選挙

故郷の廃家

課外

- 一 ハンス・シュターデン

二 歌う部隊

竹山道雄

三 ことばのきまり（その一）

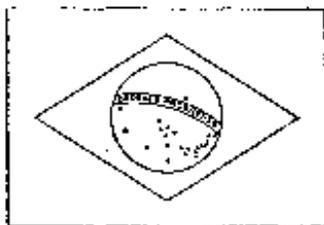
おもなことば

新しい漢字（新出読み替え）

福島 近（絵）

表紙

ジ・カバルカンチ（絵）



HINO NACIONAL BRASILEIRO

Composição: Maestro Francisco Manuel da Silva
Letra: Osório Duque Estrada

I

Quilares de Ipiranga os raios plácidos
De um povo heróico e bravo rememora,
E o sol de liberdade, em raios filgídeos,
Brilou no céu da Pátria nesse instante.

Se o padre dessa igualdade
Luzes tantas conquistou com bravo fôlego,
Em teu seio, ó liberdade,
Deslê o novo peço a própria morte.

Ó Pátria amada,
Malandra!
Falsa! Subtil!

Brasil, em sonho eterno, em raio etéreo,
De amor e de esperança à terra desce,
Se em teu furioso céu, alente e limpa,
À largura do Cruzeiro esplêndido.

Quando para própria autarca,
És lúlo, és fôrta, impévida colmeia,
E o teu daltun repilha aos grandes:

Terra adorada,
Entre outras mil,
És tu, Brasil,
Ó Pátria amada!

Des filhas ilhas são as tuas gentis,
Pátria amada,
Brasil!

II

Destado eternamente em berge esplêndido,
Au nos do este e à luz do céu profunda,
Esplênde à Brasil, Rocha da América,
Iluminado ao sul do Novo Mundo!

De que a terra mais gerada
Tua riqueza, Unidos campos têm mais filhos:
"Nossos campos têm mais vida!"
"Nossa vida", no teu seio, "mais amada".

Ó Pátria amada,
Malandra,
Falsa! Subtil.

Brasil, de amor eterno seja símbolo
O fôrto que amassas enrolado,
E diga o verde-louro dessa lãncã
—Poa ao fãtato e plácido ao pãnculo.

Mãe, se angos da justiça a clava forte,
Vinda que um filhas tuu fugi à lãrta,
Nem tãne, quem te vicia a própria culpa.

Terra adorada,
Entre outras mil,
És tu, Brasil,
Ó Pátria amada!

Des filhas ilhas são as tuas gentis,
Pátria amada,
Brasil!

詩とは、リズムをもった美
しいことばで、心の中にお
きあがる思いを、うたいあ
げたものです。
たくさんさんの詩を読み味わい、
また作って、詩の心を学び
ましょう。



また作って、詩の心を学び
ましよう。

詩



一 窓

江口榛一（えぐちしんいち）

窓をあけよう。

窓をあけると、空が見える。雲が見える。

雲は白く、いつも、ゆうゆうと流れている。

窓をあけよう。

窓をあけると、風がはいる。

風は、いつも新しい。

地球をひと回りして来た風だ。

その風を、深呼吸のように吸っていると、
心が、空のように広くなる。
海のように豊かになる。

窓をあけよう。

もつともつと窓をあけよう。

それから、心の窓もあげよう。

心の窓をあけると、何が見える。

心の窓をあけると、世界が見える。

宇宙が見える。

神秘的な宇宙の命が感じられる。

窓をあげよう。

窓をあけると、林が見える。

冬枯れたその林の向こうに、木立が見える。

山並みが見える。

山並みは、

いつも変らぬ姿で横たわっている。

窓をあげよう。

窓をあけると、富士が見える。

冬晴の空の下、

山並みのはるか向こうに見える。

そうして、富士は、いつも白く光っている。

静かに、清らかに光っている。

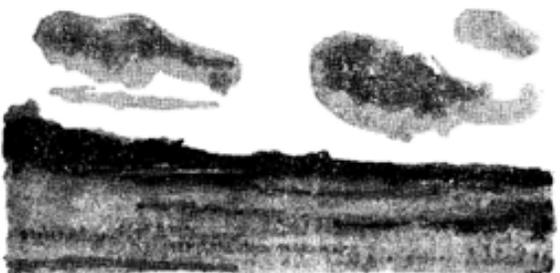
窓をあけよう。

なんでも見え、なんでも感じられるように、

窓をあけよう。

きみの、ぼくの心の窓を。

(新ポル語 c o s m o)



二 み かん

阪 本 越 郎（さかもとえつろう）

冬の夜には明るい灯（ひ）のしたに集まり

みんなの手に手にみかんをもっている

幼いものがむけないといえは

兄は強い指でむきほぐしてやる

齒にしむほどに冷たい

新しい液のふくろが

みんなのくちびるをぬらし

だんらんの灯のもとで

花のように見えている

三 ほしがき

小 穴 哲 夫（こあなてつお）

暑いほどに

秋の日が照り、

はちが 甘いおいしいみつを求めて、

ほしがきに 止まったり離れたり

ほしがきは 何も知らずに

ただ太陽の光を
まぶしくうけている。
白い壁に かきの影が黒く
じゅずのように続いている。
丸く長くー
はちの影が動いている。

(新ポル語 r o s a r i o)

四 村 で

芝草の丘のふもと
ささやかな小川のほとりに、
黒ずんだ低い屋根と
小さな戸口と窓が見える。
えんとつから細い白い煙
やしの青々と茂った葉が
金色の実のふさにかぶさり、
そよ風……。



ザリナ・ロリン



太陽が照りつける
家の前のあき地では、
にわとりやあひるが
えさをあさっている。
小鳥のさえずりも聞こえない。
若い母親が
子どもを寝かしつけながら
ものうげに
歌を歌っている

(新ポル語 r e l v a Z a l i n a R o l i m d
e b i c a r)

五 深い深い眠りの中に

マヌエル・バンデイラ

ゆうべ眠ってしまった。
サン・ジョンの夜
あかあかと燃えるたき火のまわりを
とり囲んでいたのは
うちあげる花火の音ときらめき

喜びとざわめき 笑い声 うた声。

夜中に ふつと目がさめた。

笑い声も うた声もない

バロンだけが ひっそりと空を流れていた。
ときどき電車のひびきが通り過ぎていった。

ついさつきまで 歌ったり踊ったりしていた人たちは
どこへ 行ったのだろうか、
あかあかと燃えるたき火のまわりだろうか。
みんな横になっているのだ、

深い深い眠りの中に。

小さいころのわたしは

サン・ジョン祭りを 終わりまで見たことがない、
つい 眠ってしまうので。

今は あのころのざわめきも聞けなくなった。

祖父 祖母 トトニオ ロザたち、
みんな どこにいるのだろうか。
彼らは 横になっているのだ、
深い深い眠りの中に。

六 耳を動かす練習

国分 一太郎（こくぶいちたろう）

一心に、練習すれば、

耳だって動かすことができるんだ。

ぴくん ぴくん動かすことができるんだ。

そう、友だちから聞いたので

ぼくは、本気になって、練習した。

ねえさんの鏡を、こっそり借りて

それとにらめっこで

根気よく練習したが、

四日たち、五日たつても、

耳は ぴくとも動かなかつた。

「東の方へ行こう」

ぼくが 心にこう思えば、

足は東の方へ歩き出すし、

「右手を上げよう」

ぼくが 心にそう思えば、

右手はさつとあげられるのに……

「口を開こう、目を閉」じよう」

「舌を出そう、歯を食いしばろう」

(新ポル語 T o t o n i o R o s a)

心に そう思えば、

思ったとおりに、それができるのに……

耳はちつとも いうことをきかなかつた。

鏡の中のぼくの顔が、

しかめづらになり、

ひよつとこになるだけだつた。

耳の底が、じいんとかゆくなるだけだつた。

ぼくは、だんだんくたびれてきた。

そして しまいには、

なんだか ばからしくなってきた。

牛や馬のように、

耳がぴくぴく動くようになったって、
どんなよいことがきけるのだろうか。

耳たぶが冷たかったら、
両手を持って行ってこすればよい。

耳の穴がかゆいときは、
指先をつつこんでかけばよい。

かがくつついたら、
手をもって行っておえばよい、

手が思うことをしてくるようになったから、
耳など動かさなくてもすむようになったから、
人間の耳も動かなくなったのだろう。

ぼくの耳が、いまさら、

ぴくぴく動くようになったって、
ぼくにどんなしあわせがくるだろう。

どんなしあわせもくるもんか。

日本のものずきなラジオが、

何県の何郡の何村に、

こんな珍しいことのできる子どもがいます。

うまみしたいに、耳を自由にうごかす子どもがいます。
こう放送するだけだろう。

こんなことよりも、

ぼくには、
もつと練習しなければならぬことが、
たくさんある。
ぼくは 耳を動かす練習を
やめてしまった。

心に そう思えば、

思ったとおりに、それができるのに……

耳はちっとも いうことをきかなかつた。

鏡の中のぼくの顔が、

しかめづらになり、

ひょっとこになるだけだった。

耳の底が、じいんとかゆくなるだけだった。

ぼくは、だんだんくたびれてきた。

そして、しまいには、

なんだか ばからしくなってきた。

牛や馬のように、

耳がびくびく動くようになったって、

どんなよいことがきけるのだろうか。

耳たぶが冷たかったら、

両手を持って行ってこすればよい。

耳の穴*がかゆいときは、

指先をつっこんでかけばよい。

かがくついたら、

手をもっていっておえばよい、

手が思うことをしてくれるようになったから、

耳など動かさなくてもすむようになったから、

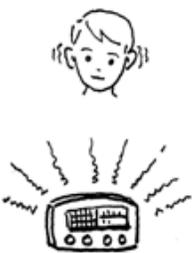
人間の耳も動かなくなったのだから。

ぼくの耳が、いまさら、

びくびく動くようになったって、

ぼくにどんなしあわせがくるだろう。

どんなしあわせもくるもんか。



日本のものずきなラジオが、
何県の何郡の何村に、

こんな珍しいことのできる子どもがいます。
うまみために、耳を自由にうごかす子どもがいます。
こう放送するだけだろう。

こんなことよりも、
ぼくには、

もっと練習しなければならぬことが、
たくさんある。

ぼくは 耳を動かす練習を
やめてしまった。



Manuel Bandeira

ブラジルの詩人で、著述家。
一八八六年、ベルナンブッコ州、
レシッフェ市に生まれた。
サンパウロ大学中途退学。作詩・
著述を始める。一九四六年、ナシヨ
ナル文学賞受賞、多くの著作があ
る。

偉人^{*}というのは、選ばれた人です。
そういう人になればよいが、た
とえなれなくても、偉人の持つて
いる精神を持つとうとすることは
きるはずで
それを伝記に学びたいと思います。



リオ・ブランコ大通り（リオ・デ・ジャネイロ）

伝記

(Manuel Bandeira)

ブラジルの詩人で、著述家。

一八八六年、ベルナンブッコ州、レシッフェ市に生まれた。

サンパウロ大学中途退学。作詩・著述を始める。一九四六年、ナシヨ
ナル文学賞受賞、多くの著作がある。

リオ・ブランコ



Barão de Rio Branco

リオ・デ・ジャネイロ市のイタマラチー宮の中に、「サラ・リオ・ブランコ」というへやがあります。そのへやの大理石の壁には、金文字で次のようなことが刻まれています。

「一九二二年二月二日、外相ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニョス・スリバロン・ド・リオ・ブランコは、このへやで永眠した。」

リオ・ブランコの死後、その生家のある通りの名は、彼の生年月日にちなみ、「ピンテ・デ・アブリル」と改められました。そして、八番地にある生家には、「バロン・ド・リオ・ブランコは、この家で生まれた。」ということが記してあります。

す。

リオ・デ・ジャネイロのエスプラダ・ド・カステロには、彼を記念する碑と、彼の彫像が立っています。

アクレ州の首都は、リオ・ブランコという名です。リオ・デ・ジャネイロ市にも、サン・パウロ市にも、

「リオ・ブランコ」という名の大通りがあります。その他、ブラジルの各地に、数えきれないほど、リオ・ブランコという名の町や通りがあります。

これは、何を物語っているのでしょうか。それは、彼が外交官として、外相として、成し遂げた大きな業績をたたえ、彼の名を永遠に記念しようとする国民の気持ちの表われです。

ブラジルの歴史に、名を連ねている外交官や外相は少なくありません。しかし、リオ・ブランコほど、国民に敬われ慕われた人はありません。彼が、祖国ブラジル

リオ・ブランコ



記念碑と彫像

偉人というのは、選ばれた人です。そういう人になれればよいが、たとえなれなくても、偉人の持つている精神を持つとうとすることはできるはずです。それを伝記に学びたいと思います。

伝記

リオ・ブランコ

リオ・デ・ジャネイロ市のイタマラチー宮の中に、「サラ・リオ・ブランコ」というへやがあります。そのへやの大理石の壁には、金文字で次のようなことばが刻まれています。

「一九二二年二月一日、外相ジョゼー・マリア・ダ・シルバ・パラニョスⅡバロン・ド・リオ・ブランコは、このへやで永眠した。」

リオ・ブランコの死後、その生家のある通りの名は、彼の生年月日にちなみ、

「ビンテ・デ・アブリル」と改められました。そして、八番地にある生家には、

「バロン・ド・リオ・ブランコは、この家で生まれた。」とということが記してあります。

リオ・デ・ジャネイロのエスプラナダ・ド・カステロには、彼を記念する碑と、彼の彫像が立っています。

アクレ州の首都は、リオ・ブランコという名です。リオ・デ・ジャネイロ市にも、サン・パウロ市にも、「リオ・ブランコ」という名の大通りがあります。その他、ブラジルの各地に、数えきれないほど、リオ・ブランコという名の町や通りがあります。

これは、何を物語っているのでしょうか。それは、彼が外交官として、外相として、成し遂げた大きな業績をたたえ、彼の名を永遠に記念しようとする国民の気持ちの表われです。

ブラジルの歴史に、名を連ねている外交官や外相は少なくありません。しかし、リオ・ブランコほど、国民に敬われ慕われた人はありません。彼が、祖国ブラジル

(新 ポル語 Itamarati/Sala Rio
Branco/Jose Mariada Parra
nhos/Baraodo Rio Branc/V
intede Abril/Esplanadad
oCastello/Acre)

ドンペドロ・セグンドの教師に任命され、その後ノバ・フリブルゴの判事になりました。

一八七〇年、父ビスコンデは、重大な使命を帯びて、パラグワイに行くことになり、彼は秘書として同行しました。その使命というのは、ブラジルがパラグワイと平和条約を結ぶについて、交渉することでしたが、彼は父を助けて大いに活躍しました。これが、外交官としての最初の働きでした。

一八七六年、彼は英国リバプールの領事に任命されました。リバプールに赴任した彼は、領事として勤めるかわら、南北アメリカについての研究を始めました。ひまを見ては図書館や博物館に行つて、書物を読み、また、古い文書や地図などを集めました。特に、ブラジルに関することは詳しく調べ、資料もできる限り集めました。こうして、彼は世界でも有数のアメリカ通として、知られるようになりました。その後も、外交官としての彼の働きは、目ざましいものでした。その数々の功績に対して、皇帝ドン・ペドロ・セグンドは、彼に「バロン・ド・リオ・ブランコ」の称号を贈りました。

一八八九年、ブラジルは帝制から共和制に変わりましたが、彼は祖国のために、いつそう力を尽くしました。

バロン・ド・リオ・ブランコが、外交官として最初に手がけた国境問題は、ブラジルとアルゼンチンとの国境を

はつきりさせることでした。この国境線については、ブラジルの独立以前から、ポルトガルとスペインとの間で争われていたのです。ブラジルとしては、自国の領土を守り、しかも、円満に解決したいと希望していました。そこで、仲介者として、当時のアメリカ合衆国大統領グロウベール・クリーブランドを頼み、ワシントンで話し合いを始めました。その時、ブラジル代表が客死し、後任として選ばれたのが、バロン・ド・リオ・ブランコでした。

アルゼンチンとの交渉に当たって、リオ・ブランコは、「ブラジルの覚え書き」という論文を書いて発表しました。それは、アルゼンチンとの国境地帯ミッソンエスの地が、地理的にも歴史的にも、ブラジルの領土であることを詳しく述べたもので、ブラジルの主張が正しいことを、多くの人に認めさせるのにたいそう役立ちました。こうして、一八九五年、クリーブランド大統領の裁決により、ベルギーより

(新ポル語 Nova Friburgo/Missos)

も広大な土地が、正式にブラジルの領土となりました。

次に、リオ・ブランコが解決したのは、アマパーの所屬について、フランスとの間に起こった国境線問題でした。フランスは、自国領ギアナとブラジルとの国境線は、アラ

グワリ川だと主張してやみません。ブラジルは、オイアポック川を境界とするのが正しいと主張していました。

この争いでは、仲介者としてスイスの大統領を頼み、問題解決の折衝を始めました。リオ・ブランコは、ヨーロッパに滞在して、祖国の権益を守り、しかも、円満に解決するため、寝食を忘れて力を尽くしました。その時、「エスポジソンデ・ファットス」という八四〇ページもの書物を著わしましたが、この書物は、彼の傑作といわれています。これは、ポルトガル、スペイン、フランスなどの古い文書を参考にして、アマパーがブラジルの領土であることを論じたものでした。この事物を読んだ者はみな、リオ・ブランコの地理・歴史・法律に関する深い知識におどろくと共に、その所論の公正さに感じ入ったということです。

この書物を刊行するに当たっては、次のようなエピソードがあります。この書物は、問題を解決する前に、是非出版しなければならぬものでした。ところが、期日が迫ってくるのに、なかなかできあがりません。気が気でなくなったりリオ・ブランコは、毎日のように出版社に行つて、さいそくしました。しまいには、出版社に寝泊りして、職人を監督し、やっと期日までにできあがらせたとのことです。リオ・ブランコが、どれほどの熱意をもって、問題の解決に当たったか、この一事を見てもよく知ること

ができます。

一九〇〇年、スイスの大統領によって、この問題の裁決が発表されました。それは全面

(新ポル語 Amapa Araguari Oiapoc
Expoiçao de Fatos)

的にブラジルの主張を支持したものでした。こうして、アマパーはブラジルの領土であることが確定したのでした。ロドリゲス・アルベス大統領の時、リオ・ブランコは推されて外相に就任しました。そのころ、アクレに大事件が起きました。この地方は、ボリビアとの国境線があいまいだったので、ブラジル人とボリビア人との間に、土地争いが起きました。この争いが大きくなったので、それをとりしずめようとして、ボリビア政府は、アクレに軍隊を送りました。そこに住んでいたブラジル人たちは、軍隊を組織してこれに対抗しました。こうなつては、ブラジル政府も、そのままにしておけないので、一応軍隊を送り、住民を保護することにしました。ブラジルの軍隊は、アクレに到着すると、ボリビア軍と、ブラジル住民軍とが対立している、その中間に陣地を構え、ひとまず事件の拡大を防ぎました。そして、ボリビア政府に、事件を話し合いによつて解決することを申し入れました。

この時、ブラジル側を代表して交渉に当たったのは、外相リオ・ブランコでした。彼の手腕と公正な態度とによって、問題は円満に解決し、一九〇三年、アクレはブラジルの領土となりました。

このように、ブラジルの国境問題は、リオ・ブランコの非凡な才能によつて、みな平和のうちに解決しました。リオ・ブランコは、ロドリゲス・アルベス、アフォンソ・ペナー、エルメス・ダ・フォンセツカと、三代の大統債の時代、引き続き外相として活躍し、世界にブラジルの国威を輝かせました。

一九一二年二月一日、イタマラチー官には、政府の高官はもとより、各界の名士がぎっしりとつめかけていました。また庭前には、黒山のように市民が集まっています。それらの人々は、みな一様に、悲痛な顔をしていました。重い病いにたおれたリオ・ブランコが、死の床にあつたからです。

「バロンが死ぬ！ そんなはずがない！」
すべてのブラジル人は、彼が死ぬことを信じませんでした。しかし、彼は、自分が長い年月、職務に励んだイタマラチー官の一室で、静かにこの世を去っていきました。

(新ポル語 Rodrigues Alves/Afonso Pena/Hermes da Fonseca)

リオ・ブランコは、アクレ国境問題の解決に続いて、ペルーとの国境問題解決に当たった。この折衝は、一九〇四年、ロドリゲス・アルベス大統領のときに始められ、一九〇八年、アフォンソ・ペナー大統領のときに至って解決された。これも、リオ・ブランコの外交の力によるものである。

劇

演劇について



人間生活のある所には、必ず演劇があります。大昔、人間の生活が始まると、演劇もまた始まったのです。それから今日まで、人間生活と共に演劇は続けられ、各国、各地方に、さまざまな形で作られ、きそいあっています。演劇は文化の花といわれ、演劇によってその国の、その地方の、その職場の、その学校の文化の高さを知ることができます。

演劇は、一つの娯楽であるといわれています。しかし、ただの娯楽ではなくて、楽しみながら、人間生活の理想を学びいつているのです。

劇には、古典劇、現代劇、人形劇、影絵劇、放送劇、歌劇、児童劇など、いろいろあります。劇を作り、そして上演することを盛んにしましょう。

朗読会

出てくる人

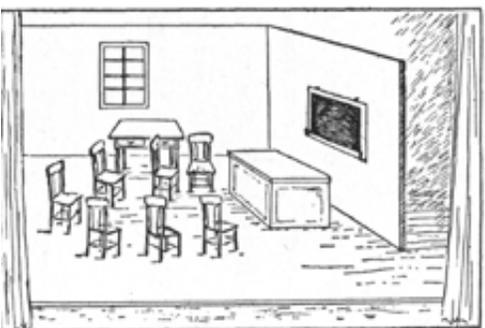
細井(男) 島田(女)
橋本(女) 山本(男)
関根(男) 友田(男)
川口(男)

ときと所

ある日の午後、教室

(幕があくと、関根、黒板の前で、作文の最後の部分を朗読している。他の級友は、いすを半円に並べて腰かけ、じっと聞いている。)

関根 「緑の木々も、今はすっかり落ち着いた秋の色に変わり、静かに語り合っているようだった。そして、ぼ



上手よりに、黒板。下手に入り口。後ろ中央ガラス窓の下に机。いす数きやく。

くの心も、次第に静まり、自然の中にとけこんでいった。」

(関根、礼をして、いすにもどる。みんな拍手する。)

友田 (感心したように) いいなあ!

橋本 (うなずいて) ほんとに、いいわねえ。

島田 関根さん。それ、日本の学校にいたとき作ったの。

関根 そう。ブラジルにくる、ちよつと前に作ったんです。

島田 それじゃ、朗読の発表も初めてなわけね。でも、ほんとにじょうずだわ。

細井 もう一度、その作文見せてくれない?

(細井、原稿を受け取り、めくりながら見入る。ほかの者ものぞきこむ。)

(021.jpg)

……間……。近くでオルガンの音、唱歌の音が聞こえる。その間、山本は一人だけ立ちあがり、あたりをゆっくり歩き回る。)

友田 実に、すつきりしたい作文だね。日本の美しい風景と、作者の気持ちがよく書けている。

橋本 関根さんの朗読の仕方もしようずね。

細井 ねえ、どうだろう。川口君さえよければ、あしたの作文朗読会には、関根君に出てもらったら…。

川口 (すぐに) うん。ぼくはちつともかまわないよ。賛成だ。

橋本 それじゃ、関根さんをお願いしましょうよ。

島田 そうね。これ、朗読したら、聞きにきた父兄が喜ぶわ。日本をなつかしがって……。賛成よ。

山本 それじゃ、川口君のはどうする？

細井 朗読会に出るのは各クラスとも、一人ずつと
いうことに決まっているから、川口君のは、すまないけどやめてもらおう。

山本 だけど、川口君のだって、研究文で、とてもいいんだ。それに、一度川口君ということに決まったんじゃないか。それを……。

川口 (押えるように) 山本君、いいんだよ。

山本 (大きな声で) だって、君があんなに練習したのが、全部むだになるじゃないか。関根君のうまいのはあたりまえだよ。日本から来たばかりなもの。今になって、新しく来た人に頼むなんて変だよ。

川口 そんなこと言うなよ。新しい人だって、なんだって、作文さえよければいいじゃないか。

山本 とにかく、ぼくは賛成できないな。

川口 (なだめるように) 出ることになっていたぼくが「関根君の方がいい」って言ってるんだよ。ね、いいだろう。

山本 (だまって、横を向く。)

川口 (細井の方へ向いて) 細井君、ぼくは次の会のときでいいから、あしたは関根

(022.jpg)

君に出てもらおうよ。

細井 うん。(川口の方へ向いて) じゃ、君には悪いけどそうしようか。

川口 (明るく) ちっとも悪くなどないさ。

細井 (改まった口調で) それでは決をとります。関根君に賛成の人。(窓の方を向いて知らん顔をしている山本を除き、みんな手をあげる。) 多数の賛成により、関根君に決まりました。(みんな拍手する。) では、関根君、あしたはしっかり頼むよ。

関根 うん。……でも。……川口君。

川口 え？

関根 さっきの話だと、君、ずいぶん練習してたんだね。……なんだか悪いなあ。

山本 悪いと思ったら、やめればいいだろう

橋本 山本さん、変なこと言わないでよ。

友田 もう決まったんじゃないか。男らしくないぞ。
山本 (友田に向かつて) なんだって? 生意気言うな。

友田 (川本につめよって) 生意気だって?

川口 (あわてて山本を押える) よせよ、山本君。

細井 (友田を引きもどす) よせ、よせ。

(このとき、外から呼び声が聞こえてくる。)

声 おーい。手のあいてる者全部来て、手伝ってくれよ。

川口 ようし、すぐ行くよ。さあ、みんな、手伝って来よう。

細井 うん、そうしよう。片付けが終わったら、もう一度、関根君に朗読してもらおう。

島田 さあ、早く行きましようよ。

みな教室を出て行く。そのとき、関根は、作文の原稿をポケットから落として行く。いちばんあとから出ようとしていた山本が、それを見つける。はっとして見詰め、すばやくあたりを見回し、足先で原稿をすみの方に寄せて走り出る。しばらく舞台はからになる。まもなく、山本がはいってくる。原稿の中からなん枚かとり、ポケットに
(023.jpg)

入れ、残りを、そこに置く。しかし、すぐとり出して、室

内を見回す。そして、黒板に歩み寄り、その後にかくそうとする。このとき、川口がはいってきて、山本の様子を守る。原稿をかくしてしまった山本は、振り返って、そこに川口の立っているのを見て驚く。

川口 君、今、何していたんだい。

山本 (とぼけて) 何もしてないよ。

川口 うそ言ったらあ。何か、かくしたね。

山本 かくしなんかしないよ。(知らぬ顔をして、窓から外をのぞく。)

川口 変だなあ。(と、黒板の方へ歩いて行く。)

山本 (あわてて川口をさえぎり) 変じゃないったら、何もしてないよ。

川口 だったら、とめなくったっていいじゃないか。

(川口、落ちている原稿に気づき、拾い上げる。)

川口 あ、これ……、関根君のだ。(川口、二、三枚めくってみて) これ、だいぶたりないぞ。(探ぐるように

山本を見る。)

山本 へえ、そうかい。

川口 (急に、きつとして) わかった。君、かくしたね。

山本 ……………。

川口 (無言で黒板に歩み寄り、後ろから、原稿を見

つけ出す。)

(このとき、ポケットをしきりに探がしながら、関根登場。中のふたりの様子を見てふしぎそうな顔をして、立ち聞きする。)

川口 (原稿を突きつけ) どうしてこんなことをしたんだ。

山本 (川口の顔をにらんだまま無言。)

川口 関根君が出られなくなったら、どうするんだ。

山本 (おこったように) 川口君、ぼく、君ひとりのために、こんなことしたんじゃないんだ。

川口 (はつとして、山本を見守る。)

山本 あしたは、君のおかあさんが、聞きにくることになっているんじゃないか。しかも病気なのに、無理してさ……。

(024 . jpg)

川口 ……………。

山本 あんなに、あしたを楽しみにしているおかあさんをつかりさせて、君はそれでもいいのか。

川口 (低い声で) 仕方がないさ。しかし、この次には出ることになったんだからね……。

山本 (声高く) この次って言ったって、それは来年のことだよ。ぼくだって、関根君の作文がうまいことは、

わかつてるんだ。だけど、それより、君の朗読を、おかあさんに聞かせてあげたかったんだ。

川口 ……………。

（立ち聞きしている関根、じつと考えこむ。）

山本 （川口に近より）さ、それ、ぼくによこせ。君は知らないことにすればいいんだ。責任はぼくが持つ。

川口 （顔をひきしめ、原稿を持っている手をひっこめる。）山本君、君の気持ちは、うれしいよ。だけど、それはいけない。

山本 わからずや、さ、みんなの来ないうちによこせったら。

川口 だめだ。

（山本、原稿を取ろうとする。川口は山本を振り切って逃げる。二人は、いすのまわりをぐるぐるまわる。そのとき、みんなの帰って来る足音、話し声が聞こえる。関根、そつと、その場を去る。級友たちが登場。川口、あわてて原稿を机の上に置く。山本は、仕方なく、ただ、だまっている。関根、遅れてはいつて来る。）

橋本 あら、山本さん、もう来ていたの。

友田 みんな、君を探してたんだよ。

山本 ごめん、ごめん。ちよつと用事があつた

(025 . jpg)

んだよ。



細井 (関根に向かって) 原稿なくしたって言ったが、見つかった？

関根 うん、その机の上に置き忘れていたんだよ。
(山本、川口、思わず顔を見合わせる。細井、橋本、島田、友田、机の方を見る。)

細井 ほんとだ。なくしたかと思って心配したよ。

島田 忘れんぼねえ。しっかりしてよ。

細井 じゃあ、おそくならないうちに、もう一度練習してもらおうか。

橋本 あしたのつもりでお願いします。(みんな、いすに腰かけて拍手する。)

関根 (朗読を始める。なんとなく元気がない。)

「ある秋の日。ぼくは武蔵野をたったひとりで歩いてた。遠くかすんだ山脈の一点を、まっすぐに見つ

けながら、ぼくは……ぼくは、」

細井 あ、ちよつと。そこ、「まつすぐに見詰めながら」じゃなかった？

関根 あ、まちがい。まつすぐに見詰めながら、ぼくは……（この辺から、どもったり、読みちがえたりし始める。）黒い土をふみしめ、ふみしめ、な、何も考えず、静かな、け、けしきにとろけこみ。」

山本 （大声で）そこ、まちがい。

関根 あ、「とけこみ、いつ穂の、」

山本 （大声で）「いな穂の、」

関根 「いな穂の、ささやきを、音楽のように、み、耳の底に、こくしつけながら、」

細井 「刻みつけ」だろう。

関根 あ、またちがった。「刻みつけながら……」ええと、ええと……（しばらくつまる。）

友田 （首をかしげながら）おかしいなあ。

橋本 （首をかしげながら）変ねえ。

島田 （首をかしげながら）どうしたのかしら。

山本 （立ちあがって）細井君、この調子で、あしただいじょうぶか。

細井 関根君、どうしたんだ。

(026.jpg)

関根 （下を向いて）うん、……ぼく、ときどきこ

んなふうになるくせがあるんだ。

細井　ふうん、あした　だいじょうぶかい。

関根　どうも、自信がないなあ。

川口　ま、もう少し読んでみなくちゃあ。

関根　うん。(続ける)「歩るいて　い、行つた。な、

何かしら心に満ちた　も、ものを感じ……」ええと……

(また、つまる。)

山本　(強く)細井君、あしたは、やっぱり川口君に

出てもらつた方がいいと思うな。もし、そのくせが出たら

困るよ。

細井　どうも、おかしい。困つたなあ。

山本　(関根に向かい)君、それで、あしただいじょ

うぶかい。

関根　(はっきりと)ぼく、このくせが出ると、すぐ

には直らないんだ。

山本　じゃ、あしたは、あぶないね。

関根　うん。

川本　それじゃ、調子の決まっている川口君に出て

もらおうよ。

関根　細井君、ぼく、これじゃ出られないよ。川口君

にしてくれよ。

細井　残念だなあ。みんな、どうしよう。

橋本　そうねえ。川口さんは練習済みだから、やっぱ

り、川口さんに出てもらいましうね。

島田　しかたがないわね。そうしましう、惜しいけど。

細井　よし、なんべんも変えて悪いけど、川口君ということに、決め直そう。川口君、いいかい。

川口　ぼくはいいよ。だけどせつかく関根君ということになったのに、関根君、どうしてもだめ？

関根　残念だけど……。

細井　それじゃ、川口君にお願いしよう。いいね、川口君

橋本　川口さんは、練習ずみだから、もういいでしょう。

細井　そうだ。帰ろう。あしたは会場の準備もあるから、みんな早く来いよ。

(027.jpg)

山本　ようしきた。

帰りじたくをして、「じゃ、あした。」「川口、しつかり頼むぜ。」「ぼくたちのクラスが入賞するさ。」などと言いながら、にぎやかに退場。関根、ひとりだけ、ぼんやりと腰かけたまま。山本、関根の方を見ながら、最後に室から出る。しかし、関根のことが気になって、ひきかえし、そつ

と、入口からのぞき見をする。——間——。教室が次第に暗くなる。遠くから、オルガンの音。と、今まで、さびしそうにすわっていた関根、いきなり立ちあがり、(両手を腰に当てて)

関根 (大きな声で)「我は海の子、白波の、さわぐいそべの松原に」(と歌いだし、教室の中を歩き始め、はつきりと)「ある秋の日、ぼくは武蔵野を、ただひとり歩いてきた。遠くかすんだ山脈の一点を、まっすぐに見詰めながら、ぼくは、黒い土をふみしめふみしめ、何も考ええず、(暗唱を進める。のぞいていた山本、はっと気付いた様子で、思わず教室の中にはいる。)あたりの けしきにとけこみ、いな穂のささやきを、音楽のように耳の底に刻みつけながら歩いて行った。」

出本 (思わず)関根君!

関根 (振り向いて)あつ、なんだ、山本君か、びつくりしたよ。まだ帰らなかつたの。

山本 (口ごもりながら)君は……、君は……、(いきなり、頭をぴよこんと下げて)ごめん。許してくれ。

関根 (困った様子で)なんだ。どうしたんだ。

山本 (関根をじつと見詰める。やがて、鼻声で)関根君、ありがとう。君は、ぼくと川口君との話を聞いていたんだね。(泣き声になる。)ぼく、川口君のおかあさんに聞かせてあげたかったんだ。川口君のおとうさんは、ずっ

と前に死んで、親ひとり子ひとりなんだ。おかあさんが、とても川口君をかわいがっているんだよ。それで、それで、ぼく、あんなことをしたんだ。どうか、ぼくを許してくれ。(泣く。)

関根 (山本の肩をだきながら) いいんだよ。いいんだよ。ぼくも、そんなこと知らないもんだから……、ごめんね。

(028 . j p g)

(二人は、しばらく、そのまま、だまっっている。)

関根 (明るく) 山本君と川口君、いつから友だちなの。

山本 (泣くのをやめて) 小学校から……。

関根 (うらやましそうに) 仲がいいんだなあ。

山本 うん、ずっと、いっしょなんだ。

関根 (ちよつと考えてから) ねえ、山本君、ぼく、こつちに来て間がないので、まだ、親友がひとりもないんだ。ぼくを仲間に入れてくれない？

山本 (うれしそうに) 本当かい？

関根 本当さ。

山本 (いきなり) 握手っ！ (と、関根の手を握る。)

関根 (とびあがって) あっ、痛いなあ！

山本 (明るく) あのね、ぼくも、そう思ってたんだよ。

関根 (にっこりして) そうかね。だけど、痛い握手だなあ。

山本 そうだ。これから、ふたりで、すぐ川口君のうちへ行こう。

関根 これから？

山本 君が仲間入りすることを話すんだ。喜ぶよ、川口君も。

関根 よし、行こう。だけど、ぼくがしてもらえないこと、言っちゃだめだよ。

山本 まだ、うそをつくのか(ふざけて)この、にせどもりっ。(と、打つまねをする。)

関根 (軽く逃げて) にせじゃないよ。ほらね。(と、原稿を持ち、)「す、すっかり落ち着いた秋の、い、色に変わり、し、静かに、か、語り合っているようだ、だ、だった。」

山本 (笑いだして)「だだだった」なんて、そんなの
ないよ。

関根 (笑って) そうかなあ。(こんどは、まじめに)
「そうして、ぼくの心も、次第に静まり、自然の中にとけ
こんでいった。」

(029.jpg)

(と、暗唱が終わり、そのままじっとしている。山

本も、関根の顔を見詰めたまま動かない。オルガンの音が遠くからきこえてくるうち、静かに幕。

—高田春雄（たかたはるお）の文による—

文学作品を読む

文学作品から受ける感動は、芸術的な感動でしょうが、それだけでは言い尽くせない要素があります。それは、人生を具体的に表現するものだからです。すぐれた作品は、強く感じさせるものばかりでなく、深く考えさせるものを持っています。文学作品を読んで深く味わいましょう。



一イアラ

文学作品を読む

文学作品から受ける感動は、芸術的な感動でしょうが、それだけでは言い尽くせない要素があります。それは、人生を具体的に表現するものだからです。

すぐれた作品は、強く感じさせるものばかりでなく、深く考えさせるものを持っています。文学作品を読んで深く味わいましょう。

一 イアラ

一 イアラ ジョゼー・デ・アレンカル

ある夏の美しい午後であった。ドン・アントニオ・デ・マリスは、家族と共にパケケル川のほとりで、楽しいひとときを過ごしていた。

そこは、ふたつの岩山にはさまれた低地であった。芝草は、じゅうたんを敷き詰めたように土をおおい、岩山の木は、谷間に傾いて、緑色の日がさを差しかけ、まるで絵のような美しさであった。

ドン・アントニオは、びろうどを張ったように青くすんだ空に見とれていた。めいのイザベルは、清らかな小川の流れに見入っていた。娘のセシリアは谷間の低い空に、じ色の光を振りまきながら飛びかうはちどりを追いかけていた。生き生きとほおを輝かせて……。

セシリアは、やがて疲れを覚え、柔らかなく茂った山すその芝草にからだを横たえた。頭を岩の上に載せ、両足を伸

ばすと、足首は芝草のじゅうたんの中にかくれた。こうして、しばしの時が過ぎた。突然、緑の日がさの上から、鋭い叫び声が聞こえてきた。

「イアラ！」

それは、「セニヨラ」という意味のグワラニー語である。ドン・アントニオは、がぼとはね起きて、あたりを見回した。岩山を見あげた、彼の目にうつった光景―岩山に、しっかりと足をふまえた若い土人が、今まさに、くずれ落ちようとしている岩を、たくましい腕に受け止め、全力を振りしぼって、その重みに耐えていた。―一瞬、岩と若者はたまのようになって、身を横たえている少女の上に、どつとばかりに落下する、と思われた。不意に聞こえた叫び声に、少女は顔をもたげたが、身に迫る危険も知らず、

(新ポル語 l a r a / J o s e d e A l e n c a r
/ D o n A n t o n i o d e M a r i z / P a q
u e q u e r / I s a b e l / C e c i l i a / s e n
h o r a / g u a r a n i)

(031.jpg)

走り寄る父の顔を振り仰いだ。

ドン・アントニオが、両手にしっかりと少女をだきあげ、すばやくその場から母のかたわらに移したとき、彼の

前に、土人はひらりと飛びおりた。土人のささえていた岩は、勢いよくころげ落ち、今の今まで、少女が身を横たえていた所に、地ひびきをたててめりこんだ。ただ声もなく立ちすくんでいた親子は、過ぎた危急に思い至って、初めてその恐ろしさに悲鳴をあげた。

ドン・アントニオは、まっさおな顔をして、身をおのかせながら、神のようにいきなり現われた土人に目を向けた。いったい、自分が何に感動したのか、彼には、しばらくわからなかった。くずれ落ちる岩をささえた土人の力に対してなのか、それとも、娘の命を助けてくれた土人の行ないに対してなのか、判断に迷うほどであった。

土人たちは、意味もなく、悪者扱いにされているが、ドン・アントニオは、彼らの気質をよく知っていた。彼らは、戦いのときのほかは、すべての者に心をやさしく、いい行ないをするのである。ドン・アントニオには、この若い土人が、岩をささえてくれた気持ちがあふしぎではなかった。

この思いもかけぬでき事に、みんなは、しばらくものも言えなかった。母のラウリアナとイザベルは、地にひざまづいて、神に感謝の祈りをささげた。まだ恐ろしさに身ぶるいしている少女セシリアは、父の胸に寄りそい、そつと父の手にくちびるを当てた。

ドン・アントニオは、娘のからだをかかえたまま、土人の方へ歩み寄って行った。そして、親しみをこめて手を差

し伸ばた。それまで、自分が救った少女をじつと見詰めていた土人は、腰をかがめて、その手にくちびるを当てた。ドン・アントニオは、グワラニー語でたずねた。

「おまえは、どの種族なのか。」

「ゴイタカー」

若い土人は、胸を張って答えた。

「おまえの名は？」

「アラレーの子、ペリー。わたしは、村一番の勇士です。」

(新ポル語 Lauriana / goitaca Arare Perri)

(032.jpg)

「わたしは、ポルトガルの貴族、この国を治める者だ。そして、おまえたちが敵とする白人だ。それなのに、……………」
ありがとう。おまえは、わたしの娘を救ってくれた。わたしの友だちになってくれるか。」

「喜んで……。それに、あなたは、ずっと前から、わたしどもの味方でした。」

「味方とは。」

「お聞きください。」

ドン・アントニオが、ふしぎそうにたずねたところ、若者は、次のようなことを物語った。

それは、木々の葉が こがね色になる季節のことであつた。ゴイタカーの首領、アラレーのからだは、土深くほおむられた。ただ一つ愛用の弓だけを残して。

ペリーは、戦士たちをみんな呼び集めた。

「父は死んだ。父の弓は、村一番の勇士に与えよう。さあ戦いだ！」

「戦いだ！」

勇みたった戦士たちは、戦いを求め、白人の村を日ざして行進した。ほのぼのと日が出るころ、ペリーたちは、目ざす所にたどり着いた。そして戦った。夜どおし、戦いは行なわれ、血は流れ、火が放たれた。ペリーが、父アラレーの弓を休ませたとき、白人の村には、だれひとり生きている者はなく、家はことごとく灰になっていた。

夜が明けた。太陽は輝き、さわやかに朝風が吹いてきた。この戦いで、ペリーは村一番の勇士、戦士中の戦士とたたえられ、父の弓を受けついだ。

ペリーの母は言った。

「ゴイタカーの首領となつたペリー。おまえは、その父のように偉く、父のように 勇ましい。」

戦士たちは言った。

「アラレーの子ペリー。ゴイタカーの首領、おまえこそ、村一番の戦士だ。われわれは、どこまでもおまえに従おう。」

女たちも言った。

(033.jpg 挿絵あり)

「村一番の勇士ペリー。太陽のように美しく、野の、ふじつるのようになやかなペリー。わたしたちも、あなたの命令に従います。」

ペリーをほめたたえる声は続いた。だが、彼はじっと聞いているだけであった。彼の胸には、別のことが思い浮かんでいた。過ぎた戦いときであった。ペリーは、炎に包まれた家の中に、一人のセニョラを見た。かの女は、月の娘のように清く、白さぎのように美しかった。ひとみは青空のようにすみ、髪は太陽のように輝いていた。

それから後、ペリーは、毎晩セニョラの夢を見た。夢の中のセニョラは、ある夜、彼に言った。

「ペリーよ。おまえはわたしの召使だ。わたしのあとについておいで。」

だが、かの女は天からおりて来ないし、ペリーは天へのぼることができない。ペリーの心は、葉の落ちたカジューの木のようにさびしかつた。

やがて、木々の緑は増し、サビアーが楽しげに歌う季節がやって来た。戦いときが来たのである。ペリーたち戦士は、勇ましく村を出て行った。しばらくして、大きな川のほとりに到着した。戦士たちは、夜営の準備をし始めた。ペリーは川岸で、沈みゆく太陽をながめていた。

たか が空をかすめて飛んだ。もし、ペリーがたかであつたら、天にのぼってセニヨラに会いに行くだろう。風が吹き過ぎた。もし、ペリーが風であつたら、空高くセニヨラと共に遊んだであろう。雲の影が川にうつった。もし、ペリーが影であつたら、セニヨラのあとに従つたであろう。

もの思いにふけているペリーのそばに母がやって来た。そして、過ぎた昔の戦いの話をした。その話の中で、こんなことを言った。

「……………その戦いするとき、わたしは運悪く 捕われの身となつた。ところが、ある白人の戦士と、その娘がわたしの命を助けてくれたのだよ。」

それを聞いて、ペリーは思った。母の命を助けてくれた白人の戦士に会い、その娘の召使になろうと……………。ペリーは弓矢を取って立ちあがり、その場から旅立つた

(新ポル語 C a j u / s a b i a)

(034 . j p g 挿絵あり)
のであつた。

太陽が空高くのぼつたころ、はるかにカザ・グランデが見えてきた。緑の芝草に白人の家族が遊んでいた。その中の少女は、ペリーがたびたび夢に見たセニヨラそっくり

であつた。

「おお、セニョラ。あなたは、月のおかあさんから地上におりることを許してもらつたのですか。太陽の子ペリーは、どこまでもあなたにお仕えします。」

こう言おうとして、ペリーは少女の方へ歩いて行つた。そのとき、岩山の岩がくずれて、少女の上に落ちかかろうとしたのであつた。

語り終わつたペリーは、はればれと顔を輝かせた。

「あなたは、その昔、わたしの母を救ってくれた人です。わたしは、そのご恩返しをしたのです。」

「二人は、ずっと前から友だちだつたわけだ。」

「そうです。わたしの友情の印として、この弓を受け取ってください。父のかたみの弓です。」

ペリーは、ひざまずいて、ドン・アントニオに、うやうやしく弓を差し出した。

ジヨゼー・マルチニアノ・デ・アレンカル

ブラジルの小説家、詩人、ジャーナリスト、政治家、法律家。

一八二九年、セアラ州のメセジアナ市に生まれ、一八七七年、リオ・デ・ジャネイロ市で死亡した。法科大学卒業後、弁護士を開業、後、代議士となり、一八六八年司法大臣に就任。片方、文筆に親しみ、多くの小説、詩を発表した。おもな作品に、「イラセマ」「オ・グアラニー」「オ・トロ

シコ・ド・イペー」などがある。

(新ポル語 c a s a i g r a n d e)

二子鹿物語



二子鹿(こじか)物語

マージョリ・キナン・ローリングス

雨の来そうな空模様で、むしむしとする暑い日でした。西の空では、まだ夕日のなごりが雲を赤く染めていました。はだしで踏む砂は、火のように熱くなっていました。

野ぶどうの つるが一本、道を横切ってはっていました。父のペニーは、身をかがめて、それを押しつけようとしました。そのとき、何かの影がひらめいたと思うと、ペニーが、「あつ」と叫んでうしろへよろめきました。

「あとへさがれ、犬を押えろ。」

石のように動けなくなっていたジョディは、初めて後ろへとびさがって、犬の首を押えました。

一匹の　　すずへびが、ひざの高さまで、そのひらべったい　　かま首をもたげて、左右に動かしています。しつぽが無気味な音をたてています。

ペニーは、後ろへさがり、頭をねらって発砲しました。へびは、頭を砂にうずめてのびてしまいました。

ペニーは、ジョデイの顔を見ました。

「こいつにやられたんだ。おれは、死ぬかもしれぬ。」
ペニーの顔は土色に変わり、右腕のかまれた傷口からは、血がしたたっていました。なんと思っただのか、ペニーは、ぐんぐん林の奥へ向かって歩き出しました。ジョデイは、あとからついて行きました。しばらく行くと、がさがさという音がして、一匹の雌じかが目の前に出てきました。

ペニーは、いきなり鉄砲でその雌じかを撃ち殺しました。そして山刀で、その腹を開き、肝臓を切り取りました。それから自分の腕の傷口を切り開きました。黒ずんだ血があふれ出しました。彼は、肝臓を傷口に押し当てました。肝臓は、見る見る

(036.jpg)

うちに、毒々しい緑色に変わっていきました。

「おれは、うちへ帰る。おまえは、フオレスターの所へ行って、だれかに、医者を　呼びに行ってもらってくれ。」
ペニーは、立ちあがって、道の方へ引き返し始めました。

そのとき、さらさらと、木の葉のすれ合うような音が聞こえたので、ジヨデイは振り返ってみました。すると雌じかの死体のそばに、一匹の子じかが立っていました。

「おとうさん、あの　　しか　　は子どもを連れていたんだよ。」

「かわいそうだが、仕方がない。さあ、早く行こう。」

ジヨデイは、そのまま立ち去ることができませんでした。子じかが、かわいそうでしたまららないのです。

「おい、早く行かないか。」

言われて、ジヨデイはフォレスター家へ向かって走り出しました。

フォレスター家に着いて、「おとうさんが、へびにかまれた。」と、ひとこと言っただけで、フォレスターの兄弟たちは、すぐ動き出してくれました。三番目の弟のミル・ホイールが、医者を迎えに、二番目のバックは馬に乗って、ペニーを家に連れて行ってくれることになりました。ジヨデイは「どうか、おとうさんが死なないように。」と、一心に祈りながら、降りだした雨の中を、ずぶぬれになって帰りました。

ジヨデイがうちへ帰ってみると、医者のウイルソン先生はもう来ていました。

ペニーは、バックに連れられて帰り、ベッドに寝ていま

した。ペニーの容体は、一進一退で、助かるか、助からないか、ウイルソン先生にも判断がつきませんでした。

夜がふけました。風が激しく吹いて、窓をがたがたと鳴らしました。ジョディは、子じかのことを思い出しました。—おおかあさんをなくして、あの子じかは、この雨と風との暗やみの中で、どうしていることだろう。きっと、おなかですいているに違いない。たったひとりで、おおかあさんの死体に寄り添って、乳を飲ませてくれるのを待っているかもしれない。—考えているうちに、ジョディはたまらなくなり、

(037.jpg)

敷布の端に顔をうずめ、肩を振るわせて泣きました。

ジョディは、かわいそうな子じかの夢を見て、すすり泣きをしながら目をさました。雨はやんでいて、遠い松林の間に、青白い朝の光が縦じまのようにながめられました。

「やつ、これはありがたい。よくなったぞ。」
ペニーの容体を調べていたウイルソン先生が、大声でいきました。その声で、ジョディの母のオーリも目をさました。

「先生、どうしたのですか。」

「助かったんだよ。」

ペニーが、ぽっかりと目をあけました。

「死神様は、どこかへ行つてしまつたらしいな。」
と言つて、よわよわしく笑いました。

ウイルソン先生は、朝食をすませて帰つていきました。バックは、そのままバクスター家に残つて、ペニーが起きられるようになるまで、畑仕事を手伝つてくれることになりました。

ジョディは、林の中に残してきた子じかのが、どうしても忘れられませんでした。食事がすむと、父のベッドのそばへ行きました。

「おとうさん、あの雌じかと子じかのこと覚えている？」
「

「覚えているとも、あの雌じかのおかげで、おれの命が助かつたんだからな。」

「ねえ、おとうさん、あの子じか、まだ、あそこにいるかしら。きつと、おなかをすかしているだろうね。」

「そうだな。」

「ぼく、あの子じかをうちへ連れて来て、育ててやりたいんだけど……。」

ペニーは返事をしないで、てんじょうをじつと見ていました。

「ぼくたち、あの子じかから、おかあさんを取りあげたんだ。かわいいそうじゃないの。」

「そうだ。たしかにおまえの言う通りだ。あの子じかを飢え死にさせるのは、恩知

(038 . jpg 挿絵あり)
らずだ。」

「ぼく、子じかを探して来ていい？」

「まあ、いいだろう。おかあさんに聞いてごらん。」

ジョディは、母のオーリの所へとんでいきました。母は、父の許しが出たと聞いて、いやいやながら承知しました。

ジョディは、林の中に分け入りました。そして、雌じかを殺した所に来ました。

ジョディは、あたりを見回しましたが、子じかの姿は見えませんでした。彼は、子じかの足あとを根気よく探しました。そして、少し離れた木の根もとに、小さい足あとをやっと見つけました。彼は、その足あとを見失うまいと、地面をはいながら進んで行きました。すると、鼻先にうずくまっている子じかに、いきなりぶつかりました。ジョディは、びっくりして地面にぺったりすわってしまいました。子じかは、頭を上げて彼の顔を見ました。うるんだ目をして、全身を振るわせていました。ジョディは、逃げられるのが心配で、からだを動かすこともできませんでした。彼は、小さな声で言ってみました。

「ぼくだよ。ね。」

子じかは鼻を上げて、彼のおいをかぎました。彼は、

そつと片手を伸ばして、子じかの首に載せました。それから、子じかのからだど、自分のからだどが、ぴったりとくつつく所までにじり寄って、子じかのからだに、静かに両腕をまわしました。子じかは、ぶるっと身ぶるいをしましたが、そのままじつとしていました。彼は、子じかのわき腹をなでてやりました。

ジョディは、子じかをだき上げて、ゆっくり立ちあがりました。それから、そつと地面へおろし、振り返り、振り返り歩いてみると、子じかは、ひよろひよるとあとからついて来ました。

(かわいいやつ!) ジョディは、すぐまた、だき上げました。それからは、歩かせたり、だいたりして、とうとううちへ連れて帰りました。

(039 . jpg 挿絵あり)

「おとうさん、連れて来たよ。見てごらん。」

「おお、よかったな。」

ジョディは、子じかにミルクを飲ませてから、家の裏手の物置き小屋に寝床を作ってやりました。

ペニーの回復は、はかばかしくありませんでした。どうやら起きていられるようになりましたが、まだ力仕事は無理でした。けれども、バックがよく働いてくれるので、バクスター農園の仕事は、例年より はかどりました。ジョディも、よく手伝いました。そして、何をするときも、

子じかがついて回りました。

子じかは、ジヨデイがかけ出すと、頭を振り上げ、元気よくあとから走って行きます。彼は、ひと仕事すますと、子じかと草地をころがり回って遊びました。そんなとき、これまで知らなかった幸福な思いが、ジヨデイの胸をいっばいにしました。

ある日、夕食のあとで、ペニーが言いました。

「ジヨデイ、おまえの所の赤ん坊に、もう名まえをつけてやったのかい。」

「ぼく、考えているんだけど、なかなかいい名まえがないんだよ。」

バックが口を出しました。

「ジヨデイ、うちのフオダ・ウイングに頼んでみな。そういうことにかいたら、あの子に限るんだから。いま病気で寝ているから、見舞いがてら行って頼んでみな。」

ジヨデイは、なるほどと思いました。なるべく良く、フオダ・ウイングの所へ行って、子じかの名まえをつけてもらおうと思いました。

その晩、バックは、弟の病気が気になるといって、帰って行きました。

海のように広い芋畑で、ジヨデイは草取りをしています。子じかが彼の回りをはね回っていていせず。きょうは昼前に仕事すすめば、午後からフオダ・ウイングの所へ遊びに

やってもらえるはずで

(040 . j p g 挿絵あり)

した。

昼食後、ジョデイは子じかを連れて、フオレスター家へ出かけました。門をはいると、彼は大声でどなりました。

「フオダ・ウイング、ぼくだよ。ジョデイだよ。」

しかし、フオダ・ウイングのうれしそうな顔は現われませんでした。家全体が、妙に静まり返っています。入り口の階段の所へ近づいたとき、バックがぼんやりした顔をして、出て来ました。

「バック。ぼく、フオダ・ウイングに子じかを見せに来たんだよ。」

「おそ過ぎたよ、ジョデイ。弟は、けさ死んじゃった。」

ジョデイは頭のしんが、しびれたようになって、ものも言えませんでした。

「まあ、はいつて会ってやってくれ。」

ジョデイは、家の中にはいりました。フオダ・ウイングの母が、しょんぼりとベットのそばに腰かけていました。

バックが言いました。

「ジョデイ、何か言ってやってくれ、もう、あれには聞こえやしないだろうが。」

だが、ジョデイは、のどが詰まって声が出ませんでした。彼は、バックの広い胸にしがみついて、わっと泣き出しま

した。

彼は、フォレスター家の人たちといっしょに夕食のテーブルに着きました。

「ぼく、フォダ・ウイングに、子じかの名まえをつけてもらおうと思って来たんだよ。」

「子じかの名まえなら、あの子は、もう、ちゃんとつけていたよ。しっぽが白くて、フラッグ（旗）みたいだから、フラッグって名まえがいいってね。」

フォダ・ウイングの母は、こう言って、そつと涙をふきました。

ジョディは、心の中で、くり返してみました。――フラッグ、フラッグ――。

(041.jpg)

すると、胸が張り裂けるような気持ちになりました。フォダ・ウイングは、ぼくの子じかの名まえを考えてくれたのだ。それなのに、もうこの世にいないのだ。

彼は涙があふれそうになったので、逃げるように、夜の庭に出て行きました。

彼は、小さな声で「フラッグ」と呼んでみました。子じかは、すぐどこからか、かけて来ました。彼は、子じかが前から自分の名まえを知っていたような気がしてなりませんでした。

夜十時ごろ、馬のひずめの音がして、ペニーがやって来

ました。ジョデイが帰らないので心配して迎えに来たのでした。翌朝、バクスター親子は、フラッグを連れて、フォダ・ウイングの葬式に参列して後、うちに帰っていききました。フラッグは、馬のうしろから元気よくかけて行きました。

八月にはいって、暑さはいよいよよきびしくなりました。太ったオーリは、毎日ふうふう言っていました。

ペニーは、どうにか元のからだになって、畑仕事をしても狩りに出ても、差しつかえがなくなりました。バクスター家は無事に、実りの秋を迎えることができそうでした。

とうもろこしのできは上々でした。ふじ豆がよくできて、ペニーが撃ってくる鳥・や獣の肉といっしょに、食卓をにぎわせました。

フラッグは、日増しに大きくなって、背中のみだらが、だんだん薄くなっていきました。このごろでは、ドアのかけ金を自分ではずし、勝手にこのこ家の中にはいって来ます。まくらを食い破って羽根をまき散らしたり、こしらえかけのプデインを食べてしまったり、ちつとも油断ができなくなりました。

九月の初めに、一週間以上も、ひどい日照りが続いたかと思うと、そのあとで、ものすごい台風がやって来ました。まる一週間、暴風雨が続き、八日目になって、やつと

静まりました。

あかあかとした日が、湿った大気の向こうから差ししてきました。ペニーは、窓や戸口をすっかり明け放しました。ジョディはフラッグといっしょに、階段をかけおりました。

農園は、水に押し流されて、むざんに荒れ果てていました。家の前にペニーと並

(042 . jpg 挿絵あり)

んで立ったオーリは、荒れ果てた畑を見ると、エプロンを顔に当てて泣き出しました。

台風がやんで二日目に、バックとミル・ホイールが馬に乗ってやって来ました。ペニーとジョディは、この二人と、回りの土地が台風のために、どんなに変わったかを調べに出かけました。

丘の松の木は根こぎにされ、危く立っている木も、みな西に傾いていました。丘を下る道は、まんなが水のためにえぐられて、谷のようになっていました。草地は沼になって、スカンクやふくろねずみのような小動物が、たくさん死んでいました。

「くまやおおかみ のえさがなくなったってわけだな。」

ペニーがつぶやくのを聞いて、ジョディは、小屋に閉じこめてきたフラッグのことが心配になってきました。

その後、二週間、バクスター家は、あらしでいたためつけ

られた作物を助けることにかかり切りでした。幸いにと
うもろこし、麦、さつまいもなど、思ったほどひどくは痛
んでいませんでした。

そのころになって、林の中で山ねこだとか しかだとか
かが、次々と病気になり、死んでいきました。黒舌病（こ
くぜつびよう）という流行病が野獣の間にはやりだした
のです。

ジョディは、フラッグの顔を自分の顔に押しつけて言
いました。

「おまえ、病気などにかかるんじゃないよ。沼の水なんか、
飲んじゃだめだよ。」

彼は、もしフラッグが死ぬようなことがあれば、自分も
いっしょに死んでしまおうと思いました。そう思うと、い
くらか気持が落ち着きました。

黒舌病のため、動物が少なくなったので、生き残った猛
獣どもは、えさに困りました。そして、農園の回りをうろ
ついて、家畜をねらうようになりました。バクスター家で
は、がんじょうな おりを作って、ぶたをその中に囲いま
した。

(043 . jpg 挿絵あり)

十一月にはいってまのないある晩のことでした。大ぐ
まが現われて、いちばん太っている ぶたを さらって
行きました。バクスター家では、また くまにさらわれな

いうちに、というので ぶたを全部殺して、ハム、ソー
セージ、ベーコン、ラードなどにしてしまいました。

ジョディは、このごろ、毎日 とうもろこしを粉にひく
仕事をしていました。そして、その間に、国語や算数の勉
強をしました。フラッグが現われて顔を突き出すと、彼
は、石うすの穴についている粉をなめさせてやりました。

しかし、フラッグはもうイヤリング（一年子）になりか
けていて、じっとしていません。すぐどこかへ遊びに行っ
てしまいます。けれどもジョディは、ちつとも心配しませ
ん。自分が呼べば、どこからでもとんで帰って来ることを
知っているからです。

バクスター家には、満ち足りた空気がゆきわたって
いました。



三 清兵衛（せいべえ）とひょうたん

志 賀 直 哉（しがなおや）

これは、清兵衛という子どもと、ひょうたんとの話である。

このできごと以来、清兵衛とひょうたんとは縁が切れてしまったが、まもなく清兵衛には、ひょうたんに代わるものができた。それは、絵をかくことで、彼は、かつて、ひょうたんに熱中したように、いまは、それに熱中している。……………

清兵衛がときどきひょうたんを買って来ることは、両親も知っていた。三、四銭から十五銭ぐらいまでの皮つきのひょうたんを十ほども持っていたろう。彼は、その口を切ることも、種を出すことも、ひとりでじょうずにやった。

せん も自分で作った。最初、茶渋で臭みを抜くと、それ（044.jpg）から、父の飲み余した酒をたくわえて置いて、それでしきりにみがいていた。

まったく清兵衛の凝りようは激しかった。ある日、彼は、やはりひょうたんのことを考え考え浜通りを歩いて

いると、ふと目にはいった物がある。彼は、はっとした。それは、道ばたに浜を背にして、ずらりと並んだ屋台店の一つから、飛び出して来たじいさんの はげ頭であった。清兵衛は、それをひょうたんだと思つたのである。「りっぱなひょうじゃ。」こう思いながら、彼はしばらく気がつかずにいた。

―気がついて、さすがに自分で驚いた。そのじいさんは、いい色をした、はげ頭を振りたてて向こうの横町へはいつて行つた。清兵衛は急におかしくなつて、ひとり大きな声を出して笑つた。たまらなくなつて、笑いながら彼は半町ほどかけた。それでも、まだ笑いは止まらなかつた。これほどの凝りようだったから、彼は、町を歩いていれば、こつとう屋でも、やお屋でも、荒物屋でも、駄菓子屋でも、また専門にそれを売るうちでもおよそひょうたんを下げた店といえ、必ずその前に立つてじつと見た。

清兵衛は十二才で、まだ小学校に通つている。彼は、学校から帰つて来ると、ほかの子どもとも遊ばずに、ひとりよく町へひょうたんを見に出かけた。そして、夜は茶の間のすみにあぐらをかいて、ひょうたんの手入れをしていた。手入れがすむと酒を入れて、手ぬぐいで巻いて、かんにしまつて、それごとこたつへ入れて、そして寝た。翌朝は起きるとすぐ、彼は、かんにあけて見る。ひょうたんのはだはすっかり汗をかいている。彼は、飽かずそれをなが

めた。それからいいねいに糸をかけて、日の当たる軒へ下げ、そして学校へ出かけて行った。

清兵衛のいる町は、商業地で、船着き場で、市にはなっていたが、わりに小さな土地で、二十分歩けば、細長い市の、その長い方が通り抜けられるくらいであった。だから、たとえば、ひょうたんを売るうちは、かなり多くあったにしろ、ほとんど毎日、それらを見歩いている清兵衛には、おそらく、すべてのひょうたんは、目を通されていたろう。

彼は、古（こ）ひょうには、あまり興味を持たなかった。まだ、口も切っていないような皮つきに興味をもっていた。しかも、彼のもっているのは、おおかたいわゆるひょうたん形の、わりに平凡なかつこうをした物ばかりであった。

(045.jpg 挿絵あり)



「子どもじゃげえ、ひょういうたら、こういうんでなかにやあ、気にいらんもんとみえるけのう。」

大工をしている彼の父をたずねて来た客が、そばで、清兵衛が熱心に、それをみがいているのを見ながらこう言った。

彼の父は、

「子どものくせに、ひょういじりなぞしおって…。」
と にがにがしそうに、その方をかえりみた。

「清公。そんなおもしろくないのばかりえっと持っとなつてもあかんぜ。もちつと 奇抜なんを買わんかいな。」
と、客が言った。

清兵衛は、

「こういうが、ええんじや。」
と答えてすましていた。

清兵衛の父と客との話は、ひょうたんのことになっていった。

「この春の品評会に、参考品で出ちよつた馬琴（ばきん）のひょうたんというやつは、すばらしいもんじやつたのう。」

と、清兵衛の父が言った。

「えらい、おおけえひょうじやつたけのう。」

「おおけえし、だいぶ長かつた。」

こんな話を聞きながら、清兵衛は心で笑っていた。馬琴の

ひょうとうというのは、そのときの評判な物ではあったが、彼はちよつと見ると、――馬琴という人間は、何者だか知らなかったし――すぐ、くだらないものだと思つて、その場を去つてしまった。

「あのひょうは、わしにはおもしろうなかつた。かさばつとるだけじゃ。」

彼は、こう口を入れた。それを聞くと、彼の父は、目を丸くしておこつた。

「なんじゃ。わかりもせんくせして、だまつとれ。」

清兵衛は、だまつてしまった。

(046 . jpg 挿絵あり)

ある日、清兵衛は裏通りを歩いていて、いつも見なれない場所に、しもた屋の格(こう)子(し)先に、ばあさんが干しがきや、みかんの店を出して、その後ろの格子に二十ばかりのひょうたんを下げて置くのを発見した。彼は、すぐ、

「ちよつと、見せてつかあせえな。」

と寄つて、一つ一つ見た。中に一つ、五寸ばかりで、一見ごく普通な形をしたので、彼には、振るいつきたいほどにいいのがあった。彼は、胸をどきどきさせて、

「これ、なんぼかいな。」

と聞いてみた。ばあさんは、

「ぼうさんじゃけえ、十銭にまけときやんしょう。」

と答えた。

彼は、息をはずませながら、

「そしたら、きつと、だれにも売らんといて、つかあせえのう。すぐ銭持って来やんすけえ。」

くどく、これを言って、走って帰って行った。

まもなく、赤い顔をして はあはあいながら帰って来ると、それを受け取って、また走って帰って行った。

彼は、それから、そのひょうが離せなくなった。学校へも持って行くようになった。しまいには、時間中でも、机の下でそれをみがいしていることがあった。それを、受け持ちの教員が見つけた。修身の時間だっただけに、教員はいつそうおこった。

「どうてい、将来見込みのある人間ではない。」

こんなことまで言った。そして、そのたんせいを凝らしたひょうたんは、その場で取り上げられてしまった。清兵衛は、泣けもしなかった。彼は、青い顔をしてうちへ帰ると、こたつにはいって、ただ、ぼんやりとしていた。

そこへ、本包みをかかえた教員が、彼の父をたずねてやってきた。清兵衛の父は、仕事に出てるすだった。

「こういうことは、ぜんたい家庭で取りしまっていたくべきで……………」

(047.jpg)

教員は、こんなことを言って、清兵衛の母にくっつかかっ

た。母は、ただただ恐縮していた。

清兵衛は、その教員が恐ろしくなつて、くちびるを振るわせながら、へやのすみで小さくなつていた。教員のすぐ後ろの柱には、手入れのできたひょうたんが、たくさん下げてあつた。いま気がつくか、いま気がつくかと、清兵衛はひやひやしていた。

さんざん　こごとを並べたあと、教員は、とうとうそのひょうたんには気がつかずに帰つて行つた。清兵衛は、ほつと息をついた。清兵衛の母は、泣き出した。そして、だらだらと　ぐちっぽいこごとを言い出した。

まもなく、清兵衛の父は、仕事場から帰つて来た。で、その話を聞くと、急に、そばにいた清兵衛を捕えて、さんざんになぐりつけた。清兵衛は、ここでも、「将来とても見込みのないやつだ。」と言われた。

「もう、きさまのようなやつは、出て行け。」
と言われた。

清兵衛の父は、ふと柱のひょうたんに気がつくつと、げんおうを持って来て、それを一つ一つ割つてしまった。清兵衛は、ただ青くなつてだまっていた。

さて、教員は、清兵衛から取り上げたひょうたんを、けがれた物でもあるかのように、捨てるように、年よつた学校の小使にやつてしまった。小使は、それを持って帰つて、くすぶつた小さな自分の　へやの柱へさげて置いた。

二か月ほどして、小使は、わずかの金に困ったときに、ふと、そのひょうたんをいくらでもいいから、売ってやろうと思いたって、近所のこつとう屋へ持って行って見せた。こつとう屋は、ためつすがめつ、それを見ていたが、急に冷淡な顔をして、小便の前へ押しやると、

「五円やったら、もろうとこう。」
と言った。

小便は驚いた。が、賢い男だった。何食わぬ顔をして、「五円じゃ、とても離し得やしえんのう。」

(048 . jpg 挿絵あり)
と答えた。

こつとう屋は、急に十円にあげた。小便は、それでも承知しなかった。結局、五十円で、ようやくこつとう屋は、それを手に入れた。―小使は、教員から、その人の四か月分の月給を、ただもらったような幸福を心ひそかに喜んだ。が、彼は、そのことは、教員にはもちろん、清兵衛にも、しまいまで、まったく知らん顔をしていた。だから、そのひょうたんのゆくえについては、だれも知る者がなかったのである。

しかし、その賢い小便も、こつとう屋が、そのひょうたんを地方の豪家に六百円で売りつけたことまでは、想像もできなかった。

……清兵衛は、いま、絵をかくことに熱中している。彼には、もう、教員を恨む心も、十余りの愛ひようを、げんので割ってしまった父を、恨む心もなくなっていた。しかし、彼の父は、もうそろそろ彼の絵をかくことにものごとを言いだしてきた。

作家、芸術院会員。一八八三年、宮崎県に生まれ、まもなく両親と共に上京した。東京大学中途退学後、著作生活に入る。武者小（むしやこう）路実篤（じさねあつ）などと「白樺（しらかば）」を創刊し文学活動を始める。

おもな作品として、「暗行行路（あんやこうろ）」「城（き）の崎（さき）にて」「和解」「小僧の神様」「灰色の月」などがある。

四 魔術

芥川竜之介（あくたがわりゆうのすけ）

あるしぐれの降る晩のことです。わたしを乗せた人力車は、なんども大森かいわいのけわしい坂を、のぼったり、おりたりして、やっと竹やぶに囲まれた小さな西洋館の前に、かじぼうをおろしました。車夫の出したちょうちんの明りで見ると、インド人、マテイラム・ミスラと、日本字で書いた新しい瀬戸ものの表札がかかっています。

マテイラム・ミスラ君は、長年インドの独立を図っているカルカタ生まれの愛国者で、同時にまた、ハッサン・カンという名高いバラモンの秘法を学んだ、魔術の大家なのです。わたしは、ちようど、ひと月ばかり以前から、ある友人の紹介で、ミスラ君と交際していましたが、政治、経済の問題などは、いろいろ議論したことがあつても、魔術を使うときには、まだ一度も居合せたことがありません。

そこで、今夜は前もつて、魔術を使つてみせてくれるように、手紙で頼んでおいてから、当時ミスラ君の住んでいた、さびしい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たのです。

わたしは、雨にぬれながら、おぼつかないちょうちんの

明りをたよりに、呼びりんのボタンを押しました。すると、まもなく戸があいて、玄関に顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人のおばあさんです。「ミスラ君は、おいですか。」

「いらつしやいます。さきほどから、あなた様をお待ちかねでございます。」

おばあさんは、あいそよく、こう言いながら、すぐ、その玄関の突き当たりにある、ミスラ君の、へやへ、わたしを案内しました。

「今晚は、雨の降るのに、よくおいででした。」

色の黒い、目の大きい、柔らかな口ひげのあるミ

(050.jpg)

スラ君は、テーブルの上にある石油ランプの しんをやりながら、元気よく、わたしに あいさつしました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見できれば、雨くらいはなんともありません。」

わたしは、いすに腰をかけてから、うす暗いランプに照らされた陰気な へやの中を見回しました。

ミスラ君の へやは、質素な西洋間で、まんなかにはテーブルが一つ、壁ぎわに手ごろな書だなが一つ、それから、窓の前に机が一つ、――ほかには、ただわれわれの腰かけている いすが並んでいるだけです。しかも、その いすや机が、みんな古ぼけた物ばかりで、緑に赤く花模様を織り

出した、はでなテーブルかけさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目があらわになっていました。

わたしは、あいさつをすませてから、しばらくは、外の竹やぶに降る雨の音を聞くともなく聞いていました。やがて、あの召使のおばあさんが、紅茶を持ってはいつて来るとミスラ君は、葉巻きの箱のふたをあけて、「どうです、一本。」と勧めてくれました。「ありがとう。」と、わたしは遠慮なく、一本取って、マッチの火を移しながら、「たしか、あなたのお使いになる精霊は、ジンとかいう名まえでしたね。すると、これからわたしが拝見する魔術と、いうのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は、自分の葉巻きに火をつけると、にやにや笑いながら、においのよい煙をはいて、

「ジンなどという精霊があると思ったのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤナイトの時代のこととでもいましょうか。わたしが、ハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思えば、使えますよ。たかが進歩した催眠術に過ぎないのでから……。ごらんなさい、この手を。ただ、こうしさえすればよいのです。」

ミスラ君は、手を上げて、二、三度、わたしの目の前へ、三角形のようなものを描きましたが、やがて、その手をテーブルの上へやると、緑に赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。わたしはびっくりして、思わずいすを

ずり寄せながら、

(051.jpg)

よくよくながめました。たしかに、それは今の今まで、テーブルかけの中にあつた花模様の一つに違いありません。が、ミスラ君が、その花をわたしの鼻の先へ持つて来ると、ちようど じゃこうかなんかのように、重苦しいにおいさえするのです。

わたしは、あまりの ふしぎに、なんども感嘆の声をもらしますと、ミスラ君は、やはり笑つたまま、またむぞうさに、その花をテーブルかけの上へ落としました。

もちろん、落とすと、元どおり花を織り出した模様になつて、つまみ上げるどころか、花びら一つ自由に動かせなくなつてしまふのです。

「どうです。わけないでしょう。こんどは、このランプを
ごらんなさい。」

ミスラ君は、こういいながら、ちよいと、テーブルの上のランプを置きなおしましたが、そのひょうしに、どういうわけか、ランプはまるで こまのように、ぐるぐる回り始めました。それもちやんと、ひとところに止まつたまま、ほやを心棒のようにして、勢いよく回り始めたのです。初めのうちは、わたしも、きもをつぶして、万一火事にでもなつたら大変だと、なんどもひやひやしましたが、ミスラ君は、静かに紅茶を飲みながら、いっこうさわぐ様子もあ

りません。そこで、わたしも、しまいにはすっかり度胸がすわってしまつて、だんだん早くなるランプの運動を目標も離さずながめていました。

また、実際ランプのふたが、風を起こして回るうちに、黄色い炎がたった一つ、まばたきもせずにともっているのは、なんともいえず美しい、ふしぎなものだったので。が、そのうちに、ランプの回るのが、いよいよすみやかになつていって、とうとう回っているのが見えないほどに、すみわたつたと思うと、いつのまにか、前のように、はやひとつゆがんだだけしきもなく、テーブルの上にすわっていました。

「驚きましたか。こんなことは、ほんの子どもだましですよ。それとも、あなたがお望みなら、もうひとつ、何かごらんにいれましようか。」

と、ミスラ君は、後ろを振り返つて、壁ぎわの書だなをながめました。が、やがて、その方へ手を差し伸ばして、招くように指を動かすと、こんどは、書だなに並んでいた書物が、一冊ずつ動き出して、自然にテーブルの上まで飛んで来ました。

そのまた飛び方が、両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛ぶごうもりのように、

(052.jpg)

ひらひらと宙へ舞い上がるのです。わたしは、葉巻きを口

にくわえたまま、あつけにとられて見ていましたが、書物は、うす暗いランプの光の中に、なん冊も自由に飛び回って、いちいち行儀よくテーブルの上に、ピラミッド形に積み上がりました。しかも、残らずこちらへ移ってしまったと思うと、すぐに、最初に来たのから動き出して、元の書だなへ順々に帰って行くじゃありませんか。が、中でもいちばんおもしろかったのは、薄い仮りとじの書物が一冊、やはり翼のように表紙を開いて、ふわりと空へあがりましたが、しばらく、テーブルの上で輪を描いてから、急にページをざわつかせると、さか落としに、わたしのひざへ、さつとおりてきたのです。どうしたのかと思って、手にとってみると、これは、わたしが一週間ばかり前に、ミスラ君に貸した覚えのある、フランスの新しい小説でした。

「ながなが、ご本をありがとうございます。」

ミスラ君は、微笑を含んだ声で、こうわたしに礼を言いました。もちろん、そのときは、もう多くの書物が、みんなテーブルの上から書だなの中へ、舞いもどってしまっていたのでした。

わたしは、夢からさめたような心持ちで、しばらく、あいさつさえできませんでしたが、そのうちに、さつきミスラ君の言った「わたしの魔術などというものは、あなたでも、使おうと思えば使えるのです。」ということばを思い

出しました。

「いや、かねがね評判はうかがっておりましたが、あなたのお使いになる魔術が、これほどふしぎなものだろうとは、実際、思いもよりませんでした。ところで、わたしのような人間にも、使って使えないことはない、というのは、ご冗談ではないのですか。」

「使えますとも。だれにでも、ぞうさなく使えます。ただ――。」

と言いかけて、ミスラ君は、じっとわたしの顔をながめながら、いつになくまじめな口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハツサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず、欲を捨てることです。あなたには、それができますか。」

「できるつもりです。」

わたしは、こう答えてから、なんとなく不安な気もしたので、すぐにまた、あとか

(053.jpg)

ら ことばを添えました。

「魔術さえ、教えていただければ。」

それでも、ミスラ君は、疑わしそうな目つきを見せましたが、さすがに、このうえ念を押すのは ぶしつけだとも思ったのでしよう。やがて、おうようにうなずきながら、「では、教えてあげましょう。が、いくら、ぞうさなく使

えるといつても、習うのには、ひまがかかりますから、今夜はわたしの所へお泊りなさい。」

「どうも、いろいろ恐れ入ります。」

わたしは、魔術を教えてもらいうれしさに、なんどもミスラ君にお礼を言いました。が、ミスラ君は、そんなことにとんちやくするけしきもなく、静かにいすから立ちあがると、

「オバアサン、オバアサン。コンヤハ、オキヤクサマガ、オトマリニナルカラ、ネドコノ シタクヲ シテオクレ。」
わたしは、胸を踊らせながら、葉巻きの灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた親切そうなミスラ君の顔を、思わずじっと見上げました。

わたしがミスラ君に魔術を教わってから、ひと月ばかりたったあとのことでした。

これも、やはり、ざあざあ雨の降る晩でしたが、わたしは、銀座のあるクラブの一室で、五、六人の友人と、暖炉の前に陣取りながら、気軽な雑談にふけていました。わたしたちは、葉巻きの煙りの中に、しばらくは狼の話だの競馬の話だのをしていましたが、そのうち、ひとりの友人が、吸いさしの葉巻きを暖炉の中にほおり込んで、わたしの方へ振り向きながら、

「君は、近ごろ魔術を使うという評判だが、どうだい、今

夜はひとつ、ぼくたちの前で使って見せてくれないか。」
「いいとも。」

と、わたしは、いすの背に頭をもたせたまま、さも魔術の名人らしく、おうへいに、こう答えました。

「じゃ、なんでも。君に一任するから、世間の手品師などにはできそうもない、ふ

(054 . jpg 挿絵あり)

しぎな術を使って見せてくれたまえ。」

友人たちは、みな賛成だとみえて、てんでに いすをすり寄せながら、うながすように、わたしの方をながめました。そこで、わたしは、おもむろに立ち上がって、

「よく見ていてくれたまえよ。ぼくの使う魔術には、種もしかけもないのだから。」

わたしは、こう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃えさかっている石炭を、むぞうさにてのひらの上にすくい上げました。わたしを囲んでいた友人たちは、これだけでも、もうあらぎもをひしがれたのでしよう。みな顔を見合わせながら、うっかりそばへ寄って、やけどでもしては大変だと、気味わるそうに、しり込みさえし始めるのです。

そこで、わたしの方は、いよいよ落ち着きはらって、そのてのひらの上の石炭の火を、しばらく一同の目の前に突きつけてからこんどは、それを勢いよく、床へまき散ら

しました。そのとたんです、窓の外に降る雨の音を押し
て、もうひとつ変わった雨の音が、にわかには床の上から起
こったのは。というのは、まっかな石炭の火が、わたしの
てのひらを離れると同時に、無数の美しい金貨になって、
雨のように、床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは、みな夢でもみているように、ぼう然と、
かっさいするのさえ忘れていました。

「まず、ちよつと、こんなものさ。」

わたしは、得意の微笑を浮かべながら、静かに、また元の
いすに腰をおろしました。

「こりや、みな本当の金貨かい。」

「本当の金貨さ。うそだと思ったら、手に取って見たま
え。」

「まさか、やけどをするようなことはあるまいね。」

友人のひとりは、おそろおそろ床の上の金貨を手にとっ
てみました。

「なるほど、こりや、本当の金貨だ。おい、給仕、ほうき
とちりとりを持って来てこれを見なはき集

(055.jpg)

めてくれ。」

給仕は、すぐに、床の上の金貨をはき集めて、うず高く、
そばのテーブルへ盛り上げました。友人たちは、みな、そ
のテーブルの回りを囲みながら、

「ざっと二十万円ぐらいはありそうだね。」

「いや、もつとありそうだ。」

「なにしろ、たいした魔術を習ったものだ。石炭の火が、すぐに金貨になるんだから。」

「これじゃ、一週間とたたないうちに岩崎や三井に負けな
い金満家になってしまいうだろう。」

などと、わたしの魔術をほめそやしました。が、わたしは、やはりいすに寄りかかったまま、ゆう然と葉巻きの煙を
はいて、

「いや、ぼくの魔術というやつは、一たん欲心を起こしたら、二度と使うことができないのだ。だから、この金貨に
しても、君たちが見てしまったうえは、すぐに、また、元
の暖炉の中へ、ほうり込んでしまおうと思っている。」

友人たちは、わたしのことを聞くと、言い合わせたように、反対し始めました。

これだけの大金を、元の石炭にしてしまうのは、もつた
ない話だ、と言うのです。

が、わたしは、ミスラ君に約束したてまえもありますか
ら、どうしても暖炉にほうり込むと、強情に友人たちと争
いました。すると、友人たちの中の一人が、鼻の先でせせ
ら笑いながら、

「君は、この金貨を元の石炭にしようという。ぼくたちは、
また、したくないという。それじゃ、いつまでたつたところ

ろで、議論は尽きないのはあたりまえだろう。この金貨をもとでにして、君がぼくたちとカルタをするのだ。そして、もし君が勝ったなら、石炭にするとも、なんにするとも、自由に君が始末するがいい。が、もし、ぼくたちが勝ったら、金貨のまま、ぼくたちに渡したまえ。そうすれば、お互いの申し分がたって、しごく満足だろうじゃないか。」それでも、わたしは、また首を振って、容易にその申し出に賛成しようとはしませんでした。ところが、その友人は、いよいよあざけるように笑いを浮かべながら、「君が、ぼくたちとカルタをしないのは、つまり、その金貨をぼくたちに取られた

(056 . jpg 挿絵あり)

くないと思うからだろう。それなら 魔術を使うために、欲心を捨てたとかなんとかいいう、せつかくの君の苦心も、あやしくなってくるわけじゃないか。」

「いや、何も、ぼくは、この金貨が惜しいから 石炭にするのじゃない。」

「それなら、カルタをやりたまえ。」

なんども、こういう押し問答をくり返したあとで、とうとう、わたしは、その友人のことばどおり、テーブルの上の金貨をもとでに、どうしてもカルタを戦わせなければならぬ。わたしは、どうしてもカルタを戦わせなければならぬ。わたしは、どうしてもカルタを戦わせなければならぬ。わたしは、どうしてもカルタを戦わせなければならぬ。みんな大喜びですぐに、カルタをひと組取り寄せると、へ

やの片すみにあるカルタ机を囲みながら、まだ、ためらい勝ちなわたしを、早く早くとせきたてるのです。

ですから、わたしも仕方がなく、しばらくの間は、友人たちを相手に、いやいやカルタをしていました。が、どういうものか、その夜に限って、ふだんは、かくべつカルタじょうずでもないわたしが、うそのように、どンドン勝つのです。すると、また、妙なもので、初めは気乗りもしなかつたのが、だんだんおもしろくなり始めて、ものの十分とたたないうちに、いつか、わたしは、一切を忘れて、熱心にカルタをひき始めました。

友人たちは、もとよりわたしから、あの金貨を残らずまきあげるつもりで、わざとカルタを始めたのですから、こうなると、みなあせりにあせって、ほとんど血相さえ変わるかと思うほど、むちゅうになつて勝負を争い出しました。が、いくら友人たちが やつきになつても、わたしは、一度も負けなければかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高だけ、わたしの方が勝つてしまつたじゃありませんか。すると、さっきの友人が、まるで気ががいのような勢いで、わたしの前に、札を突きつけながら、

「さあ、ひきたまえ、ぼくは、ぼくの財産をすっかりかける。地面も家作も馬も自動車も、一つ 残らずかけてしまふ。その代わり、君は、あの

金貨のほかにも、今まで君が勝った金を、ことごとくかけるのだ。さあ、ひきたまえ。」

わたしは、このせつなに欲が出ました。テーブルの上に積んである山のような金貨ばかりか、せつかく、わたしが勝った金さえ、こんど運悪く負けたが最後、みな相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならず、この勝負に勝ちさえすれば、わたしが、向こうの全財産を一度に手に入れることができます。

こんなときに使わなければ、どこに魔術などを 教わった苦心のかがあるでしょう。そう思うと、わたしは、矢もたてもたまらなくなつて、そつと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず、君からひきたまえ。」

「9。」

「キング。」

わたしは、勝ちほこつた声を上げながら、まつさおになつた相手の目の前へ、ひき当てた札を出してみせました。すると、ふしぎにも、そのカルタの王様が、まるで魂でもはいつたように、かんむりをかぶつた頭をもたけでひよいと、机の外へからだを出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと、気味の悪い微笑を浮かべて、

「オバアサン、オバアサン。オキヤクサマハ オカユリニ

ナルソウダカラ、ネドコノ シタクハ シナクテモイイヨ。」と聞き覚えのある声で言うのです。

ふと気がついて、あたりを見回すと、わたしは、まだ、うす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるで、あのカルタの王様のような微笑を浮かべているミスラ君と、向かい合ってすわっていたのです。

わたしが、指にはさんでいた葉巻きの灰さえ、落ちずにたまっていたところを見ても、わたしが、ひと月ばかりたったと思ったのは、ほんの二、三分の間に、見た夢だったのに違いありません。けれども、その二、三分の短い間に、わたしが、ハッサン・カンの魔術をならう資格のない人間だということは、わたし自身にも、ミスラ君にも、明らかになってしまったのです。わたしは、はずかしそうにア頭を下げ

(058 . jpg 挿絵あり)

たまま、しばらくは口もきけませんでした。

「わたしの魔術を使おうと思ったら、まず、欲を捨てなければなりません。あなたは、それだけの修行ができていないのです。」

ミスラ君は、気の毒そうな目つきをしながら、緑に赤く花模様を織り出したテーブルかけの上にひじをついて、静かに、こう、わたしをたしなめました。

小説作家。一八九二年、東京に生まれ、一九二七年自殺した。

一九一三年、東京帝国大学に入学、在学中より文学に志し、夏目漱石の門下となる。一九二六年、高等学校時代からの友人、久米正雄、菊池寛などと共に「新思潮」を創刊する。東大卒後海軍幾関学校の教官となったが、一九一九年より作家生活に入る。おもな作品として「羅生門」「奉
数人の死」「侏儒（しゅじゅ）の言葉（ことば）」「河童（かっぱ）」「歯車」
「或阿呆（あるあほう）の一生」などがある。

知るだけでは十分ではない。適用しなければならぬ。
欲するだけでは十分ではない。実行しなければならぬ。

（ゲーテ）

心をみがき

からだを鍛える

一 たゆまぬ努力

試験がすんでから、幾日かたったある日、五、六人集まって、「実力か、点か」という問題について話し合った。

光一は、「自分は、いい成績を取らないと親にしかられる。だから、一点でも多い方がいい。ともかく点数だ。」と言った。

由紀子は、これに対して、「わたしたちの勉強は、今だけのものではなく、将来のためなのだから、点を探ることを第一にするよりは、むしろ実力を養っておくことが大切だと思う。」と主張した。

また、洋子は、「わたしは、試験にはがんばっていい点を探り、成績表をよくしておき、将来いい仕事につかなければと、思っただけ勉強するのだ。」と言った。

次に、「試験というものを、どう考えるか。」という話になったときに、先生が来られて、

「先生の立場からいうと、試験は、みんながどのくらい

理解したか、どのくらいの実力がついたかを調べるためのものなのだ。その結果を進学する方向や、または、学校を決める参考にもするので。また、試験というのは、自分を知るのに、いい機会なのだ。試験によって、自分をみがかのだよ。」と話された。

すると、みよ子が、「わたしは、気が小さいせいかな、試験になると胸がどきどきして、もし、できなかつたらどうしようと思います。入学試験のことなど考えると、失敗したら、親や先生に合わせる顔がないと思うと、死にたくなるほどです。」

と言った。先生は、それに対して、

「みよ子さんが心配する気持ちはよくわかる。しかし、みんなが、社会に出たときのことを考えてごらん。毎日毎日が回りの人から試験されて

(060.jpg)

いるようなものだ。最近のように競争が激しくなると、試験の苦しみや困難を克服していく勇氣と、自分でもやり通せるという自信とを養わなければならない。

それを持たない者は、ノイローゼになってしまうのだ。世の中は、みんなが、今考えているような、生やさしいものではないのだ。外に現われないきびしい競争が行なわれているのだよ。」

と言われた。光一が、「その勇氣や、自信を養うにはどう

「したらいいのですか。」とたずねると、先生は続けて、
「それには、ふだんから勉強し、練習を怠らないことだ。名人とか達人とかいわれる人たちは、どんなに血のにじむような修練と努力とを重ねてきたかを、聞いたことがあるだろう。人はベストを尽くしてわざをみがいたとき、自信ができるのだ。自信と似たものにうぬぼれということがある。自信はたゆまぬ努力によって修練し、みがきあげた結果得られる確信である。しかし、うぬぼれは、ごうまんな心がはたらいて、努力はあるかもしれないが、けんそんがない。

みんなの知っている剣の達人、官本武蔵（みやもとむさし）が、刀を上段から打ちおろして、子どもの前髪についていた一粒の飯粒を、まっ二つに切り、しかも、髪の毛一筋もせらず、また、髪は乱れてもいかなかったという。これほどのわざに熟練していても、敵に勝つことは容易なものではない、と門人を戒めたという話が残っている。達人というものは、自分の能力の限界をよくわきまえているので、けんそんであり、それがまた、その人を奥ゆかしく、りっぱに見せる。

わたしたちも、よく励んで、自信をつけることが大切だ。しかし、常に反省して、けんそんな気持ちを持った奥ゆかしい人間になりたいものだ。みんなは、今、それぞれ努力しなければならぬことがあるはずだ。努力して、自

信をもって事に臨むようにすれば、毎日の生活も楽しくなるものだ。」と話された。

二 ソクラテス



ソクラテス

紀元前、四三〇年ごろのことです。ギリシアのアテネという町に、ソクラテスという人がいました。彼は、幼いころから学者たちの教えを学び、そして非常に探究心の強い人でした。

彼は、町のつじで青少年たちをつかまえては議論をすることが好きでした。相手が不用意に使うことばの意味を問い詰めていくのが、彼の議論のやり方でした。

たとえば、民主主義ということばが出てくると、彼はすぐ「民主主義とは何か」とたずねます。「勇気とは何か。」「正義とは何か。」「こんなふうに、次から次へときいていくのです。」

「勇気とは何か。」と聞かれて、ある青年が、「いかなる敵に対しても、しり込みせずに進んでいくことです。」と答えると、さらに、「それなら、戦いの場合、形勢が不利で、

一時後退しなければならぬようなとき、無理に前進するのと、後退するのと、どちらが本当の勇気か。」とつっこんで聞きます。

青年「それは、やはり後退することでしょう。」ソクラテス「すると、よく周囲の状況を判断しながら、後退する場合にも勇気がいるということになる。」青年「そうです。」ソクラテス「では、勇気とは、単に勇ましいことだけではない。」青年「知恵が必要になります。」ソクラテス「そうだ。真の勇気には知恵が必要であるということが、いまの問答ではつきりした。」と、こんな調子で、ソクラテスは問答を重ねていきました。

ソクラテスの最も熱心な崇拝者のひとりであるカイレフォンがあるときデルフォイの、神殿に行つて、アポロの神に、「この世で、ソクラテスより賢い者がいますか。」と伺いをたてました。すると、「世の中に、ソクラテスより賢い者はない。」というお告げがありました。それを聞いて驚いたのは、ソクラテスでした。神への信

(062.jpg)

仰が、非常に厚い時代のことでしたから、神のお告げを疑う者はありませんでした。

それで、ソクラテスも、アポロの神のお告げを疑うわけにはいきませんでした。

しかし、「自分が、この世でいちばん賢いなんて信じられ

ない。いったいこれはどういうわけだろう。」と深く考え続けました。それから、ソクラテスは、自分よりも賢い人を見つけようと、賢者、偉人といわれている人を、次々とたずねて歩きました。ところが、問答をしてみると、初めは物知り顔をして、得々としやべっています。だんだん問い詰めると、最後には詰まって、まごまごしてしまいうのでした。

世の中の物知りとか、賢い人、偉い人と言われている人たちは、まだまだ知らないことがたくさんある、ということに気がついていないのです。いい気になって、物知り顔をしているのです。ところが、ソクラテスは、自分が、たいてい物知りでないということに自覚していました。この点で、ほかの者よりもまさっていたのです。それで、アポロの神が、そういうお告げをされたのでしよう。

ソクラテスは、「なんじ自身を知れ。」ということばを、口にするようになりました。そして、このことばの深い意味を知ろうと、いつも努力しました。

人間には、本当の知恵にあこがれ、真理を求めずなかな心がなくてはなりません。この心が、けんそんというものです。ソクラテスの教えは、結局、けんそんということです。真の勇氣も、自分の実力を知っていると現われます。また、自分を反省する人は、けんそんの心を持った人ということができません。

三 わたしたちは中学生

わたしは中学生、あなたも中学生。

あの顔も、この顔も、みんなもとのままだが、学校は変わり、制服も変わった。

そして、心が新しくなった。

そうだ。心が新しくなった。

わたしは、中学生なんだ。

家も同じ、机も同じだが、

厳科書は変わり、ノートもうんとふえた。

新しい心で、新しい希望で、

わたしは、中学生の道を走っているんだ。

これは、中学校になったばかりのころ書いた詩だ。わたしが、ぼんやりと、このごろの自分の生活について考えているときだった。井口（いぐち）さん、杉山（すぎやま）さん、堀（ほり）さんの三人が、林先生の家遊びに行こう、といってさそいに来たので、いっしょに行った。

一同 「先生、今日は。」

先生 「やあ、いらつしやい。約束の時刻をきちんと守ったね。感心、感心。」

堀 「きのう、時間励行ってこと、決めておいたんです。」

井口 「阿部さんを、いま、さそって来たので、遅れないかしらと思つて、心配しました。」

先生 「君たちは、仲良し四人組だからな。まあ、かけたまえ。」

杉山 「先生、いろいろ聞きたいことがあるんです。」

先生 「そうそう、この間、堀君が、中学ってちつともおもしろくないなんて言っていたが、そのことかね。」

堀 「中学生になると、勉強がたいへんだ。遊ぶひまなんか少しもない。日本語などもやれないほど忙しい、と聞いていました。ところが、午前中で授業がすんで帰ってから、二時間もあれば復習も予習も終わるんです。」

先生 「その日の勉強を、その日に整理したり、予習をするのはたいへんいい習慣

(064.jpg)

だ。ところが、それをしない生徒が多いんだ。そして試験のときになってあわてるんだよ。」

阿部 「たいいていの人が、試験の時だけ勉強すればいいんだなんて、言っています。」

先生 「それなんだ。試験のための勉強で、ふだんは必要がないと考えているらしい。いったい、なんのために学校に行くのか、考えなければいけない。中学、高等学校、大学と勉強するのは、試験のためや、成績表や、卒業免状を取るためでもあるが、それより大切なことは、一步、社会に出たときに、実力のある、役にたつ人になるために、順を追って勉強していくということにあるので結局は、自分のためというわけだ。だから、頭が痛いからやめよう。疲れたから休んでしまおう、という考え方は、本人がそれだけ損をすることになるんだ。少しぐらいからだの具合が悪くても、学校だけは休まないようにしようという気持ちだが、自然に出てくるはずなんだがね。」

杉山 「中学になったら、休む人が多いですね。特に、二日続きの休日の前の日なんか、家にいるくせに来ない人がいるんです。」

先生 「そうかね。君たちも休むかね。」

阿部 「いいえ、わたしたちは休みません。」

杉山 「先生、日本の学校では、クラブ活動というのがあるようですが、どんなことをするのですか。」

先生 「それでは、日本の中学校の様子を少し話そう。毎日五時間から六時間の授業がある。科目は、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語、職業、道德、その外、ホーム・ルーム、生徒会、クラブ活

動などがある。」

井口 「お料理の実習なんかもあるんですってね。いいわね。わたしたちもやりたいわ。」

堀 「男子もやるんですか。」

先生 「ああ、やるよ。家庭科の時間でね。そうじの仕方、洗たくの仕方、調理法から看護法、それに簡単な裁縫も、みな男女いっしょだよ。」

杉山 「料理なんかはおもしろいだろうが、そうじや洗たくはいやだなあ。」

(065.jpg)

先生 「男だって、ひととおり、合理的で能率的な方法を知っておくことは、現代人として必要なんだよ。それに、家でも、どんどん手伝わなければいけないんだ。」

阿部 「うちでは、母が忙しいので、よく手伝わされて、料理も大分覚ええました。」

井口 「阿部さんは、とても料理がじょうずなんです。」

杉山 「この前、ごちそうになったオムレツ、おいしかったなあ。」

先生 「それじゃ、こんど、ごちそうになりに行こう。」

堀 「ホーム・ルームっていうのは、どんなことをするのですか。」

先生 「これは楽しい学校、楽しいクラスにするため、生徒みんなで話し合うんだよ。朝早くから、夕方まで学校に

いるんだから、学校生活にもいろいろな問題が出てくる。それをみんなが楽しく暮らせるように工夫する話し合いの時間なんだ。また、校長先生や、先生方からの話なども聞いたりする。」

井口 「わたしたちも、そんな時間があつたら、とてもいいんだけど、話し合う機会がないんです。」

堀 「この前も、学校の帰りに、友だちがソルベッテを食べながら歩いていたので、注意したら、なぐられたんです。そんな行儀の悪いことも、みんなで話し合つて、やめるようにすればいいと思います。」

井口 「自分たちで、生活を楽しくする、というのはいいいことです。わたしたちも、そんな会を作りたいわ。」

先生 「生活を楽しくするといえ、さつき、杉山君が質問したクラブ活動がある。これは、それぞれ自分の好きな科目を、それだけ特別に研究する時間なんだ。科学クラブ、美術クラブ、音楽クラブ、手芸クラブ、運動クラブ、社会科学クラブなどいろいろあつて、クラスの授業よりもっと深く研究するんだ。そして、学年の終わりには、研究発表があり、生徒や父兄たちにも見せるのだが、中には、専門家もびつくりするようなものがあるよ。」

杉山 「いいなあ。ぼくは科学クラブにはいりたいなあ。そして、いろいろな実験をやってみたいよ。本なんか見ると、やりたくなるんだけど、道具はないし、へやはないし、

残念でたまらないんだ。」

(066.jpg)

先生 「やはり、男子には、科学クラブがいちばん人気があるようだ。クラブ活動の時間は、授業のときより熱がはいるくらいだよ。それに、その時間は、各クラブに分かれて、一年生から三年生までが、いっしょに仲良く研究するんだよ。」

安部 「先生、毎年、見学や旅行があるんですけどね。この間も、いところから、京都、奈良(なら)に二晩泊りで行ったという手紙がきました。わたしたちには、泊りがけの修学旅行なんて、全然ないんですもの。」

井口 「うちでも、父や母が、遠足や見学がないから、よそを見る機会がなくてかわいそうだななんて、言っています。」

先生 「日本の学校では、すべて実際の社会と結びつけた学習をしているから、地理でも歴史でも、科学でも、学習したことを実地に見聞するんだ。それから、もう一つ、学校のすべての行事は、運動会にしる、展覧会、学芸会、研究発表会、みな生徒自身の手で行っている。」

堀 「生徒だけでできるんですか。」

先生 「もちろん、先生の指導を仰ぐわけだが、上級生をいつのまにか見習ってよくやっている。」

阿部 「学校全体がよくまとまっているのね。わたしたち

は、他のクラスの人たちと話すおりもないくらいです。」
先生 「みんなで協力して、自分たちの生活を楽しく、意義あるものにするよう、考えなければいけない。」

堀 「そうですね。学ばなければならぬことを、自分たちで学ぶ機会を作るようにしようじゃないか。」

阿部 「クラブ活動のようなことはできないから、希望者を集めて、いろいろ研究する会を作りましょうよ。先生、指導してください。」

先生 「ああ、いいとも。いくらでも手伝ってあげるよ。」
井口 「なんだか、とても楽しくなってきたわ。日本の中学生に負けないように、しっかりとがんばりましょう。」

わたしは、目の前が明るくなったような気がした。自分から進んで知識を求め、

(067.jpg)

体験して、実力をつけるよう努力しようと決心した。

四 冬休みがすんで

二学期が始まった日、冬休み中のことを話し合った。初め、四、五人だったが、そのうちに大勢になって、おもしろい話し合いになった。

先生を囲んで、四、五人集まっていた。先生は、日本の中学生の休み中の生活について、いろいろ話してくださった。みんなは、興味深く聞いていた。日本の中学生は、休み中も、勉強や鍛練などをするということだった。中学生でも、そんなに勉強するのかなあと、みんなは感心した。春夫（はるお）が、「ぼく、ブラジルに生まれてよかったなあ。」と、大きな声を出したので、みんなが笑った。先生 「そんなに勉強するの、いやかね。」

春夫 「ぼく、勉強はきらいじゃないけど、この冬休みには、父といっしょに旅行したので、勉強は全然しなかったんです。」

博（ひろし） 「ふーん。ずっと旅行してたの。よかったな。」

先生 「それは、いい勉強をしたじゃないか。知らない土地に行つて、見たり、聞いたりすることは、生きた勉強だよ。」

博 「ぼくも旅行は好きなんだけど、母がとても心配性で、どこにも出してくれないんだ。あぶないから、あぶないからって、まるで、小学生ぐらいに考えているんだから……。」

先生 「おかあさんが、心配しないように、ふだん自分の事をきちんとして、一人前の中学生になったことを認めてもらわなくちゃ。」

博 「でも、先生、ことしは、英語の勉強と、柔道のけいこに行かせてくれたんです。」

先生 「じゃ、ことしは一人前になれたってわけかね。そりゃよかった。ところで、春夫君は一か月も、どこを旅行してきたんかね。」

春夫 「父が会社の用でミナスに行くことになって、ぼくも連れていってもらった

(新ポル語 Minas)

(068.jpg)

んです。帰りは、リオ・デ・ジャネイロに寄って、あちらこちら見学してきました。」

先生 「それは大旅行だったね、君がいちばんの収穫者かもしれない。あとでみんなにその話をしてもらおう。正(まさ) 子さんは、このお休みをどうしていたの。」

正子 「はい、わたしは、いところが入院したので、ずっと病人のつき添いでした。」

先生 「ほう、それはたいへんだったね。それで、病人はよくなったの。」

正子 「はい、冬休みの終わる三日ほど前、元気になって退院しました。」

先生 「そんなに看病したら、もう、看護婦さんになれるね。」

正子 「少しは覚ええました。病院の人たちの働きを初めて見て、たいへんだなあと思いました。看護婦さんも、お医者さんと休みなしで働いているんです。」

先生 「それでは、看護婦見習一か月の証書を上げよう。」
みんな、ぱちぱちと手をたたいた。

順子（じゅんこ） 「わたしは、なんの証書ももらえないわ。親せきに行って、ただ遊んできちゃった。」

勇二（ゆうじ） 「ぼくもそうなんだ。ずっと家にいて、雑誌を読んだり、友だちと遊んだり何もしないで一か月過ぎちゃった。」

先生 「自分で何かやろうと計画しなかったのかね。」

勇二 「友だちと、水泳を習いに行きたかったんだけど、お金がかかるからって、許してもらえなかった。」

先生 「もう、中学生だから、お金を使うことばかりでなく、家の手伝いも考えなくちゃ。」

博 「ロベルト君は、休みにはいつも店に行って働いているよ。」

そのとき、大勢が寄って来て、話し合いは、一段とにぎやかになった。

ゆりえ 「わたしは、少しだけ働いたわ。」

先生 「ほう、それはえらい。何をしたの。」

ゆりえ おじさんの家が本屋なんです。店の人がやめたので、新しい人が来るまで手伝ってくれと言われました。

わたしでも、店番ぐらいならできると思ってたのです。」

(新ポル語 Rio de Janeiro / Robert
o)

(069.jpg)

新一 「おじさんの家だったら、うんとももらえたらう。いくらももらった。ぼくも店番したんだけど、少ししかもらえなかった。」

先生 「家のこと手伝うのは、あたりまえだよ。」

博 「畑を手伝ったって、お使いしたって、金なんかもらわないよ。家のことだもの。」

先生 「たとえ、少しでも自分で働いて得たお金は尊いものだ。むだには、使えないだろう。」

新一 「そうなんです。この間、弟が買い物をするのに、足りないと言うから、よっぽど出してやろうかと思ったんだけど、惜しくてやめちゃった。」

博 「とたんに、けちん坊になったってわけか、あははは。」

ゆりえ 「そうよ。わたしも、あのお金は、よほどのことではなければ使わないつもりよ。別にしまっているの。生まれ初めて働いて、もらうお金ですもの。」

英治 (えいじ) 「ぼくも、いなかのおじさんの所に行つて、

にわとりや、ぶたの世話をして、一週間ほど手伝った。そしたら、帰りにお小使いだといって、お金をくれたんだ。うれしかったなあ。もらおうなんて思っていなかったから。」

先生 「英治君、そのお金をなんに使うかね。」

英治 「買いたい物はたくさんあるけど、当分はしまつて置きます。」

清（きよ）子 「わたしにお金がいっいたら本を買うわ。読みたい本がたくさんあるんですもの。」

先生 「清子さんは、また休み中は、図書館通いかね。」

順子 「清子さんは、本の虫ですもの。」

清子 「あら、いやだ。ことしは、少しむずかしい本を読もうとしたので、予定の半分も読めませんでした。」

先生 「清子さんは本ばかり読んでいるけど、休みぐらいは、からだを丈夫にすることを考えないといけないね。」
美知（みち）子 「わたしは、いつもからだばかり丈夫にしていて、頭の方をちっとも強くしないって言われるわ。」

先生 「美知子さんは、休み中、何してたの。」

(070 . jpg)

美知子、肩をちよつとすぼめて、

美知子 「ずっと家にいて、遊んでいました。何もすることがないので、毎日テレビを見ていました。」

勇二 「ぼくも同じだ。休みなんてつまらないよ。試験がないのはいいけど。」

友（とも）子 「わたしも、授業がある方がいいわ。授業がある、あんまり用事もさせられないけど、休みだと、みんなが用事をさせるんですもの。」

先生 「ちよつと待った。その用事をするのが、いい勉強なんだ。おとうさんたちは、友子さんのために思ってやらせるんだよ。ふだんは勉強を第一にして、休みのときは、手伝いの方を第一にしているんだ。そして働くことが、後に役立つんだ。」

忠 「ぼくは、弟や妹とけんかばかりしていて、何もしていないで一か月を過ごしてしまった。なんだか、損したみたいだ。こんどの夏休みには、何かして働こう。」

みんな、「ぼくも」、「わたしも」と言った。

先生 「こんどの休みが終わったら、みんなが、金持ちになつてしまうね。自分に与えられた自由な時間を、どう過ごすかは、その人の心がけしだいだよ。遊んでいても、働いても、勉強しても、一か月は一か月だからね。」

五 余暇の利用

自分の希望することを自由に選んで行なうことのできる時間を余暇といいます。

余暇をどう使うかは、自分の自由です。たとえば、休日にも一日中、寝ころんで、ラジオを聞いたり、雑誌を読んだりすることもできます。また、家の手伝いをして、勉強をしても、どこかへピクニックに行っても、一日は過ごせます。

あとで振り返って見て、「むだでなかった。」「ためになってよかった。」「ああ、楽しかった。」と思うような過ごし方と、「なんにもならなかった。」「つまらなかった。」と思うような過ごし方と、どちらでも選べるわけです。

時間というのは、だれにでも、平等に一日二十四時間与えられています。過ぎ去った時間は、二度と帰ってきません。この貴重な時間を、いかに過ごすかで、その人の一生の値うちが決まるともいえます。

普通、学生の余暇は、家の手伝い、レクリエーション、勉強の三つに使われます。家の手伝いは、家の役に立ち、親の苦勞を知り、勤勞の尊さを知るのいい機会です。

勉強は、平素の不足を補ったり、宿題をかたづけたり、好きな技能を伸ばす機会です。また、レクリエーション

は、決して単なる遊びや気晴らしということではなく、「あすの英気を養う。」という意味を持っています。

このレクリエーションを価値あるものにするか、しなやか。健全なものにするかしないかは、その人の考えによって決まるのです。遊びや気晴らしだけでなく、音楽を鑑賞したり、絵をかいいたり、読書をしたりして、楽しむと同時に、自分の教養を高めることもできるのです。スポーツにしても、見て楽しむ方法もありますし、自分が運動して楽しみながら、からだを鍛えることもできます。

余暇を有効に過ごしたいものです。消極的な過ごし方でなく、計画を立てた積極的な過ごし方でなければなりません。休日に、何かおもしろい事はないかと、待っているような態度でなく、セットや模型でも組み立ててみようとか、あるいは、出かけて、地理や動植物の研究をしてみようというような、態度が望ましいのです。

そのためには、何か目標をたてなければなりません。余暇に合わせた計画と、それに伴う準備が必要です。計画と準備がなくては、せつかくの目的も、十分に達せられません。たとえば、魚つりに行こうとしても、えさを用意したり、つりざおなども調べておかなければなりませんし、場所の研究も必要です。そうすることによって、楽しい魚つりができ、また、充実した余暇を過ごすことができるのです。

六 勝利の日のために

ぼくの住むT移住地は、ことし、開拓十周年を迎えます。その記念事業として、会館の増築、運動場の拡張、道路の修繕などを行ないます。そして、十月には、にぎやかに記念祭を催すことになっています。

この記念祭の催し物の中に、野球大会があります。青年の招待試合と合わせて、少年のも行なわれます。青年の野球チームは、開拓三年目にできて、隣の移住地や、町のチームと、たびたび試合をしてきました。少年の方は、去年初めてできたばかりで、まだ一度も、他のチームと試合をしたことはありません。

ぼくは、ことしから少年チームの正選手にしてもらい、毎日グラウンドに出て、一生懸命に練習しています。ぼくの兄は、青年チームの選手なので、仕事のあいまに、キャッチ・ボールの相手になってくれます。また、いろいろ、野球のことを話してくれます。少年チームのメンバーになって、監督の久保田さんから、指導を受けるようになります、いつそうよくわかってきました。

野球は、ルールが複雑でたいへんむずかしいが、スリルに富んだ非常におもしろいスポーツです。

それに、野球は、ひとりひとりがすぐれていても、必ず勝

ならない。センターへ抜けそうな強いゴロは、斜め後方へ走って、二塁後方で捕球し、ノー・ステップで送球する。一塁後方のフライも、セカンドの方が取りやすい。一塁にランナーのいる場合、自分の所へ来たゴロは、取ってから、二塁にはいったショートの高さをねらって送球する。そのとき、距離によって、上、横、下、トスと、投げ方を変える。ダブル・プレイをあせって、乱暴な送球をしてはいけない。ショートとは、よく連絡をとる必要がある。ランナーが二塁にいるときは、代わる代わる動いて、けんせいしなければならぬ。ファーストが、ベースを遠く離れて捕球したとき、また、バントに備えて前進した場合には、一塁ベースをカバーしなければならぬ。また、右中間、右翼線に長打されたときは、外野手の送球すべき塁と、外野手との中間に立って、送球すべき塁を指示したり、中継の役目をもしなければならぬ。――

試合の花形は、ピッチャーです。全観衆の目を一身に集めて、敵のバッターを、次々と打ちとっていくときなど、その勇ましき、花花しきは、とてもことばではわし切れません。だが、一たん敵の打線が爆発して、満塁というようなことになれば、味方には、手に汗を握らせませぬ。そうすると、敵側の応援団は、わきたって歓声をあげます。ここで得点を許さなければ、かつさいを博しますが、もし、ラ

ンナーが次々にホーム・インということにでもなればたいへんです。勝つも負けるも、ピッチャーしだいといわれるほどで、責任の最も重いポジションです。

しかし、どんな名投手でも、キャッチャーがよくなければ、すぐれたピッチングはできません。キャッチャーは、絶えず味方を励ましたり、指示したりする大切な役目を持っていきます。ピッチャーをリードするのは、キャッチャーの役目の中のいちばん頭腦的なもので、ピッチャーが能力を発揮できるかどうかは、キャッチャーのリードいか

(074.jpg)

んによるともいわれています。そのため、キャッチャーは、味方のピッチャーを良く知っていると共に、相手のバッターも、よく研究しなければなりません。

だが、どんなにバッテリーがよくても、野手の守備が悪かったり、打撃が振るわなければ、勝利を得ることはできません。

やがて、開拓記念日がきます。そのときには、隣りのS移住地の少年チームを迎えて、試合をすることになっています。S移住地では、数年前から少年チームが作られて、Sチームといえば、守備のじょうずなことで有名です。監督さんや、兄の話によると、彼らも、ぼくたちとの試合にそなえて、毎日、練習をしているとのことでした。

ぼくたちにとつては強敵なので、監督さんの言われるとおりに、チームワークを、何より大切にして、練習に励んでいます。ぼくたちの技術は、さほど進歩していませんが、青年たちも、移住地の人々も熱心に応援してくれるので、ベストを尽くして戦えば、きつといい試合ができると思います。

浜 辺 の 歌

作 詞 はやし 林 こ 古 か 漢

- 1 あした 浜辺を さまよえば、
昔のことぞ しのぼるる。
風の音よ、 雲のさまよ、
よする波も かいの色も。
- 2 ゆうべ 浜辺を もとおれば、
昔の人ぞ、 しのぼるる。
寄する波よ、 かえず波よ。
月の色も 星のかげも。

浜辺の歌

作詞 林（はやし）古溪（こけい）

1 あした 浜辺を さまよえば，

昔のことぞ しのぼるる。

風の音よ，雲のさ まよ，

よする波も かいの色も。

2 ゆうべ 浜辺を もとおれば，

昔の人ぞ，しのぼるる。

寄する波よ，かえす波よ。

月の色も 星のかげも。

(075.jpg 挿絵あり 右pg横書き。左pg縦表
記の横書き)

森の水車

作詩 清水みのる

1 線の森のかなたから

陽気な歌が聞こえましょう。

あれは水車のまわる音

耳をすましてお聞きなさい。

コトコト コットン コトコト コットン

ファミレドシドレミア

コトコト コットン コトコト コットン

仕事にはげみましょう。

コトコト コットン コトコト コットン

いつの日か楽しい春がやってくる。

2 雨の降る日も風の夜も

森の水車は休みなく

こなひきうすの ひょうしとり
ゆかいに歌を続けます。

コトコト コットン コトコト コットン
ファミレドシドレミア
コトコト コットン コトコト コットン
仕事に励みましょう。
コトコト コットン コトコト コットン
いつの日か楽しい春がやってくる。

3 もしもあなたがなまけたり

遊んでいたくなったとき

森の水車の歌声を

ひとり静かにお聞きなさい。

コトコト コットン コトコト コットン
ファミレドシドレミア
コトコト コットン コトコト コットン
仕事に励みましょう。
コトコト コットン コトコト コットン
いつの日か楽しい春がやってくる。

1 植物の生き方

春になると、冬の間、^{堅い皮}で守られていた木の芽は、若葉になります。草の芽も、ぐんぐん伸びて、野山は新緑に包まれます。これらの植物は、どのようにして成長するでしょうか。

植物は、生きるのに都合のいい温度の中で、光と水を取って生きています。そのために、草や木の、葉が働きます。これを工場にたとえてみましょう。葉という工場があります。その中で、^{葉緑体}という技師が、^{葉緑素}という薬を使い、日光の力を利用して、^{空気中の炭酸ガス}と、^{根から吸い上げる水}とを原料として、^{でんぶん}を作ります。すると、^{酸素}という ^{かす}が出るので、これを^{空気中に捨て}ます。

このように、^{葉の作る でんぶん}が、草や木を^{生かし}、^{成長させる養分}で、この^{養分}を作る葉の働きを、^{炭素同化作用}といいます。

植物の葉は、日光のある昼間だけ働いて、^{空気中から炭酸ガス}を取り、その体積

と同じ分量の^{酸素}を出します。それで^{空気がきれい}になります。わたしたちが、家の庭や公園に草木を植えたり、^{街路に樹木}を植えたりするのは、そこを美しくすると共に、^{空気をきれいにする}ためです。

^{炭素同化作用}によって、できた ^{でんぶん}は、^{根から来る水の中の窒素・りん・いおう}などと化合して、^{糖類}、^{脂肪}・^{たんぱく質}などになります。これらの養分は、いつまでも葉にとどまってはいません。^{茎や根}に運ばれます。そして、^{養分}が余ると、^{貯蔵}され、^{必要なとき}に使われます。^{貯蔵される場所}は、植物の種類によって違います。たとえば、^{いね}や ^{とうもろこし}などでは^{種子}に、^{アバカテ}や ^{かぼちゃ}では^実に、^{さつまいも}では^根に、^{たまねぎ}などでは^{地下茎}に貯蔵されます。くだものや穀類は、^{みな植物}がたくわえた^{養分}なのです。

植物には、^水が最も大切なものです。^{水に溶けている養分}を取るからです。この大切な水を取るのには、^根の役目です。^根は土の中から^水を吸い取りますが、それは、^{根全体}でなく、^{主として根毛}という ^{ひげ根}の働きです。^{根毛}が吸い取った水は、^{茎の中}を^{通って葉}に行きます。そこで^{炭素同化作用}に使われ、^{残りは水蒸気}になっ

(076 . jpg 横書き、縦表記)

知識を求めて

知識はお金のようなものである。正直に働いて得たのであつたら、誇りにしてもいいだろう。だが、他人のものをそっくり借りているというだけだつたら、自慢はできない。(ラスキン)

1 植物の生き方

春になると、冬の間、堅い皮で守られていた木の芽は、若葉になります。草の芽も、ぐんぐん伸びて、野山は新緑に包まれます。これらの植物は、どのようにして成長するでしょうか。

植物は、生きるのに都合のいい温度の中で、光と水を取って生きています。そのために、草や木の、葉が働きます。これを工場にたとえてみましょう。葉という工場があります。その中で、葉緑体という技師が、葉緑素という薬を使い、日光の力を利用しながら、空気中の炭酸ガスと、根から吸い上げる水とを原料として、でんぷんを作ります。すると、酸素という かすが出るので、これを空気中に捨てます。

このように、葉の作る でんぷんが、草や木を生かし、成長させる養分で、この養分を作る葉の働きを、炭素同化作用といいます。

植物の葉は、日光のある昼間だけ働いて、空気中から炭酸ガスを取り、その体積と同じ分量の酸素を出します。それで空気がきれいになります。わたしたちが、家の庭や公園に草木を植えたり、街路に樹木を植えたりするのは、そこを美しくすると共に、空気をきれいにするため

です。

炭素同化作用によって、できた でんぷんは、根から来る水の中の窒素・りん・いおうなどと化合して、糖類、脂肪・たんぱく質などになります。これらの養分は、いつまでも葉にとどまってはいません。茎や根に運ばれます。そして、養分が余ると、貯蔵され、必要なときに使われます。貯蔵される場所は、植物の種類によって違います。たとえば、いねや とうもろこしなどでは種子に、アバカテやかぼちゃでは実に、さつまいもでは根に、たまねぎなどでは地下茎に貯蔵されます。くだものや穀類は、みな植物がたくわえた養分なのです。

植物には、水が最も大切なものです。水に溶けている養分を取るからです。この大切な水を取るのは、根の役目です。根は土の中から水を吸い取りますが、それは、根全体でなく、主として根毛という ひげ根の働きです。根毛が吸い取った水は、茎の中を通過して葉に行きます。そこで炭素同化作用に使われ、残りは水蒸気になっ

(077 . j p g 挿絵あり。横書き、縦表記)
て蒸発します。

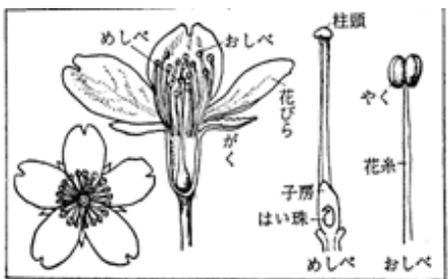
植物の中で、えんどうやダリヤのように、茎が柔らかか
で背たけのあまり高くないものを草本（そうほん）と
いいます。パイネイラやつつじのように、幹とよばれる
堅い茎を持ち、なん年も生きているものを木本（もくほ

ん」といいます。

草本のうち、ほうせんかやあさがおのように、1年のうちに発芽し、花がさき、実を結んで根が枯れるものを1年生といいます。

そして、きく・ゆりのように、地上に出る部分は芽を出し花をさかせて、毎年枯れるが、地下にある部分はなん年も生きているのを 多年生といいます。

木本は、普通、多年生で、まつやペロバのように背たけが高くなるのを高木（たかき）といいます。またつつじや ちゃ のように背たけが高くないものを低木（ひくぎ）といいます。



さくらの花

植物で、花のさくものは種子でふえ、花のさかないものは孢子でふえます。一つの花に雄しべと雌しべがあるのが普通ですが、なすや きゅうりのように、一つの茎に雄花と雌花に分かれてさくのがあります。また、まつやマモンなどのように、雄花のさく木と、雌花のさく木

が別々になっているものもあります。

右の図を見ましよう。柄の先に、外側から内側に向かって、がく・花びら・雄しべ・雌しべが順に並んでいきます。雄しべの先にあるやく　　の中の花粉が雌しべの先につくと、子房の中にあるはいしゅが種子になります。また、子房はふくらんで、果実になります。

花のさかない植物に、しだ類、こけ類、海草類、きのこ類があります。しだの葉の裏を見ましよう。そこにかつ色の胞子があります。この胞子が、地上に落ち、(078.jpg) しだが生えるのです。

このような花のさかない植物は、ずっと昔、地球上に現われたものです。長い間に、種類がふえ、だんだん進化して、花がさき、種子のできる植物が現われてきたのです。

今日、植物の種類は非常に多く、少なくとも、全世界に二十万種はあるといわれています。

2 ブラジルの植物

ブラジルは植物の豊かな国で、全土に草木が茂っています。その植物の種類は、約5万種で、その中にブラジ

ル原産のものが3万種ほどあります。そして、これまでに、世界の学者により、有用植物、薬用植物、また珍しい植物の種類が数多く発見されています。しかし、未研究のものも多いということです。

ブラジル発見当時、パウ・ブラジルが 北部海岸山脈にたくさん生えていました。

ヨーロッパでは、この木から染料を取るため、どしどしブラジルから持ち出しました。こうして、最初ヨーロッパに知られた植物がパウ・ブラジルで、国の名 そのものも植物の名であることから考えても、ブラジルと植物との関係が、どんなに探いかということがわかります。

早くから、ブラジルは植物の宝庫であることが広く知られ、多くの学者が研究に came ました。ババリア人のマルチウスは、ブラジル旅行から帰って後、ヨーロッパの学者を動かし、「ブラジル植物誌」を完成し、また、フランス大 サンチレールは、5回もブラジル国内を旅行して、植物に関する本を著わしました。ブラジルの植物研究では、これらの人が有名です。

次にブラジル原産の木本のうち、よく親しまれているのをあげてみましょう。

ピニエイロ・ド・パラナー（ナンヨウスギ科）

高さ50mに達する高木で、枝は木が古くなるに従い、水平にひろがり、かさの形になります。雄花、雌花が

違った株につきます。実の直径は20cmに達し、一つか

(079 . jpg 挿絵あり。横書き、縦表記)

ら150ぐらい種子が取れます。木材は、建築、家具、その他、用材として、用途が広く、また、種子に脂肪が多く、食用になります。



イペー（ノウゼンカズラ科）

高さ30mに達する、森林中の高木で、花は7月から8月にわたってさきます。果実は細長く、中にうすくて平らな種子が160ぐらいあります。木材は、船、車両、家具、その他、使いみちがたくさんあります。イペーには、種類が多く、赤紫、黄色、そして白い花のさくのもあります。

ブラジルは、1954年にイペーを国花として選定しました。

ジャブチカバ（フトモモ科）

高さ30mに達する高木です。花は白色で小さく、古い幹にくつついてさきます。実は黒紫で、光沢があつて、食用になります。花は七月ごろさき、実は九月末から熟します。果樹として、また庭木として植えられます。

カジュー（ウルシ科）

高さ12mに達する高木です。花は八月頃さき始め、同じ花の中に雄花と雌花があります。実は特殊な形をしていて、12月ごろ熟します。果実は食用になり、果実は薬に使われます。木材は、建築、家具材として用いられます。

（新ポル語 j a b u t i c a b a / c a j u）

（080 . j p g 挿絵あり。横書き、縦表記）

3 動物の生態

動物には、植物を食べるものと、動物を食べるものがある。中には、生れたころ動物を食べ、成長後は植物を食べるものもある。それは、特に鳥類とこん虫類に多く見られる。

普通の動物は、口から物を取り、それを体内でこなす。そのため、消化器官を持っている。この器官は、高等動物ほど複雑にできていて、口、食道、胃、小腸、大腸などの区別がはっきりしている。しかし、アメーバのような下等なものは、からだの全面で養分を吸い取る。

動物は、外から酸素を取り入れて、代わりに炭酸ガスを出す。これを呼吸という。

呼吸の仕方は、動物によっていろいろな違いがある。アメーバ類は、からだの全面で呼吸し、魚類は、えらで呼吸する。高等な動物は、複雑な呼吸器を持っていて、肺で呼吸する。

消化器官を働かせて呼吸した養分を、からだの各部分に配る働きをするのが、循環器で、せきつい動物では、心臓、血管などの区別もはっきりしている。

しかし、この器官を持っているのは高等動物で、アメーバ類などは持っていない。これらの各器官の働きによってできた不用物を捨てる器官がある。それを、はいせつ器官という。

動物を大きく分類すると、獣、鳥、魚などのように、背骨を持つせきつい動物と、こん虫、貝、みみ

(081.jpg 縦書き、横表記)

ずなどのように、背骨を持たない無せきつい動物の2つになる。

せきつい動物は、ほ乳類、鳥類、は虫類、両生類、魚類などで、無せきつい動物は、こん虫類、くも類、えび・かにの類、貝類、いか・たこの類、その他、みみずの仲間、回虫の仲間、アメーバの仲間などである。

ほ乳類というのは、犬、やぎ、さる、ぞうなどのように、乳で子を育てる動物である。この仲間は、からだは毛でおおわれていて、体温が一定しており、肺で呼吸する。くじらは海にすんでいるが、やはりこの仲間である。鳥類は、にわとり、おうむ、だちょうなどのように、からだは羽毛でおおわれ、体温が一定している。翼とくちばしを持ち、卵からかえる。

は虫類は、とかげ、へび、かめなどで、からだはうろこやこうらでおおわれている。体温が周囲の、温度によつて変わり、卵からかえる。

両生類は、かえる、いもりの仲間、幼生の時代は水中にすんで、えらで呼吸し、成体は陸にすみ、肺で呼吸する。は虫類と同じように、体温が変わり、卵からかえる。

魚類は、からだはうろこでおおわれてひれがある。は虫類と同じように体温が変わり、えらで呼吸し、卵からかえる。

体温の一定しているほ乳類や鳥類を定温動物といい、体温の変わるは虫類、両生類、魚類などを変温動物とい

う。

無せきつい動物には、次のようなものがある。

こん虫類。これは、はえやちちょうの仲間である。

(082 . j p g 挿絵あり 横書き、縦表記)

からだは、頭、胸、腹の3部に分かれており、頭部には、1対の触角、1対の複眼、(その他に単眼のあることもある。)と口器がある。胸部には、3対の足と、普通は2対のはねがある。からだに節があり、外側が堅いからで包まれている。からだの側面にある気門で呼吸し、卵からかえる。

くも類は、足が4対あり、頭部と胸部とが一つになって、頭胸部となっている。くも類の特徴は、糸を出して網を張ることである。卵からかえる。

えび・かにの類は、からだは頭胸部と腹部とでできており、大小2対の触角がある。からだに節があつて、堅いからで包まれている。卵からかえる。

こん虫類、くも類、えび・かにの類は、かなり違ったところもあるが、また、似たところもあるので、これらをひとまとめにして、節足動物と呼ぶ。

貝類には、2枚貝と巻貝とがある。2枚貝は、2枚のからの間から舌のような足を出して歩く。からだは2枚の外とう膜に包まれており、頭、胸、腹などの区別がな

く、また、目や触角もない。巻貝のからだは、頭、胴、足の3部に分かれている。頭には、触角、目、口がある。なめくじには、からはないが、やはり巻貝の仲間である。いか・たこの類は、よく発達した厚い膜で、からだが含まれている。頭、胴、足の3部に分かれていて、頭は、腹と足との間にあり、口と1対の目がある。いかは10本、たこは8本の足がある、足は口のまわりから出ていて、たくさんの吸盤がある。たこもいかもえらで呼吸し、卵からかえる。

貝類といか・たこの類は、からだが柔らかい膜で包まれている点が似ているのでこれらをいっしょにして、軟体動物という。

無せきつい動物には、この外、みみずの仲間、ひとでういの仲間、回虫の仲間、アメーバの仲間などがある。これら下等な動物は、からだの構造も簡単である。こ

(083 . jpg 横書き、縦表記)

の外に単一細胞でできている原生動物というのがある。その中には、肉限で見えないものも多く、微生物の仲間に入れられている。

動物のすみかは、食物が多いとか、気候その他、自然の状態が適しているとか、その動物が生活するのに都合のいい所なのである。また、動物がからだの形や色を自

然の状態に適應させていることも、しばしば見かける。地中にすむ動物の中に前足が発達しているのがいたり、まっくらな深い海底に、目のない魚がいたりするのは、からだの形や器官を周囲の状態に適應させているものの例である。また、青草の中にすむ虫の色が、青色であったり、落葉の中にいる虫が、こげ茶色であったりするものは、からだの色を、自然の状態に適應させているものの例で、これを保護色という。それと反対に、ことさらに、からだの色を目立たせて、他の動物を近寄らせまいとしているものもある。このようなのを警戒色という。

動物の中には、集団を作って生活しているものがある。こん虫には、ありや はちの仲間があり、獣には、さる、ぞう、きりん、しま馬などがある。これらは、同じ仲間が集まって、互に助け合って生活しているのである。また、同じ仲間ではなく、異なった種類のものが、助け合って生活しているものもある。わにと わに鳥、ありと あぶらむしなどがそれで、これを共生という。また、動物の中には、他の動物にたよって生活しているものがある。このことを寄生という。寄生には、外部寄生と内部寄生とがある。外部寄生というのは、他の動物の体表に寄生することで、人間や家畜にたかる のみ、しらみ、だになどがそれである。内部寄生というのは、回虫や十二指腸虫などのように、他の動物の体内に寄生すること

である。

動物の中には、こん虫や魚のように、一度になん百という卵を生むものがある。

これでは、地球がたちまち動物でいっぱいになりそうに思われるが、実際には、そのわりにふえない。それは、動物のふえるのを妨げるいろいろの原因があるからである。自然の力によることはもちろんだが、動物には外敵の多いことが大きな原因である。強者は弱者を捕えて食べようとする。知らない間に寄生して、からだを衰弱させる。油断していると巣を荒らし、食物を横取りする。そのうえ、ある動物には天敵というのがある。これは、ある決まった相手で、絶対に勝てない敵のことである。このように、動物には敵が多いので、常に激しい争いに打ち勝っていかなければ

(084 . j p g 挿絵あり。横書き、縦表記)

れば、生活することも、種族をふやすことも困難なのである。

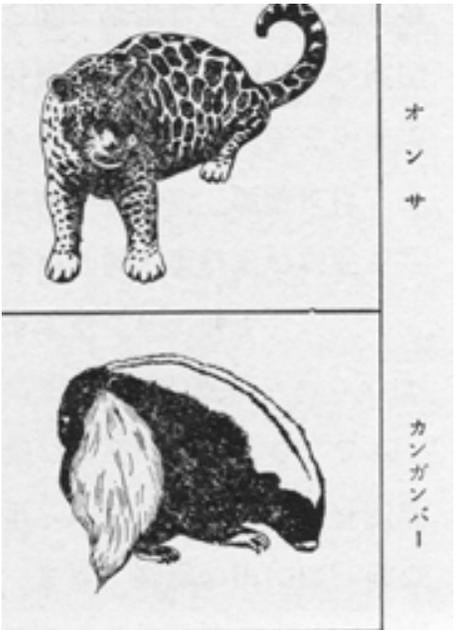
4 ブラジルの動物

南米には、からだの大きい動物や猛獣といわれる動物は比較的になく、人なつこい動物が多い。

次にブラジルにすむ獣類と鳥類の中で、特異なものを少しあげてみよう。

オンサ（アメリカカひょう）は、南米にすむ唯一の猛獣として恐れられている。オンサには、いろいろの種類があるが、中でもよく知られているのは、ジャグワレテーである。これは、からだが大きくて、体色が黄色で、黒い斑点があり、オンサ・ピンタダとも呼ばれている。またからだはジャグワレテーと同じぐらいだが、斑点のないものを、ススアラナといい、一般には、オンサ・パルダと呼ばれている。この外、からだの小さいのが幾種かある。

オンサは性質が荒荒しく、動作は敏しうで、他の動物を捕食する。



カンガンバー（いたち）も肉食動物で、敵に会うと強い臭気のある液を出す。カンガンバーは、毒へびを食べるので益獣ともいえる。

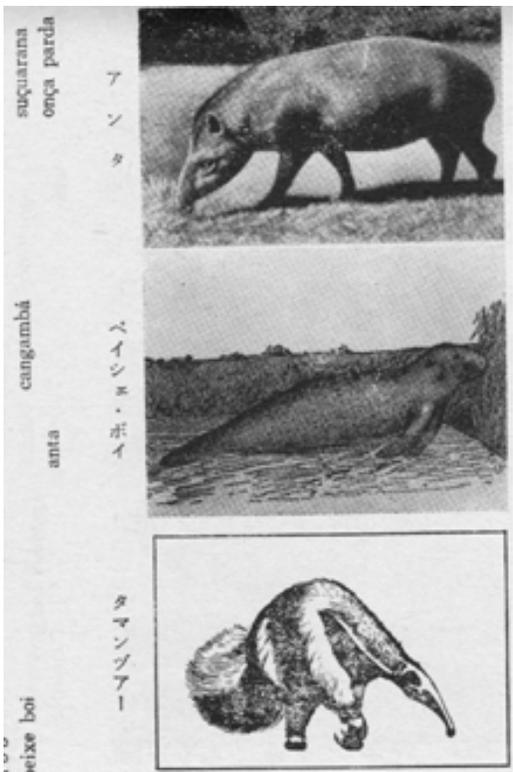
草食動物の中で珍しいのは、アンタ（ばく）である。馬

のようにたてがみがあり、牛のようにひづめが割れていて、顔がとがっている。森林地帯の川べにすむおとなしい動物で、肉は食用となる。

ブラジルの北部の海や川にすむ動物にペイシエ・ボイ（じゅごん）というのがある。体長は約2mで、

（新ポル語 c n c a / j a g u a r e t e / o n c a p i n t a d a / s u c u a r a n a / o n c a p a r d a）

（085 . j p g 挿絵あり。横書き。縦表記）
胴が太く、前足の先が ひれのようになっている用心深い動物で、敵に会うと、すぐ水中にもぐる。肉と脂肪は栄養価が高く、加工して、外国にも輸出されている。また、皮は機械のベルトを作るに適している。



タマンツァー（おおありくい）は、南米にすむ動物の中で、最も珍しいといわれている。これはありを常食とす

る益獣であるが、人は見つけしだいに揃えるので、近年は数が少なくなっている。タマンツアーの中で、よく知られているのは、タマンツアー・バンデイラで、体長は約1m、体長とほぼ同じ長さのふさのような毛を持っているのが特徴である。

タマンツアーと同じように、ありを食べる動物にタツ（きゆうよ）がある。からだは、こうらでおおわれていて、土の中を自由にもぐる。その肉は食用となる。

以上の外に、珍しいほ乳動物として、プレギサ（なまけもの）がある。ほとんど一生を樹上で過ごす草食獣で、動作は緩慢である。毛は灰色で明るい斑点がある。プレギサの毛の中には、あぶらむしやだになどが寄生していたり、こけが生えていたりする。

ジャカレー（わに）、ラガルト（大とかげ）は、は虫類である。ジャカレーのうち、北部に多いカイマン属は形が大きく、南部にすむジャカレチンガ属は小さい。アマゾンにすむジャカレー・アスーは、カイマン属の中で最も大きく、全長が6mもある。ジャカレーの皮は需要が多く、いろいろな細工物に使われる。

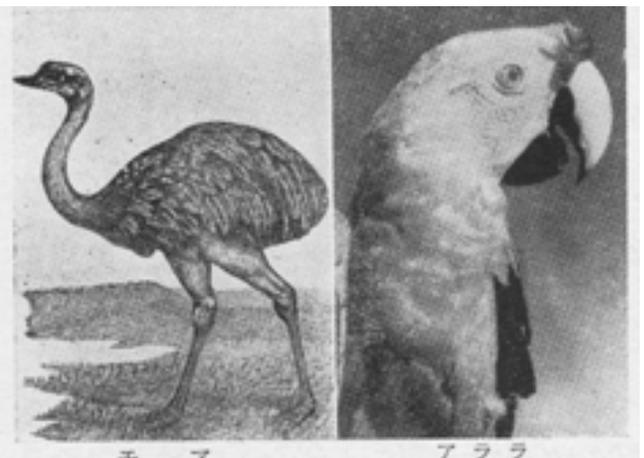
ラガルトにも、いろいろな種類がある。大きいものは、全長2mぐらいになる種類もある。ラガルトは、害虫を捕食するので有益な動物ということができる。

ブラジルには、約1800種の鳥類がいる。

特徴のある鳥類といえは、エマ、パパガイオ、ペイジャ・フロル、ツカノなどであろう。

エマは、だちょうの一種で、アフリカの

(新ポル語 Tamandua bandeira / tatu / preguica / Lagarto / jacare / acu / ema / papagaio / beijaflor)



(086 . jpg 挿絵あり。横書き、縦表記)

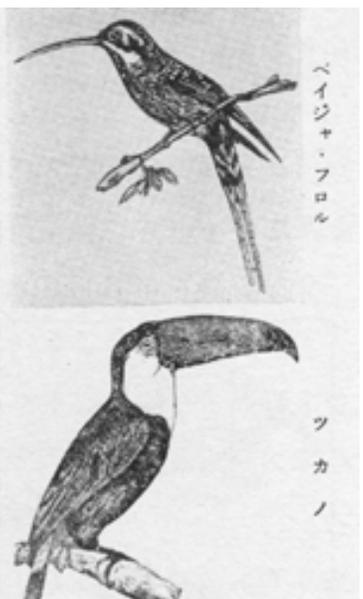
ものに比較して小さい。近年は数が少なくなっているが北東地方の草原に見ることができ。

ブラジルは、発見された当時、「パパガイオの地」と呼ばれたほど、パパガイオ(おうむ)の多い国である。

最も大きい種類のくものをアララといい、色どりが美しい空色の部分の多いものはアララ・アズルといい、黄色の部分の多いのはカニンデー、赤の部分の多いものをアララ・ベルメリヤと呼ぶ。小さいものにペリキット（いんこ）がある。パパガイオの中には、人語のまねをするのである。

ペイジャ・フロル（はちどり）は、鳥類の中で最も小さなもので、体長は6cmぐらいのものもある。花から花へと飛んで、小さな虫を捕えて食べる。ペイジャ・フロルは保護鳥であって、みだりに捕えてはならない。

ツカノは、体長と同じぐらいの長さのあるくちばしを持っている。体色は黒が大部分で、くちばしは、みかん色である。熱帯の密林に群れをなしてすんでいる。



5 光と色と音

イ 光について

わたしは、踏まれても、けられても痛くありません。

光がなくなれば、いなくなります。

わたしは、なんでしよう。

それは影です。太陽がかんかん照っているとき、木の下の地面には、影ができています。このように、何か前方にある物にさえぎられて、光が通らなくなったため、暗くなったところを影といいます。進んで来た光は、物に当たると、そこからね返ります。それを回って進むということはありません。光は常にまっすぐに進みます。暗いへやの中に、小さな穴から差し込む光が、直線になっっていることでも

(新ポル語 arara/arara-azul/can
inde/periguito)

それはわかります。また、くの字に曲った筒を目に当てて物を見ようとしても、何も見えません。そのことから、光の直進を知ることができます。

光の速さは、1秒間に30万kmです。これは、地球の回りを7.5回も回る速さで、音が空中を伝わる速さなどは、比べものになりません。こんなにはやい光でも、太陽から地球に届くまでに、約8分かかります。

太陽は、地球から非常に遠い所にありますが、地球よりも、ずっと大きな天体ですから、その光線は、大体、平行に進んで来ます。このことは、写す物を壁の近くに置いて、遠くにおいても、その影の大きさが変わらないことでもわかります。ところが、ろうそくや電球の光で、物を照らした場合は、壁から遠くに物を置くほど影が大きくなります。だから、ろうそくや、電球の光は、一点から四方にひろがる光であることがわかります。

光が物にさえぎられて、はね返ることを光の反射といいます。日光の当たらないへやの中でも明るいのは、太陽の光が反射してはいつて来るからです。光は、ある面に当たると、当たった角度と同じ角度で、反対側へ反射します。たとえば、ある面に30度の角度で当たった光は、反対側へ30度の角度で反射し、45度で当たると、反対側へ45度で反射します。また、真上からは

いつて来ると、真上に反射します。光をよく反射する物に、鏡があります。鏡の前に立つと、自分の像を自分で見ることができません。これは、鏡に当たって反射した光が、自分の目にはいつて来るからです。鏡のような面に当たる光の反射を正反射といい、すりガラスのようなでこぼこのある面に当たる光の反射を乱反射といいます。

光は、空気の中を通るとき、直進しますが、空気から水中にはいるときや、水中から空気中に出るときなどに、その境の所で進む向きが少し変わります。このように、光が折れ曲ることを光の屈折といいます。茶わんに小石を入れ、茶わんのふちう小石がかくれて見えなくなる位置に目をすえます。それから茶わんに少しずつ水を入れると、だんだん小石が見えてきます

(088 . j p g 挿絵あり。横書き、縦表記)

す。また水を入れた茶わんの中に、はしなどを斜めに入れると、はしが水ぎわから折れ曲ったように見えます。これらは、光が水中にはいるとき、屈折することを示すものです。水ばかりでなく、他の液体や、ガラスのようなものも、光を屈折させます。

ほたるの光 窓の雪 ふみ読む月日重ねつつ

という歌があります。この歌の中にふくまれている意味は、夏が来ると、ほたるを集めて、その光で本を読み、冬になると、窓の外に積もっている雪のあかりで勉強す

るということです。ほたるの光もあかりになるでしょうが、人間は、光を出すいろいろなものを発明してきました。ろうそく、石油ランプ、ガスランプ、電気を応用した各種の電灯など、その種類はますます多くなっています。

また、光の性質を応用した機械、器具もたくさんあります。電球を牛乳色のガラスで作ってあるものも、電灯にかさをつけるのも、光の乱反射を応用して光をやわらかく、明かるくするためです。また、光の正反射を応用したものに、潜望鏡や双眼鏡があります。光の屈折作用を応用したものも、また、多数あります。簡単なものには、虫めがねや、近眼、老眼のめがねなど、精巧なものでは、望遠鏡、顕微鏡、写真機、撮影機、映写機などがあります。

ロ 色について

これまで、光はどのような性質を持っているか、というのを調べてみました。

こんどは、光と色との関係について調べてみましょう。

わたしたちのまわりには、さまざまな色のものがあります。赤とか青とか黄とかいいうのは、光の波の大きさが

それぞれ違うからです。たとえば、赤く見える色は、
(089 . jpg 挿絵あり。横書き、縦表記)

1cmの中に光の波が12500はいり、黄に見える色は18200で、青が23300はいます。このように、光の波の大きさが違うため、色を区別して感じる事ができるのです。

このことは、光をプリズムに当ててみるとはっきりわかります。光は、プリズムの厚い方へ屈折して、さまざまな色に分かれます。

赤の屈折が最も小さく、次が だいだい、黄、緑、青、紫、あいという順に、プリズムから出て来ます、こういうと、にじの色がその順に並んでいることを思い出すでしょう、にじは、にわか雨のあとなど、空に水の粒がたくさんあるとき、太陽の反対側に現われます。これは、水の粒がプリズムのようになって、日光を七つの色に分けているからです。

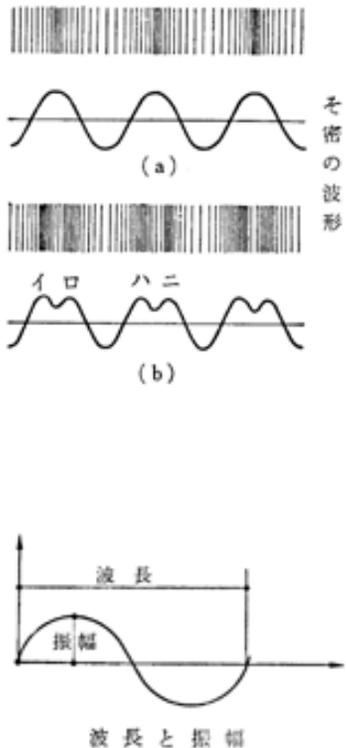
日光は、さまざまな光が混じり合ったものです。それでは、色の中に白がありますが、光の中にも白があるのでしょうか。いいえ、白い光はありません。どんな色の光も平等に反射しているものは、みな白く見えます。また、どんな色の光も平等に通すものは無色透明で、どんな色の光もみな吸収するものは黒く見えます。赤く見えるのは、赤い色の光だけを反射して、外の色の光をみな吸収

しているからです。青い色は、青い色の光だけを、黄色に見えるのは、黄色の光だけを反射しているので、青、また、黄に見えるわけです。

ハ 音について

音楽を聞いたり、静かな話し声に耳を傾けたり、また水の流れるさわやかな音を聞いたりしていると、「音」の美しさに心を打たれます。ところが、車のきしむ音、板をひく のこぎりの音、その他、騒音を聞いていると、いたたまらないような不快を感じます。

わたしは、「音」について、友だちといっしょに本で調べたり、先生に教えていただいたりしたことを次のようにまとめてみました。



「音は、どうして起こるのでしょうか。」

「物と物とがぶつかりると、物が振動します。その振動が空気を伝わって、四方にひろがります。そして、それが耳にはいつてくると、わたしたちは、音として感じるのです。」

「音は、どんなにして伝わるのでしょうか。」

「音は、空気や水の中などを、波の形をして伝わっていきます。だから音波といえます。水の波紋は、水面に山と谷とを作ってひろがります。物の振動は音波となって、空気に濃い所と薄い所を作りながら、上下四方にひろがります。水の波で、山の所が、音波では、空気の濃い所に当たります。水の波で、山から、次の山までの距離を波長といいます。音波では、空気の濃い所から、次の濃い所までの距離を波長といいます。また、水の波で、山が高いほど振幅が大きいです。音波では、空気の濃い所の濃さが強いほど振幅が大きいです。」

「音に、高い低いがあるのは？」

「物の振動する回数を振動数、または、サイクルといいます。1秒間に振動する回数が多いほど音は高くなり、回数が少ないほど低くなります。物が振動しても、その回数が、1秒間に16以下ですと、音として感じません。回数が2万以上になると、これもまた、音として感じま

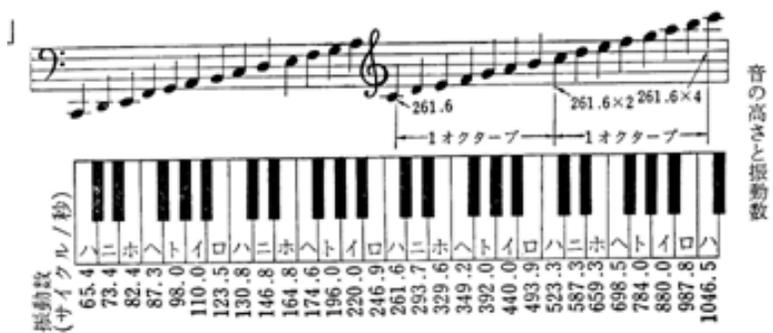
せん。これを超音波といいます。」

「音に、強い、弱いがあるのは？」

「物が大きく振動するとき、つまり、振幅が大きいほど音は強く、振幅が小さいほど、音は弱いのです。」

「音の伝わる速さは、どのくらいでしょうか。」

「音が空気中を伝わる速さは1秒間に340m



(091.jpg 挿絵あり、横書き、縦表記)

です。鉄ではもつと速く、約500mです。」

「山びここというのは、なんででしょうか。」

「山に声が当たると、はね返ってきます。これを山びこ

といいます。音の反射なのです。」

「音色に違いがあるのは、なぜでしょうか。」

「振動数が等しくて、音の高さは同じでも、その音波の形が違っていると、音色が違うのです。人の声、ピアノ、バイオリン、それぞれ音色が違うのは、音波の形に違いがあるからです。」

「共鳴というのは、どんなことでしょうか。」

「振動数の等しいものの一つに振動を与えると、他の一つも振動します。このことを共鳴といいます。」

「つりがねを鳴らすと、うなるのはなぜでしょうか。」
「かねは、複雑な構造をしているので、たたくと、いろいろ違った振動数の振動が起こります。振動数のごくわずかずつ違う、幾つもの音波が同時に出るので、重なり合って、うなりになって聞えます。」

旅

愁

作詞 犬童球溪（いんどうきゆうけい）

更（ふ）け行く秋の夜，旅の空の，

わびしき思いに， ひ とりなやむ。

恋（こい）しやふるさと，なつかし父母

夢（ゆめ）じにたどるは，さとのいえ路。

更け行く秋の夜，旅の空の，

わびしき思いに，ひとりなやむ。

窓うつあらしに， 夢も破れ，

はるけきかなたに ころろ迷う。

恋しやふるさと，なつかし父母，

思いに浮かぶは，森のこずえ。

窓うつあらしに，夢も破れ，

はるけきかなたに，心まよう。

手紙は、人と人との心を結ぶ橋であると言われる。心のもったたよりは、受け取る人を喜ばせるばかりでなく、将来、親しく交わる上でいしずえにもなろう。

手紙

(093.jpg 罫有り。左p横書き)

一 実用的な手紙

実用的な手紙は、社会生活の必要から生まれるもので、通知、注文、依頼、問い合わせ、その他いろいろあります。実用の手紙は、事務的なもので、用事の通じることが第一です。文は、明快でなければなりません。

イ・転居の通知

【拝啓、その後、お変わりもなくお過ごしのことと思います。

さて、このたび父が会社の都合で、サン・パウロ市に転勤になりましたのでサン・パウロ市、アクリマソン区、〇〇

街、三八一番に転居しました。住宅街の静かな所です。こちらへおいでの節は、是非お立ち寄りください。取り急ぎお知らせします。皆さんによろしく。

敬具

二月十一日

川上洋一

池田信男(お)様】

ロ・クラス会の案内

【 1月5日

青木一郎様

泉学園第8回卒業生

幹事代表 秋山きく子

C. Postal 1122, Mari

lia C. P.

前略 わたしたちが母校を卒業してから、早くも1か
年が過ぎました。職場や学校での生活も落ち着いてき
たことでしよう。お互いに、生活振りを報告し合うこ
とは、まことに楽しく、意義のあることと思われま
す。そこで下記のとおり、第1回クラス会を催します。

当日は、母校の先生方も、おいでくださることになっています。どうぞおくり合わせの上ご出席ください

記

日時 1月30日(日) 午後1時から5時まで
場所 母校の教室

会費 1000・00クルゼイロ(当日受付でいただきます。)なお、準備の都合がありますので、1月25日までに出、欠席を、秋山きく子まで、お知らせください。】

(新ポル語 A c l i m a c a o)

(094 . j p g 左 p g 横書き。)

ハ・本の注文

【前略 日伯文化普及会発行の日本語教科書および、日本語かきかたを下記あてに、至急お送りください。代金は送料と共に〇〇銀行小切手(C r O, 000)を同封しましたから、よろしく願います。

1964年1月25日

青葉学園 園長 坂本 正雄

C. Postal 950, Santos

山野書店 御中

記

書名	巻	数量
1. ニッポンゴ	(1)	20冊
2. にっぽんご	(4)	15冊
3. 日本語	(8)	12冊
4. 日本語	(9)	8冊
5. ニッポンゴ・カキカタ		(1)
20冊		
6. にっぽんご・かきかた	(4)	15冊

あて先

Masao Sakamoto

C. Postal 950, Santos

二、問い合わせ

【今月にはいつて、急に寒くなりました。

おじ様、おば様、お元気でいらつしやいますか。わたしは、中学生になってから、一度も病気をしたことがなく、毎日元気で通学しています。

父も母も、この冬はたいへんからだの調子がいいと言っていますので、ご安心ください。弟は、この間かぜをひきましたが、すぐ元気になって、毎日あばれ回っています。

さて、きょうは、おじ様にお願いがあります。それは、冬休みの宿題についてのことです。学校から、「都会から離れた所に住む人々の生活について。」という題の宿題が出ましたので、そちらへ行つて、おじ様の村の生活について、実際に見たり聞いたり、教えていただいたりしたいと思います。ご都合は、いかがでしょうか。おうかがいします。弟も、是非連れて行つてくれとせがんでおります。】

(095.jpg)

【父母からもよろしくと申しております。

恵子さん、秀男（お）さんによろしく。

さよなら

七月五日

西山みどり

おじ様
おば様】

ホ、その返事

【みどりさん

父母あてのお手紙を読みました。皆さんお元気で何よりです。わたしたち

も変わりなく過ごしています。

この冬休みには、農村の人たちの生活について、研究するのだそうですね。

この間、お手紙をいただいたとき、「中学生になると、休み中でも遊んでばかりはられないのだね。」と、父が言っていました。

わたしたちの近所では、一日中、畑の仕事で暮らしている家ばかりで、都会とは、全く違った生活をしています。こちらに来て、なん日かを過ごされたらきつといい研究ができると思います。朝露を踏んで、野菜畑を見回るのも、都会では味わえないものです。去年、電灯もつきまじり、会館も建ちました。どうぞ、おいでください。両親も、お待ちしています。

秋夫さんも、是非連れてきてください。秀男が楽しみにしています。

日時を知らせてくだされば、バスの停留所までお迎えに出ます。父も母も、この二、三日は、忙しいので、わたしが代筆しました。

おじ様、おば様、秋夫さんによろしく。

さようなら

七月十日

北村 恵子

西 山 みどり 様

二 こころの手紙

イ、合宿地から

【おかあさん

出発するときには、いろいろとありがとうございました。
た。

初めて家を離れるので、なんとなく心細く思いました
が、きのうひる過ぎ無事に着きました。

ぼくらを乗せたバスは、広いアンシエッタ街道を一気
に走って、海岸山脈を、越しました。山脈を下るとき、目
の下にサントスの海が見え、とてもきれいでした。

ぼくらの宿は、プライア・グランデの海岸近くにありま

す。ぼくのへやは二階で、青い海が窓いっぱいに見えます。白い砂浜には、夕方でも大勢の人が遊んでいて、たいていそうにぎやかです。夜になると、静かになって、ただ波の音だけが、ざぶんざぶんと聞こえます。

けさ、先生から、ここでの生活について注意がありました。午後から先生に連れられて、町を見物に行きます。これから十日間、勉強をしたり、海水浴をしたりして、楽しく過ごしたいと思います。

おかあさんが、いちばん心配してくださった食事のことですが、友だちといっしょなので、たくさん食べられます。どうか、ご安心ください。

おかあさんが持たせてくださった物のうち、お菓子などは、友だちにも分けてあげました。みんな大喜びでした。おかあさん、どうもありがとうございます。

それでは、また、おたよりをします。 さようなら。

一月十五日

光一

おかあさん】

口、日本のまだ見ぬ友へ

【わたしは、新聞で、あなたの方が、ブラジルに住むわたしたちとの、文通を希望しておられることを知りました。お互いに手紙を交換することは、たいへん有意義なことであり、また、楽しいことでもあります。わたしは、思い切って、未知のあなたにおたよりを書くことにしました。

それでは、初めに自己紹介をします。

わたしは、岡本パウロと言います。現在中学三年生で、十四才です。家族は、父母、姉、弟、それにわたしの五人です。父は、薬局を開いています。姉は、師範学校に通っています。弟は、まだ小学生です。

サン・パウロから、北西へ八十キロメートルぐらい離れた所にあるカンピナスという町に住んでいます。カンピナスには、州立農事試験場があり、パウリスタ線とモジアナ線の起点になっていて、トマト、ぶどう、いちごなどの集散地です。古い町で、いろいろな学校がたくさんあり、樹木が多く静かです。有名な作曲家、カルロス・ゴメスの生まれた所でもあります。

あなたは、町にお住まいですか、それとも、いなかです

か。

あなたご自身のこと、また、家族のことや学校のこと、住んでいらつしやる所、その外、日本のことについてお知らせください。あなたからのお手紙を、お待ちしています。

この次には、こちらのカーニバルの様子をお知らせします。

同封の写真は、わたしの家と家族の者たちです。

右はしに立っているのがわたしです。

二月 一日

P a u l o O k a m o t o

R u a B a r a o d e

J a g u a r a N o 1472

C a m p i n a s S . P a u l o

B r a s i l

ハ、フィリップの手紙

フランスの小説家、シャルル・ルイ・フィリップは、美しい心が文面にあふれている手紙を数々残しています。国も時代も違いますが、わたしたちの心を強くうちまします。

山内 義雄（やまうちよしお） 訳

【おかあ様と、ちよつとお話をしようと思います。わたしは、短い旅をしたあとで、七時にパリに着きました。おかあ様とお別れしてから、こうして机に向かうまで、わたしは一分間も、おかあ様のことを考えずにはいられませんでした。なつかしいおかあ様、わたしは、おかあ様がこの世の中で何にも増して、好きなのです。お別れしてからというもの、わたしにとっていちばんつらかったのは、おかあ様が悲しがっていらつしやるだろうと思うことでした。子どもたちのことを、お考えになってください。そして自分には、まだ子どもたちが残っている。子どもたちは、自分を十分に愛してくれている。

だから、自分は確かに世界中で、一人ぼっちではないのだと、お考えになってください。一度は必ず起こらなければならぬことが、起こつたというに過ぎないのです。わたしたちは、おとう様のために、その思い出を守ることにしましょう。おとう様のお写真を、わたしはいつも自分のそ

ば、机の上に置きましよう。

一生を通じて、幾たびとなく、おとう様のおことばを思い出すことにしましょう。そして、それは、わたしにとつて、この上もない忠言であってくれるでしょう。しかし、おかあ様、運命には、従わなければなりません。寿命にも負けなければなりません。なにしろ、それは、わたしたちより強いものなんですから。

わたしは決心しました。つらいことにも耐えて生きましよう。しかし、どうしても耐えられないことがあるとしたら、それは、おかあ様が悲しがっていらっしやるということですよ。でも、勇気を出して、忘れてしまおうとなさるには及びません。なにしろ、おかあ様にも、わたしにも、とても忘れたり】

(099.jpg) 【囲いあり】

【できないことは分かり切っているのですから。しかし、どうか力をお落としにならないでください。そして、ご自分の生活や、子どもたちの生活のことを考えて、この世の中には、まだ幸福が残っている。なぜかと言えば、妹にしても、わたしにしても、心からおかあ様を愛しているからだ、こうお考えになってください。

おかあ様。いまおかあ様が力を落としておしまいでしたら、あなたのルイは、それはそれは悲しがらなければなりません。悲しみのために、からだをおいためになるなん

て、どうしても考えたくないのです。いつも、おかあ様がしやんとしていてくださって、どっちみち避けることのできないことに対して、しつかりした覚悟をお定めになり、自分を愛していてくれる子どもたちのことを思つて、安らかに生きていってくださると、思つていたのです。

ランプとコーヒーいれとは、あしたお送りします。

では、おかあ様、さようなら。

一九〇七年四月一〇日

パリ あなたのルイ

お か あ 様】

三 手紙のエチケツト

西山みどりさんがおじさんに出した手紙と、恵子さんからの返事とを比べてみましょう。「お元気でいらつしやいますか。」「ご都合はいかがでしょうか。」「お元気で何よりです。」「研究するのだそうですね。」「このように、相手によつて、ことば使いが変わります。おじさんやおばさんには、敬う気持ちが現われたことばを使いますし、いとこには、親しみのこもった言い方をします。

いろいろな手紙を見て、ことば使いを調べてみましょう

う。ていねいなことばも、決して体裁や形だけのものではなく、心持ちの現われであることが大切です。必要以上にていねいになったり、へりくだったりするのはいけません。

(100.jpg)

手紙を書く場合、大体の形式や、よく使われることばを覚えておきましょう。手紙の文章を分けると、次の三段になります。

一、前書き、 二、本文、 三、結び、

前書きは、あいさつに当たることばです。その初めに「拝啓」「謹啓」などと書きます。また、前書きを省く場合には「前略」と書きます。このごろは、このようなことばを使わず、すぐ時候のあいさつにはいる場合もあります。

次に、先方の安否を尋ねることばを書きます。それから、自分の方のことを書きます。その場合、自分側のことばは、敬語を使いません。

本文は、手紙の眼目です。用件によって違いますが、目的とする所を正確に、順序よく、そして簡潔に書くことが大切です。

相手に、気持ちよく読んでもらうためには、礼儀を守って、失礼にならないように、ことば使いに気をつけます。字配りには、十分注意しなければなりません。先方のことは、行の終わりに来ないように、自分のことは、行の初め

に出来ないように、また二字、三字の熟語は、二行にわたらないように気をつけます。

結びには、心をこめたあいさつのことばを書きます。相手や、その家族の健康を念じ、敬意を表わして、「皆様のご健康をお祈りします。」とか、「どうぞ、ごきげんよろしく」とか、「ご両親によりしくお伝えください。」とかいうことばを付け加えます。

結びの最後には「敬具」「拝具」「かしこ」などの留め書きを書きます。

日付け、差し出し人、あて名も忘れてはなりません。日付けは、本文より一字分ぐらい下げて書き、差し出し人の名は、日付けの下か、一行左に寄せて、下の方に書きます。あて名は、本文と同じ高さに書いて、敬意を表わします。あて名に付ける敬称は「様」が普通ですが、友人の場合は「君」、先生には「先生」と書きます。

団体の長に出すときは「殿」、会社や商店にあてる場合は「御中」を用います。

全部書いてしまったから、思い出したことを書き添えたいときには「追って」として、数行を書き加えます。

封筒の所書きやあて名は、誤りなく配達されるように、はつきりと正しく書きます。あて名の人以外、人の手紙はあけるものではありません。

紹介や照会、依頼の手紙を受けた場合、なるべく速く、それに対する返事を書くのが礼儀です。忙しいからといって、いつまでもそのままにしておく、相手に迷惑をかけてしまうこともあります。

四 人をさすことば

日本語には、代名詞がたくさんあります。特に、人を差し示す代名詞は、数が非常に多いのです。たとえば、自身を差し示す代名詞では、「私」「わたし」「わし」「あたし」「あたい」「ぼく」「おれ」「自分」「わがはい」など、たくさんあります。また、相手を差し示す代名詞は、「あなた」「あんた」「きみ」「おまえ」など、たくさんあります。日本語では、こんなにたくさんの方名詞を、話をする相手によって、いろいろ使い分けているのですから、実にたいへんです。

たとえば、話をしたり、手紙を書いたりするのにも、友だちに対しては、「ぼく」を使い、先生に対しては「わたし」や「私」を使います。おどけた口をきくようなときは「わがはい」などと言うこともあるでしょう。

こんな具合に、同じ人が、場合により、相手によって、

幾つもの代名詞を使い分けるのが、日本語では普通のことなのです。もし、その使い方を誤ったら、日本語の正しい使い方を知らない人だということになってしまいます。たとえば先生に向かって自分のことを「おれ」と言ったとすると、その人は、ことばの礼儀を知らない人だと言われます。

つまり、日本語では、この代名詞は、こういう場合に、こういう人と話をするのに使う、この代名詞は、こういう人と話をするときでなければ使えない、というふうに、一つ一つの使い方が、ちゃんと決まっています。

そんなわけですから、ある人に対しては、どの代名詞も当てはまらない、ということも起こってきます。たとえば、自分の父親に対して、なんとという代名詞を使ったらいいでしょうか。「あなた」でも「きみ」でもおかしい。適当な代名詞が見つからないではありませんか。結局「おとうさんは…」と呼ぶことになります。先生

(102.jpg)

に対してはどうでしょう。これも「あなた」だの「きみ」だのは使えません。やはり、「先生」「先生は…」と言うことになります。

このように、人をさすことばの多いことは、日本人のもの考え方、人の扱い方と密接な関係があります。日本語について考える場合、代名詞の数の多いことは、敬語と共

に、注意を要することの一つです。

五 大意や要旨の捕え方

皆さんは、新聞の論説や、雑誌の論文を読んで、いったい何を言っているのか訳が分からず、ついめんどろくさくなつて、投げ出してしまふようなことはありませんか。むずかしいことばが多過ぎるために、文章の内容がつかめないこともあります。ことばとしては、あまりむずかしくないのに、文章の組み立てがこみ入っていたり、筆者の考えの進め方がのみ込めなかったりして、文章が分からなくなつてしまふことがあります。それは、筆者に罪のある場合もありますが、多くは、文章の大意や要旨を捕える方法を知らなかったり、その訓練ができていなかったりすることが原因しています。

大意や要旨を捕えるとは、どういうことでしょうか。簡単に言うと、次のようになります。

大意を捕える。一つの文章を幾つかの部分に分けて、それぞれの要点を捕え、その幾つかの要点を、文章の筋に従つて連絡のあるように、簡明にまとめる。

要旨をとらえる。大意の中に取り入れられた幾つかの要点のうち、最も主要なものを取り出して、簡明にまと

める。(要旨は、「中心思想」と言われることもある。)

文章の大意や要旨を捕えるのには、その文章の題を手がかりとして読んでいくことです。題の外に、それについての解説があれば、それも頭の中に入れて置いて読むことにより、その文章の内容を、たいした誤りなく捕えることができます。

一般に、長い文章は、幾つかの段落に分かれています。それぞれの段落が、文章

(103.jpg)

全体の中で、どのような意味を持っているか分からなくては、結局、長い文章全仕の大意や要旨を捕えることはできないわけです。

では、段落の大意を捕えるには、どうすればいいでしょうか。

一、何について、どんなことを述べようとしているか。ひとつおりの理解すること。

二、その段落の中で、なん回も出てくるような語句に注意すること。

三、その段落を内容の上から、さらに幾つかの部分に分けて、それぞれの要点を考えること。

四、段落の中の各部分の要点を、互いに比べ合わせること。(論説や論文は、多くの場合、筆者の述べようとする中心思想について。)

- 1、前置きを添えたり、
 - 2、さらに詳しく説明したり、
 - 3、強調したり、
 - 4、理由を述べたり、
 - 5、証明したり、
 - 6、たとえばや実例をひいたり、
 - 7、外の立場と比較、または対照させたり、
- して、筆者の意見を明らかにしようとしています。ですから、前置き、説明、強調、理由、論証、引例、対照といったような部分は、中心思想、つまり要旨に比べると、重要ではなくなるわけです。実際には、どこが強調の部分であり、また説明の部分であるかを見分けることは容易ではない、のですが、これも、練習を積みめば、正しく、しかも速くできるようになります。

段落の中で、要旨がどのように現われてくるか、その現われ方には、四通り考えられます。

- 1、要旨が段落の最初に現われている場合。
- 2、要旨が段落の末尾に現われている場合。
- 3、要旨が段落の中途に現われている場合。
- 4、要旨が段落の中の幾つかの個所に散らばって、少しずつ現われている場合。

特に、段落の要旨を捕えることのむずかしいのは、この四つのうち、3と4の場合です。

手紙と日記

旅行先や、滞在先から、見たこと、聞いたこと、感じたこと、思い出したこと、なんでも書いて、家の人に送るといい。旅から家に帰ると、自分より先に、いろいろな思い出のメモが着いています。それをそのまま、はっておくと、すばらしい日記になるものです。



人間の生活には、着ること、住むこと、食べること、つまり消費が必要です。消費のために、人間はたえず、自然に働きかけて、物を作り出します。これを生産と言ひ、そして作り出したもので市場に出されたものを商品と言ひます。

生産と商品

一 織物の話

人類が初めて布を作ったのは、原始時代だと言われています。

そのころは、動植物の繊維を集めて糸にして、手で編んでいました。農耕をして生活する時代になってから、簡単な道具を使い、糸を紡いだり、織ったりするようになりました。植物のしるや、鉱物の粉を油で練ったもので糸を染め、美しい模様をつけることも考えつきました。

時代が過ぎて、農業や牧畜が盛んになると、綿が栽培され、ひつじがたくさん飼われるようになって、布の原料も多くなりました。糸を紡いだり、布を織ったりする道具も発達しましたが、十八世紀の中ごろまでは、手工業の程度でした。織物が大量に生産されるようになったのは、十九世紀になって、自動織機が発明されてからです。そして、今日では、麻、絹、羊毛などの天然繊維ばかりでなく、ナイロン、ビニロン、テトロンなどの化学繊維が現われ、織物工業は、いよいよ盛んになっています。

綿織物は、紀元前、三千年ごろ、インドで初めて作られ

たと言われています。インドで始められた綿の栽培と、綿織物の製法は中国に伝わり、そして、日本にも伝わりました。こうして綿織物は東洋の特産物となり、ヨーロッパ諸国へ輸出されていきました。特にインドは、糸車を国の印としているほどで、綿織物の生産がたいそう盛んでした。ところが十九世紀に打って、イギリスから来る機械織りの綿製品に押され、綿織物工業は、立ち行かなくなりました。そして、イギリスに原料を供給する農業国になってしまいました。しかし第二次世界大戦中に、インドの織物工業は復活して、現在では、綿織物の輸出国になっています。

ヨーロッパでは、早くから毛織物が作られていました。特にイギリスでは、十六世紀になってから盛んに毛織物が作られ、十八世紀の中ごろに機械工業が起こり、綿織物も生産するようになりました。その後、イギリスの織物工業はますます栄え、製品を世界中に輸出するようになりました。

天然繊維の一つである生糸は、蚕が作るまゆから取ります。養蚕は、紀元前二千六百年ごろ中国で始められ、五世紀ごろ、近東を経てイタリア、フランスに伝わりました。また、同じころ、中国から朝鮮を経て、日本にも伝わりました。日本では養蚕が盛んに行なわれ、世界第一の生糸生産国になりました。また、日本は、生糸の生産だけで

なく、十九世紀中ごろから、綿織物工業も盛んになり、近年、イギリスと肩を並べる綿織物の生産国になりました。そればかりでなく、日本は、今日、化学繊維の生産でもアメリカに次ぐ、世界第二位になっています。

アメリカは、イギリスへ綿織物工業の原料を供給していましたが、急速に綿織物工業が発達し、またたく間に、世界第一の綿織物生産国になりました。また、毛織物の生産では、イギリスに第一位をゆずっていますが、化学繊維の生産では、世界第一です。

以上の国々の外、綿織物工業の盛んな国は、ソビエト連邦、中国、フランス、ドイツ、イタリア、ブラジルなどです。

ブラジルは、もと、綿製品の輸出国でしたが、イギリス、アメリカの製品に押され、原料輸出国になってしまいました。現在も、綿は、ブラジルの重要な輸出品ですが、近年、綿織物工業が復活し、綿製品の生産が高まって、輸出国の地位を取りもしました。

綿の栽培に適する所は、熱帯と掛熱帯です。インドのインダス川流域、アメリカの南部大西洋岸から、メキシコ湾沿岸、中国の揚子江（ようすこう）沿岸、エジプトのナイル川三角洲、ブラジルの大西洋沿岸、ソビエト連邦の中央アジアなどが、綿のおもな産地です。しかし、綿織物工業は、必ずしも、原料の産地で盛んになるものではなく、イ

ギリス、日本などのような、原料の少ない国でも発達します。それは、労力と動力がたやすく手にはいり、交通機関がよく発達していて、大工業を起こすに適しているからです。

生糸の生産には、非常に多くの労力が必要なので、日本、中国、イタリア、ソビエト連邦、インドなどのような、労力の多い国に栄えています。

羊毛の産地は、南半球に多く、オーストラリア、ニュージーランド、アルゼンチンなどが良く知られています。その外、ソビエト連邦、南アフリカの国々、アメリカ、イギリス、ウルグワイなどです。羊毛の生産には、牧草のよく育つ広大な土地を要します。毛織物工業も、原料の産地にはあまり発達せず、綿織物と同様に、諸工業の発達した国々で栄えています。イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、ドイツ、日本、ソビエト連邦などが、おもな毛織物の生産国です。

化学繊維は、十九世紀の末に発明され、二十世紀になってから、ヨーロッパで工業化されました。天然繊維は、その産出地が限られ、生産にも限度があります。ところが、化学繊維は、進んだ科学の力によって、品質を改良し、大量に生産することができます。現在、化学工業の盛んな国は、アメリカ、日本、イギリス、ドイツ、イタリア、フランスなどです。

二 紡績工場を見る

わたしたちの見学旅行も、サン・パウロ市に着いてから、きょうで三日目になります。最初の日には、市内の名所をバスで見物して回りました。二日目のきょうは新聞社と、製紙工場を見学しました。そして、きょうは、市の郊外にある大きな紡績工場を見学に行きました。

午前九時、わたしたちは、貸し切りのバスに乗って出発しました。市街を通り抜けると、両側に野原や林が見え、その間に、家がぽつぽつと建っていました。バスは、広いアスファルト道路をぐんぐん走りました。しばらくすると、向こうに小高い丘が見えました。すると、先生が、「ほら、あの丘の右の方に、大きな白い建物が見えるだろう。あれが紡績工場だよ。」

と言われました。伸び上がって見ているうちに、バスは丘のすそをぐるっと回って工場の門の前で止まりました。

わたしたちは、工場の人に迎えられて、門の中にはいりました。広い敷地には、幾むねも、大きな建物が建っていました。

わたしたちは、先生から見学の心得を聞いて、それからいちばん大きな建物の前に行きました。入口で工場長が出迎えてくださいました。

「皆さん、よくいらつしやいました。これから工場の中をお目にかけてますが、その前に、紡績と繊維について、少しお話しましょう。」

工場長さんの話

紡績とは、繊維を長く続かせ、より合わせて、すじ糸にすることで、つまり、繊維を糸にする仕事です。これを、幾種類もの機械によって、大じかけに行なうのが紡績工業です。

繊維には、天然繊維と化学繊維とがあります。天然繊維のうち、綿、麻などを植物性繊維と言ひ、絹、羊毛などを動物性繊維と言ひます。天然繊維には、鉱物性繊維と言われる石綿、ガラス繊維などもあります。化学繊維には、木材や綿などの天然繊維を、一たん溶かして、もう一度繊維に作り変えた再生繊維と、石炭その他を原料とし、薬品を加えて作る合成繊維とがあります。

これらの繊維は、その使いみちによって、細く、また、太く、いろいろな糸に作られます。また、糸は布に織られたり、編まれたりします。わたしたちの身边には、繊維製品が非常に多く、数え切れないくらいです。

社会の進歩に従って、糸の用途はふえ、需要はますます多くなっています。

「それでは、わたしが説明しながら、ひと回りしますから、よく見ていってください。」

工場長さんは、こう言うと、先に立って建物の中にはいって行きました。わたしたちは、そのあとに続きましました。

わたしは、工場長さんの説明の要点を手帳に書きとめながら、見学して行きました。

原綿の倉庫

鉄のベルトでしめた直方体の原綿の束が、ぎっしりと積み重ねてありました。これは、産地から送られて来たままの綿で、ごみがまじっていました。みな同じような綿に見えましたが、繊維の長いブラジル北部地方の綿と、繊維の短いブラジル南部地方の綿とがあるのだそうです。

綿をきれいにする

倉庫から出て、次の建物に行きました。ここでは、大きな機械が、すごい音をたてて動いていました。この機械を、混打綿機（こんだめんき）といいます。倉庫から運び込まれた原綿は、まず、この機械にかかけられます。

一方の口からはいる綿は、機械の中を通る間に、よく打

ちほごされ、ごみやほこりが取り除かれます。他方の口から、まつ自な ふとん綿のようになって、くり出される綿は、巻き取り機に、巻き取られます。

綿を薄く伸ばす

巻き取られた綿は、次のへやに運ばれて、梳綿機（そめんき）にかけられます。この機械は、くしを大がかりにしたようなものです。ぎっしりと並んだ金属の細

メモ

- 倉庫
- 原綿の束
- 北部の綿
- 南部の綿
- ごみを取る
- こんだめんき
- 打ちほごされる
- 巻き取り機
- 伸ばす
- そめんき
- くしの歯の

かい歯の間を、綿の繊維が通ります。機械の中を通る間

に、繊維は伸ばされ、そろえられ、糸にならないくずの繊維が取り除かれます。そして、残った繊維だけが、平行に並べられ、帯のようになって出てきます。

引きそろえて伸ばす

梳綿機から出て来た繊維は、練篠機（れんじょうき）に送られます。ここで、なん本か合わせられて、引き伸ばされ、太いひものようになって出てきます。

糸の形になる

ひものようになった繊維は、次のへやに送られて、初紡機（しよぼうき）にかけられます。ここで、ざつとよりがかけられ、細いひものように引き伸ばされます。この細いひものは、また、なん本か合わせて、さらに引き伸ばされ、太い糸のようにされます。

糸になる

太い糸のようにされたものは、最後に精紡機（せいぼうき）にかけられます。ここで、一定の太さに作られ、よりがかけられて糸になり、錘（すい）に巻き取られます。

仕上げ

できあがった糸は、次のへやに送られ、巻き取られます。また、合糸機（がっしき）にかけられ、太い糸になり、より糸機（いとぎ）にかけられて、より糸になります。こうして、仕上げられた糸は、きちんと箱に詰められて、製品倉庫に納められます。

メモ【続き】

よう

- くずを取る
- 平行
- そろえる
- れんじょうき
- 太いひも
- 糸の形
- 初ぼうき
- よりがかけられる
- 太い糸
- 糸になる
- せいぼうき
- 一定の太さ
- すい
- 仕上げ

- けんしき
- 合糸機
- より糸機
- 箱づめ
- 倉庫

綿が糸になるまでの工程を見ると、紡績というのは、繊維を合わせては引き伸ばし、合わせては引き伸ばす仕事だと言えます。

工場長さんの説明を聞きながら、ひと回りしました。わたしは、大きな工場なので、きつと大勢の工員が働いているだろうと思っていました。ところが、工場内には働いている人が数えるほどしかいませんでした。よくも、これだけの少ない人数で、こんなに多くの機械が動かせるものだと、ふしぎに思いました。

商品の値段は、すべて金額で表わしますが、これを商品の価格と言います。価格には、生産者価格、卸し売り価格、小売り価格などがあります。ここに一つの商品があると思います。その商品の価格は、それを生産するのにかかった費用を土台として、最初に生産者価格が決まり次に、その商品を一手に取り扱う場合の、卸し売り価格が決まり、そして、消費者に売るときの小売り価格が決まります。それらの価格には、その商品を生産し、また動かす人たちの利

益がかけてあります。だから、商品の価格は、それが生産されてから、消費者の手に渡るまでには、だんだん高くなっていきます。

価格というものが、このようにして決まるだけであつたら簡単ですが、それに、需要と供給の問題がからまるので、たいへんむずかしくなります。需要と言うのは、買い手が買おうとする数量のことで、供給と言うのは、売り手が売ろうとする数量のことです。

まず、商品の価格が決まつて、需要の数量と供給の数量が、ほぼ同じであれば、その価格は動きません。ところが、需要が多くて、供給が少ないと、その商品の価格は上がります。反対に、供給が多くて需要が少ないとその商品の価格は下がります。このようにして決まる価格を、市場価格または、自由価格と言います。

価格には、この外に、公定価格、独占価格というのがあります。公定価格と言うのは、ガソリンや砂糖の値段のように、政府によって決められた価格のことです。また独占価格と言うのは、ある商品の生産と供給をひとり占めにして、決める価格のことです。

いろいろな商品は市場に出され、自由価格、公定価格独占価格で売買されます。そして、市場で売買されるいろいろな商品の値上がりや値下がりの各比率を平均したもののことを物価と言います。この物価の変動に特別ひびく

のは、貨幣の流通量の多少です。

貨幣の流通量が多くなると、人々は、これまでよりも多く商品を買いますが、商品の生産がふえないと、物価はぐんぐん上がります。このような状態をインフレーションと言うのです。これとは反対に、貨幣の流通量が減ると、人々は、これまでよりも、少ししか商品を買わなくなります。商品が多いのに買い手が少なくなると、物価はどんどん下がります。こんな状態を、デフレーションと言います。

和子さんは、この、おとうさんの話を聞いて、商品の値段が変動するわけがわかりました。

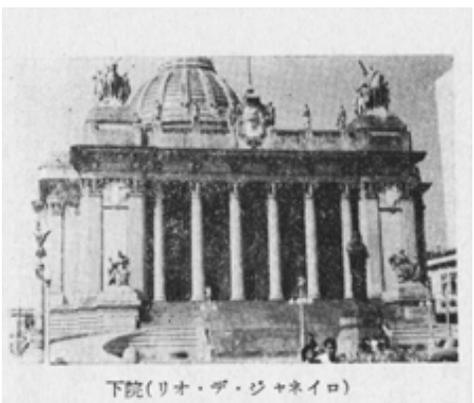
政治と選挙

国の政治とは、国に組織と秩序とを与えて国を統一し、それによって国の目的を果たそうとする仕事です。

この政治をするのは国民です。国民は、自分の代わりに議員を選挙して、政治を任せます。



上院(リオ・デ・ジャネイロ)



下院(リオ・デ・ジャネイロ)

一 政治のしくみ

政治は、わたしたちの生活を守り、わたしたちの生活をいつそう幸福にするためのものです。今日の政治のもとになる考え方は、人々が自分たちの力で、自分たちを治めていこうというのです。このような考え方を民主主義と言います。

民主主義と言えば、「人民のための、人民による、人民の政治。」というリンカーンのことばを思い出します。こ

のことばは、民主主義の意味を最も簡単に、しかも、力強く述べたものです。

しかし、大きな共同生活体では、みんなが一か所に集まって、話し合うことはできません。そこで、自分たちの代表者を選んで、意見をまとめていく仕事を任せます。今日の民主主義の政治は、代表者が集まって話し合う議会が、中心となって行なわれます。つまり議会政治の形を採っています。

これは、話し合いの政治で、代表者たちは、出された問題について、まず、めいめいの意見を出し合います。そして出された意見について、話し合って意見をまとめます。ところが、みんなの意見がまとまらない場合があります。このときは、多くの人が賛成する意見を採用し、それに決定します。こういう決め方を多数決と言います。多数決で決まった事は、たとえ、自分の意見と違っていても、従わなければなりません。けれども、多数の意見は、必ず正しいとは限らないものです。だから 多数決で決めるときでも、少数の意見をいつも尊重する心掛が必要です。

一国の内でも、地方によって生活様式が違います。地方の政治は、その地方の実情に応じて行なう方がいいわけです。たいていの国は、幾つかの州とか、県とかに分けられています。それは、さらに郡や市・町・村に分けられて

います。これらには住民の中から選ばれた幾人かの代表者が集まって、相談する議会と、決議された事を実行する機関とがあります。たとえば、市の政治では、市の議会が大本を決め、市長が、それに基づいて市を治めます。しかし、一つの国の内に、富んでいる地方と、貧しい地方がある場合、国民の生活に差が生じます。そこで国全体として、つり合いが採れるように、国へ納められた税金の一部を貧しい地方に回してやります。このようにして、国の政治は、国全体を治める働きをします。

国全体の政治となると、その仕組みも大きくなります。国の政治の基本は、憲法で決められています。そして、政治の働きは、大きく三つに分けられ、国会と内閣と裁判所が、それぞれの仕事を受け持っています。

国の政治は、国民の選んだ代表者が、国会で決めたことを基として行なわれます。国会の第一の仕事は、国の決まりを作ることで、この決まりのことを法律と言います。わたしたちは、法律に従って生活しているのです。国会の第二の仕事は、国の予算を決めることです。国の仕事をするには、多くの費用が必要ですが、その大部分は国民が納める税金でまかいます。

国会は、二つの院からできています。国会に出されたことは、この二つの院を通らなければ決まりません。

国会で決めた法律と予算に従って、実際に国



必ず正しいとは限らないものです。だから 多数決で決めるときでも、少数の意見をいつも尊重する心掛が必要です。

一国の内でも、地方によって生活様式が違います。地方の政治は、その地方の実情に応じて行なう方がいいわけです。たいていの国は、幾つかの州とか、県とかに分けられています。それは、さらに郡や市・町・村に分けられています。これらには住民の中から選ばれた幾人かの代表者が集まって、相談する議会と、決議された事を実行する機関とがあります。たとえば、市の政治では、市の議会が大本を決め、市長が、それに基づいて市を治めます。しかし、一つの国の内に、富んでいる地方と、貧しい地方がある場合、国民の生活に差が生じます。そこで国全体として、つり合いが採れるように、国へ納められた税金の一部を貧しい地方に回してやります。このようにして、国の政治は、国全体を治める働きをします。

国全体の政治となると、その仕組みも大きくなります。国の政治の基本は、憲法で決められています。そして、政治の働きは、大きく三つに分けられ、国会と内閣と裁判所が、それぞれの仕事を受け持っています。

国の政治は、国民の選んだ代表者が、国会で決めたことを基として行なわれます。国会の第一の仕事は、国の決まりを作ることで、この決まりのことを法律と言います。わたしたちは、法律に従って生活しているのです。国会の第二の仕事は、国の予算を決めることです。国の仕事をするには、多くの費用が必要ですが、その大部分は国民が納める税金でまかさないです。

国会は、二つの院からできています。国会に出されたことは、この二つの院を通らなければ決まりません。

国会で決めた法律と予算に従って、実際に国を治める仕事を行政と言います。この仕事をするのが内閣です。内閣は、総理大臣とその他の国務大臣で組織されます。内閣には、幾つかの省があり、それぞれの仕事を分担しています。世の中には、罪を犯したり、義務を怠ったりする人があります。そうした場合法律に当てはめて、罪の有り無しを決めたり、争いをさばいたりする仕事を司法と言い、これを受け持つのが裁判所です。

裁判所は、下級、上級、高等の三階級になっています。

下級の裁判所の判決に不服なときは、上級裁判に訴え、さらに高等の裁判所に訴えて、裁判をやり直してもらおうことができません。

立法、行政、司法を政治の三権と言います。この三権が確立して、その力が国内に行きわたるとき、いい政治が行なわれます。

二 ブラジルの政治

ブラジルでは、一八八九年に共和制がしかれ、一八九一年に憲法が發布されました。そして、サン・パウロ州とミナス・ゼライス州の共和党が、強い勢力を持っていて、長い間、代わる代わる国の政治を行なっていました。こうしたやり方に反対して立ったのが、ゼツリオ・バルガスでした。彼は、一九三〇年、政府に反対を唱える政党と軍部の助けを得て政府を倒し、大統領になり、その後、十年余り国を治めました。

一九四五年から、選挙によって大統領が選ばれ、それ以後、民主共和制がよく守られて、今日に至っています。

ブラジルの政府は、その形式が、アメリカ合衆国の政府に似ています。大統領は国民の選挙によって決めます。大統領は国の元首で、任期は五年となっています。

国内は二十二州と一連邦都と、四つの直轄領とに分けられています。各州の知事は、州民によって選ばれ、その任期は、四年または五年となっています。連邦都と直轄領の長官は、大統領が任命します。

立法をつかさどる国会には、上院と下院があります。

国会議員は、四年ごとに改選されます。行政をつかさどる内閣は、大統領と、各省の大臣とによって組織されま

す。

各省の大臣は、大統領によって指名されます。省は、外務、大蔵、法務、労働、商工、運輸、文部、鉱山・動力、厚生、農務、陸軍、海軍、空軍の十三省に分かれています。

司法では、連邦に、最高裁判所控訴裁判所の外、軍事、選挙、労働の三つの裁判所があります。また、州には、高等、一級、二級、三級、四級の裁判所があります。

三 選 挙

きのうは、州知事と州議員の選挙の投票日でした。

現在、ぼくのうちに、選挙権を持っているのは、いちばん上の兄と、二ばん目の姉の二人です。上の姉がいれば三人ですが、この姉は昨年結婚して、遠くの町に住んでいます。

二ばん目の姉は、ことしの八月、満十八才になって、選挙登録をすませたところです。こんど、初めて投票する姉は、大張り切りで朝早く起き、近所の友だちをさそって、投票場へ出かけました。

ぼくは、兄が行くとき、いつしよに投票場へ行ってみました。投票場の前には、もう大勢の人が来ていました。兄は、すぐ投票場にはいる人の列のあとにつきました。あとから、あとから並ぶので、見る見るうちに、列は長くなっていきました。

投票場の入り口には、選挙を管理する人が立っています。列を作って入口を通る人たちは、その人に選挙登録証を見せ、投票用紙をもらって、行きました。そして、しばらくすると、別の所にある出口から出て来ました。

大勢の人が集まるのですから、投票場はずいぶん騒がしいだろうと思っていました。案外に静かでした。

帰り道で、ぼくは、兄にそのことを話しました。

「投票場って、案外静かなんだね。」

「投票場では、あまり、おしゃべりをしないものだよ。」
「どうして。」

「話していると、どうしても選挙の話になりやすいからね。」

「選挙の話は、いけないの。」

「そう。たとえば、この立候補者はいいが、あの立候補者

は悪いと言ったり、ぼくは、この立候補者に投票するつもりだが、君はだれに投票するか、とたずねたりしてはいけない。」

「兄弟でも。」

「もちろん。親子でもいけない。だれに投票するのかは、自分で決めるのだよ。」

「でも、だれに投票していいか、判断できなかつたら……。」

「そういうことのないように、平生から政治の動きに気をつけていなければならない。立候補者の名まえが発表されたら、それらの一人一人について、どんな人かということとを調べたり、また、立候補者の政見を聞いたりして、だれがいいかということとを判断する。」

「立候補者の演説会があると、みんなが聞きに行くのは、そのためなんだね。」

「そうだよ。政見を聞いて、どの人を立てたら、国民のためになる政治をしてくれるかということとを考え、この人こそ、と思う立候補者に投票するんだ。」

道々、兄からこのような話を聞きながら、家に帰りました。

家に帰ってみると、上の姉が来ていて、母と話をしていました。

「どうしたの、ねえさん。」

「だって、きょうは、選挙の日でしょう。」

「それで、来たの、わざわざ。」

「ええ、わたしは、ここで 選挙登録をしたでしょう。それで、投票に来たのよ。」

母が言いました。

「ご苦労ね。早く投票をすましていらっしやいよ。」

「では、行ってきます。今晚、泊りますから、お願いします。」

「そうかい。久し振りだから、ごちそうしようね。」

投票に行く姉を見送りながら、父は、ひとり言のように言いました。

「さあ、だれが当選するかな。このごろは、みんなが政治に関心を持っていてから、立候補した人もたいへんだらう。」

さきほどから、へやでは、兄と姉が盛んに議論していました。議論の模様では、どうも、兄と姉の選んだ立候補者が違っているようでした。

しばらくして、上の姉が帰ってくると、まもなく夕飯になりました。きょうだい全部そろって父母を囲み、上の姉の話の聞いたり、選挙の話をしたりして、なごやかに食事をしました。

民主主義の政治は、国民に選ばれ、国民を代表する人々によつて行なわれます。いい代表が選ばれなければ、いい政治は行なわれず、政治がよくなければ、国民は幸福になりません。

こう考えると、国民の代表を選ぶ選挙は、国民の一人一人が、政治に参加するだいじな機会であると言えます。選挙のとき、いい加減な気持ちで投票したり、また棄権したりするのは、自分の生活を大切にしないことであり、ひいては、国を愛していないということになります。

投票も大切ですが、もう一つ大切なことは、当選した人が、どんな政治をするか、それによく注意することです。いつも政治に注目し、政治について自由に話し合い、国民の声として世論を作ることです。そして、その世論が、政治の上に現われるようにしなければなりません。

民主政治では、政治の主権が国民にあります。政治のいい悪いは、政治や議会の責任だけではなく、国民一人一人の責任でもあります。このことをしっかりと心に刻んで、国民が互に力を合わせ、明るく、正しい政治が行なわれるようにしていかなければなりません。

ぼくは、夕飯を食べながら、父や兄から、いろいろな話を聞き、選挙がどんなに大切なことかということが分かりました。

自由独立の精神

人民が、無気力で、少しも自由独立の精神がなく、いたずらに自分一人、一家のことだけ知って、国家、おおよけの事の上には、いっこう、心を向けることなく、何もかも政府にゆだね、自分に受け持つ気持ちがあれば、その国は弱くなり、衰えないということはありません。

（値木枝盛（うえきえもり）の民権自由論より）

故郷の廃（はい）家（か）

作詞 犬童球溪（いんどうきゆうけい）

幾とせふるさと、来てみれば、
さく花 鳴く鳥、そよぐ風、
門べの小川の、ささやきも、
なれにし昔に 変わらねど、
荒れたるわが家に
住む人 絶えてなく。

二 昔を語るか、そよぐ風、
昔をうつすか、すめる水、
朝夕 かたみに、手をとりにて、
遊びし友人、今いずこ、
さびしき ふるさとや、
さびしき わが家や。

課 外



ランダンの
シュエ・ダゴン・パゴダ

興味ある二つの話と、文法の話が載せてあります。むずかしい漢字は出ていませんから、すらすらと、おもしろく読んで、読書力を養なってください。

日本語がじょうずになるには、多く読むことが、何より大切です。

ハンス・シュターデン

ハンス・シュターデンは、ドイツのヘス州、ホンベルグという小さな町に生まれた。彼は少年のころ、海の向こうの知らない国々に旅行してみたいと思っていた。

そのころ、ヨーロッパとインドとの間に交通が開けて、インドの珍しい話や、見たこともない物が、ヨーロッパに伝わってきた。それを見るにつけ、聞くにつけ、ハンスは、

なんとかかして、インドへ行ってみたいと思うようになった。

当時インドへ行く船は、ポルトガルのリスボンから出ている。ハンスは、リスボンで、インドへ行く船をさがした。

ところが、あいにく、インド行きの船はなくブラジルへ行く船のあることがわかった。ハンスは、ブラジルの話をきくと、すぐブラジルへ行く気になった。



(132 . jpg 挿絵あり。上段下段あり)

そこで、彼はペンテアド隊長のひきいる船隊の一そうに砲手として乗り組んだ。船隊は、航海中フランス船隊と戦ったり、大暴風雨にあつたりしたが、無事にブラジルについた。ブラジルでは、ポルトガルの植民者と土人との戦いが方々で行なわれていた。ハンスは、珍しい動物や植物を見る事ができた。また土人との戦闘にも参加して、ぼうれん心を満たした。

ハンスたちの船隊は、ふたたび大西洋の荒波と戦い、リスボンに帰った。ハンスは、リスボンでしばらく旅の疲れを休めていたが、また探険の旅に出たくなってきた。

——ポルトガル人が発見したブラジルは見てきた。よし、こんどは、スペインの新しい領土を見てやろう。きつとすばらしい事があるに違いない。——

こう考えて、機会のくるのを待っていた。一五四九年ハンスは、スペインの船隊に乗り組んでふたたび、南米へ航海した。こんどの航海も最初の時にまさるともおとらないほど苦しいものであったが、それでも、ハンスの船はやつとサンタ・カタリナ港にたどり着いた。リオ・ダ・ブラックに行く船は、必ずここに立ち寄って、水や食料を積み込むことになっている。

ハンスの船も、ここで食糧を積み込み、途中ではぐれた船を待った。そのうちの二そうはやってきたが、もう一そうはいつまでも姿を現わさなかった。大あらしで、船がこわれ、みんな死んでしまったか、それとも引き返してしまったのではないかと思われたので、二せきは、リオ・ダ・プラッタに向かい出発することにした。

ところが、いよいよ出発というとき、一せきの船は、原因不明のばくはつですつかりこわれてしまった。乗組員をみんな一そうに乗せることはできないので、隊員を二つに分け、一隊は船で、別の二隊は陸路を行くことにし

た。陸路の一隊は、土人の案内人をやとい、パラグワイのアスンシオンにむかい三百マイルの未開地を横切つていった。風雨にさらされ、獣や土人と戦いながら、みつ林の中をふみ分けて進んだ。

なんんかかの隊員は、苦しい旅の途中でたおれた。

なんか月かの後、やつとアスンシオンに着いた者も、ほとんど病気で死んでしまった。一方、海路の一隊は、まず、ポルトガルの植民地があるサン・ビセンテへ行きそこで、これからの長い航海に耐えるよい船を手に入れ、リオ・ダ・プラッタへ向かうことにした。

ハンスは、この海路の一隊に加わっていた。

船がちょうど、イタニヤエンのおきにさしかかったとき、急に大あらしが起こった。船は木の葉のように波にもまれ、そして、あつという間に、岸の岩に打ち当たり、こつぱみじんにくだけてしまった。ハンスたちは、命からがら陸にはい上がり、やつと助かることができた。イタニヤエンより陸伝いに、サン・ビセンテに行くつ

(新ポル語 Penteadó / Paraguai / Asuncão)

(133.jpg 上段下段あり)

た一行は、ここで新しい船を手に入れることができた。なん日かの後、スペイン人たちは、新しい船に乗って、リオ・

ダ・プラッタに向かつて、出発した。しかし、ハンスだけは、ここでスペイン人たちと別れ、しばらくサン・ビセンテにとどまることにした。

サン・ビセンテのあたりにいる土人はツピニキンという種族で、彼らには、南にカリジョー族、北にツピナンバー族という敵があつた。土人たちは、互いに攻めたり、攻められたりして、しきりに戦いをくりかえしていた。ポルトガル人の植民者たちは、ツピニキン族の味方で、しばしばカリジョー族や、ツピナンバー族と戦っていた。北のツピナンバー族は、非常に戦争の好きな大食い種族で、ポルトガル人をにくみ、たびたび攻め入つて、植民地を荒らしていた。

サン・ビセンテより、五マイルほど離れた地に、ベルチオガという所がある。ここは、サン・ビセンテを攻めるのに都合のよい所で、ツピナンバー族は、いつもこのベルチオガから攻め込んでくるのだつた。そこで、ポルトガル人たちは、ベルチオガにようさいを築き、大砲をすえて、サン・ビセンテを守ることにした。ポルトガル人たちは、大砲をすえつけたが、砲手がなくて困っていた。

ハンスが、サン・ビセンテにきたのは、ちょうど、そうしたときであつた。ポルトガル人たちは、スペイン人たちから、ハンスが船の砲手だつたことを聞いたので、ようさいを守ってくれるよう、しきりに頼んだ。

ハンスは、植民者たちが困り切っているのを見て、四か月だけ、という約そくでようさいを守ることを引き受けた。

ハンスは三人の部下とようさいに住み、昼も夜も嚴重に見張って、攻めてくるツピナンバー族を大砲で打ちはらった。植民者たちは、ハンスの働きに感謝して、さらに、あと二年このようさいにとどまってくれようにと、頼み込んだ。ハンスも、どこに行くという当てもないので、ここにとどまることにした。

しばらく、何事もなく過ぎたが、ある日、部下の土人が、近くの小島に狩りに行ったまま、次の日になっても帰って来なかった。ハンスは部下を探がしに、島に渡っていった。森の中で部下と出会い、帰りを急いでいた。すると、突然、歓声がわきあがり、手に手に弓矢を持ったツピナンバー族が現われた。

これまで、なん度も狩りに来た島なので、まさか敵がいようとは、夢にも思わなかった。それで、ハンスは小刀さえ持っていないかった。

「しまった。」

と思ったが、逃げるよりほかはなかった。ふたりは、すばやくその場から逃げだしたが、五、六歩も行かないうちに、ひゅつと飛んできた矢が、ハンスの足に突きささった。ハンスがたおれると、土人たちは、どつと押し寄せ、

ハンスを捕えてたちまち着物を引きはがし、かずらでぐるぐるとしぼりあげてしまった。

土人たちは、ハンスをかついで、海岸に走り出た。そこには、しゅう長を中にして、大ぜいの土人がうずくまっていた。しゅう長の前に引きすえられたハンスを見て、土人たちは口々に言った。

「われわれの敵だ。すぐ打ち殺せ。」

(新ポル語 Sa o Vicente / tupiniquim / cari / jo / tupinamba)

(134 . jpg 上段下段あり)

「自分らのかたきだ。やっつけろ。」

ハンスは、

「ああ、もうだめだ。」

と、じっと目をつぶった。すると、さつきからハンスを見ていたしゅう長が言った。

「この男のかみの毛は金色だ。目だまは青いぞ。珍しいやつだ。連れて帰って女たちにも見せてやれ。」

土人たちは、ハンスをカノアに投げこみ、自分たちの部落ウバツバへ急いだ。マンジオカ畑で働いていた女たちは、次々と帰ってくるカノアを浜べに出迎えた。

「珍しいやつをつかまえてきたぞ。」

「今夜、この男をみんなにごちそうするぞ。」

男たちは、ハンスをどさりと砂浜にほうり出した。ハンスは、見るもあわれな姿だった。手足はしぼられ、からだはきずだらけになっていた。女たちは、男たちの手がらをほめ、寄つてたかつてハンスをけつたり、たたいたりして、さんざんののしつた。

それから女たちは、ハンスを広場に運び、彼の両ひざにすずを結びつけた。そして、自分たちのうたう歌に合わせ、て足ぶみをしながら、すずを鳴らすことを命じた。女たちは、ハンスを囲んで歌いながら、踊り始めた。ハンスは立ちあがつて、足ぶみをした。ハンスがうめきながら鳴らすすずの音に合わせて、踊りはいよいよはずんでいった。

踊りが終わつて、小屋の中に投げ入れられたときは、目もあけられないほどへとへとに疲れていた。土間に横たわつたまま、ハンスは自分の身の上のことを考えて、いよいよ最後のせまつたことをさとつた。あの踊りは、土人がえものを殺すときに行なう儀式である。

気を失っていたハンスは、ふと気がついた。

あたりは、もうまっ暗で、入り口に立っている番人の目だけが光っていた。

「目がさめたな。やっぱり神様は、うそをおっしやらなかつた。」

「神様が、なんとおっしやったんだ。」

「おれたちがベルチオガに出かける前、神様にどんな、えものがあるか、お聞きしたんだ。すると神様は、ポルトガル人のえものがあるとおっしやったんだ。」

「おれは、ポルトガル人じゃない。ドイツ人だ。おまえたちとなかのよいフランス人の親類だ。」

「うそを言うな。フランス人の親類が、ポルトガル人の中にいるはずがない。」

「いや、本当だ。おれは間違いなくドイツ人だ。フランス人の親類だ。」

ハンスは、なぜ自分がポルトガル人の中にいたか、これまでの事情を説明し、自分が殺される理由のないことを強く主張した。そこで番人はひとりの若者を連れてきて、ハンスの顔を見せた。

この若者は、数か月前、ツピニキンに捕えられ、ポルトガル人のどれいとなって、サン・ビセンテにいたが、最近逃げ帰った者であった。

彼は、ハンスの顔を見知っていたので、リオ・ダ・プラッタに行くスペイン人たちといっしよに来た者であることを証明してくれた。

しかし、スペイン人はポルトガル人の味方なので、ハンスが、いくらフランス人の親類だと

(新ポル語 c a n o a / m a n d i o c a / U b a t u
b a)

(135 . j p g 挿絵あり、上段下段あり)

いっても、信用しなかった。だが、この若者のことばによつて、土人たちは、ハンスを今夜殺すことを見合わせ、この部落にときどき来るピメンタ買いのフランス人に、一度合わせてみることにした。

それを知つて、ハンスはほつとした。フランス人が、「この男は、ポルトガル人ではない。」と言つてくれれば、助かるかもしれない。かすかながら、ハンスの胸に希望の光が差し込んだ。



土人のしゅう長に囲まれてハンス(中央)が日に祈っているところ

なん日か過ぎて、ハンスがかなり元気を取りもどしたある日、ピメンタ買いのフランス人がやってきた。ハンスは、さつそく彼の前に引き出された。フランス人は、土人のきげんをとろうとして、
「この男は、ポルトガル人だ。」

と言った。そこで、土人たちは、今夜にでも、ハンスを殺そうと、相談を始めた。ハンスは、がっかりしてしまった。いよいよ、最後の日がやって来たと覚悟して、神に祈りをささげた。

ところが、その夜、この部落に大騒動が起こった。

「敵が来たぞ。ツピニキンだ。」

男も女も、みんな小屋から飛び出し、戦いの準備でござったがえしていた。

ハンスは、「しめた。」と思った。そして、彼らに向かって、言った。

「おれがポルトガル人でないことを見せてやろう。弓矢を貸してくれ。おれもいっしょに戦おう。」

ハンスは先頭に立って、ツピニキンに向かって行った。ハンスは、このどさくさにまざれて、すばやくツピニキン族の方へ逃げこむつもりであった。ところが、ツキナンバー族は意外に早く守りを固めたので、ツピニキンは攻めるのをやめて、引きあげてしまった。ハンスの目的は達せられず、助かる機会は遠くに去ってしまった。

次の日、いよいよハンスの恐れていた事がやってきた。ウバツバのしゅう長、ニヤエ。ペポーは、ツピニキン族と戦うため、方々の部落から集まっていた同族のしゅう長たちのごちそうに今夜、ハンスを殺すことに決めた。

夜になった。広場には、あかあかとたき火がたかれ、そ

の回りにしゅう長たちが集まっていた。ハンスは小屋から出され、たき火のそばに引きすえられた。どれいのカリジョーたちは、ハンスを殺す用意をしていた。

ハンスは手を合わせて、静かに空を仰ぎ、神に祈りをささげた。空には、清くすんだ月が、美しく輝いていた。ハンスは、

「神様、どうか、あわれなハンスをお助けください。」と、祈りに祈った。

(新ポル語 p i m e n t a)

(136 . j p g 上段下段あり)

ハンスの様子を見ていたひとりのしゅう長が言った。

「なぜ、そのように月を見ているのか。」

「お月様がおこっているのだ。お月様は、おれの神様なのだ。」

「だれに向かっておこっているのだ。」

ハンスは、「自分を殺すことに決めたニヤエペーしゅう長に向かっておこっているのだ。」と言いたかったが、そう言おうと、あぶないのでやめた。

「おれを殺す用意をしているカリジョーたちに向かっておこっているのだ。おれを殺そうとする者には、お月様がばちを当てるんだ。」

ハンスは、重々しい口調で、お月様のいかりがどんなに恐

ろしいものかということ述べた。迷信深いしゅう長たちは、顔を見合わせていたが、そのばつを恐れ、ハンスを殺すことを中止した。

その翌朝、同族の住むマンブカバ部落から使いのものがきた。それによると、昨夜、このウバツバをおそったツピニキン族が、昨夜、マンブカバをおそい、部落は大騒ぎだったというのである。

マンブカバ部落に親類がいるニヤエペポーしゅう長は、それを聞くと、じつとしてはいられなかった。家族や部下を連れて、すぐにマンブカバに出かけていった。

なん日か過ぎたある日の午後、しゅう長の家の方で、騒がしい声が聞こえた。ハンスはしゅう長が帰って来たかには、いよいよ自分の命はないと思った。ところが、帰ってきたのはしゅう長ではなく、弟のアルキンダであった。彼の話によると、しゅう長とその家族は、マンブカバで病気になり、苦しんでいるとのことであった。

アルキンダは、ハンスの所へきて言った。

「しゅう長は、自分たちが病気になったのは、おまえのせいだと言っている。おまえは、自分の神様の月に、みんなを病気にするよう頼んだろう。」

ハンスは、しゅう長が、お月様のばつを恐れていることを知って、急にまじめな顔をして言った。

「おれは、そんな事はしない。だが、お月様は確かにしゅ

う長に対して腹をたてているだろう。」

「なぜ、お月様がおこったのだ。」

「おれが、いくらポルトガル人ではないと言っても信用しないからだ。しゅう長が、それを信じるならば、病気をなおしてくださるようお月様に頼んでやる。」

「ほんとだな。よし、しゅう長にそう言おう。」

アルキンダは大急ぎでマンブカバに引き返していった。ハンスは、その夜初めてゆっくり眠ることができた。

数日後、ニヤエ・ポーしゅう長は、病み衰えた家族を連れて帰って来た。そして、ハンスを呼び寄せ、祈ってくれるようにといった。ハンスは、ひとりひとりの頭の上に手を置いて祈ってやった。しかし、なんのきき目もなく、しゅう長の母親と子どもたちは次々と死んでいった。

「なぜ、おまえの神様は祈りを聞いてくれないのか。」

「死んだ者たちは、みんな、おれを食おうと考

(137 . jpg 挿絵あり、上段下段あり)

えた者だ。おれを食おうとする者は、みんな病気で死ぬんだ。」

「そうか。わしの病気をなおしてくれ。わしは 決しておまえを食わない。おまえの神様に頼んでくれ。」

「もう、人を食うことをやめるなら、おれの神様に頼んでやる。」

「もう食わない。決して人を食わないから、是非頼んでく

れ。」

ハンスは、ニヤエペポーしゅう長のため、心をこめて祈つてやった。すると、ふしぎにも、その日から病気は軽くなり、やがてなおつてしまった。しゅう長は大喜びで、部落の者たちにも、人を食わないことをちかわせた。そして、それから、ハンスをいじめる者がなくなった。

ところが、月日が過ぎていくと、土人たちは攻めたり、攻められたりして、捕えた敵をまた食うようになった。

ハンスが、人を食うことが、どれほど悪いことかということを見せても、彼らは、全然聞こうとしなかった。こんな土人たちであるから、前にちかったことも忘れ、いつ自分を殺そうとするかわからないと思って、ハンスは、できるだけ、彼らの心をしげきしないように気をつけた。

ハンスが、ツピナンバー族に捕えられてから五か月が過ぎた。今では見張りの番人もつかなくなり、みんなといつしよに、狩りに行ったり畑の仕事を手伝ったりしていた。こうしてハンスは逃げ出す機会の来るのを待っていた。

すっかり、土人になれ親しんだハンスは、その後、ウバツバから、イタカケセツバに移された。イタカケセツバのアバチー・ポサンガしゅう長はハンスを自分のむすこのようにかわいがった。

ある日、ハンスは、リオ・デ・ジャネイロにフランス船

が来たという話をきいた。ハンスはかすかな希望をもつて、救い出しにきてくれるのを待っていた。すると、二人のフランス船員がみやげものを持ってハンスをたずねてきた。

彼等は船長の命令で、ハンスを救いに来たのであった。しかし、どのようにして連れ出すかが問題であった。船員たちは、ハンスと相談して、船員のペローをハンスの兄弟ということにして、土人をあざむくことにした。

ペローは、アバチーしゅう長に言った。

「もうひとりの兄弟が船に残っているので、是非ハンスを会わせてやりたい。ハンスを船に連れていくことを許してください。」

「ハンス一人だけをやることはできない。」

「それは、分かっています。あなたや、あなたの部下も、みんないっしょにきてください」

(新ポル語 Abatī-pocanga)

(138.jpg)

い。」

「それならいいだろう。しかし、ハンスは、すぐここに連れて帰るぞ。」

「いいですとも。来年また、船にいっぱいみやげものを持って、ハンスに会いにきます。」

こうして、ハンスは、しゅう長や部下の土人たちにつきそわれ、フランス船へ行くことができた。船では、土人たちをたいそうもてなし、特にアバチーしゅう長をハンスと共に船に泊まらせ、ごきげんをとった。

しかし、しゅう長もなかなか油断をしなかった。ハンスから少しも目を放さなかった。

「もう兄弟とも十分話し合っただろう。そろそろ部落へ帰ろうではないか。」

しゅう長は、しきりに帰るようにながした。

いよいよ船の積み荷も終わって、しゅっぱんの日になった。船長と船員たちは、しゅう長とハンスの所へやってきた。船長は、しゅう長に向かって言った。

「それでは、これでお別れです。ハンスは、あなたの所へ残していきますから、よろしくお願いします。」

「来年は、船いっぱいのみやげものを頼むぞ。」

そのとき、ハンスの兄弟ということになっている二人の船員が言った。

「船長、国に年とった父がいるのです。父は、もういつ死ぬかわかりません。ハンスを連れて帰ることを、しゅう長に頼んでください。」

「船長、是非お願いします。一目だけ、父に会わせてやってください。来年、きつとハンスをしゅう長にかえますから。」

二人が、口をそろえて言うのを聞くと、ハンスはおこつたように言った。

「おい、あまり勝手なことを言うなよ。おれはおまえたちがなんといつても、約束どおり、しゅう長といっしょに帰るんだ。」

「だけどハンス。父にもしものことがあつたら、もうこの世では会えないんだぞ。おまえも、しゅう長にお願いしろよ。」

「いや、おれは行かない。おれがこうして生きていられるのは、アバチーしゅう長のおかげなんだ。おれは、その恩返しをしないうちは決してどこへも行かない。」

ハンスは、こう言い切ると、悲しそうな顔をしてうつむいた。するとアバチーしゅう長がいった。

「ハンス、それでは、おまえのおとうさんがかわいそうだ。国に帰っておとうさんに会って来い。」

船長はうなずきながら、みんなのことばを聞いていた。

「ハンス、お前の気持ちはよくわかる。しかし、しゅう長も、せつかく、あんなに言ってくれているんだ。おとうさんに一目会って、来年またここに帰って来たらいいじゃないか。ご恩返しはそれからだつてできるんだ。」

「船長までがそう言われると、どうしていいかわからない。」

「ハンス、行ってこい。わしは、来年おまえが帰るのを待つ

ているぞ。」

こうして、ハンスは、船に残ることになった。

しゅう長は、いろいろなみやげものをもらい部下を連れてイタカケセツバに帰っていった。

ハンスは、長い長いとらわれの身から解放さ

(139 . jpg 挿絵あり。上段下段あり)

れ、故国へ帰ることができた。それは一五五四年一〇月のことで、ハンスが二度目の南米大陸の旅に出発してから五年目であった。

「ああ、これでやっと自由の身になった。しゅう長よ、土人たちよ、さようなら。」

苦しかったこれまでの生活をつくづくと回想して、ハンスは、身の無事を神に感謝した。

「ハンス・シュターデン」は、約四百年前ブラジルを探検したドイツ人ハンス・シュターデンの書いたブラジル探検記の中の一部です。

この探検記は、史上、最も早くブラジルをヨーロッパに紹介した書物として有名です。

この書物は、英語、仏語、日本語その外、十数か国の国語に訳され、その種類も六十二種類に及んでいて、各個人により、広く読まれています。本文の中の、さし絵は、四百年前に出版された原書のを、そのまま用いてあります。

二 歌 う 部 隊

竹山 道雄（たけやまみちお）

われわれは、山から山、それから谷、それから森と歩きました。よく、むかしの本には、落人（おちうど）は風の音にも きもをひやす、などと書いてありますが、わたしたちもそんなでした。

行く先々の村落に落謀（らくちよう）といって、イギリス軍の飛行機から人が落下さんでおりて、いろいろな妨害工作をします。あるいは、村と村とがいつのまにか連絡をしていて、どこに行っても食糧（りよう）がありません。そうかと思うと、せっかく村にはいつて泊まっていると、村人がしらせたために、敵兵がわれわれを襲（しゅう）撃してきます。

こんな有様で、幾月も心休まる日はありませんでした。しかし、原住民の中で、日本兵に好意を示してくれる種族もあるのです、それをたよりに、山また山を一つずつ越えてゆきました。

そのうち、ある日、われわれは、あるがけの上の村にはいりました。

「さあ、ここまで来れば、もう安心です。」と、このときは

ビルマ人の案内人をつれていたのですが、この人がいい
ました。背が高く、頭をすっきり青くそりあげた人です。
た。彼は額の汗を



村からは村長はじめ多くの人が出迎えてくれた

(140 . j p g 挿絵あり、上段下段あり)
ふきました。

「ごらん下さい。あの峠(とうげ)を越えればいいのです。
そうすればもうシヤムです。」

この村は、高いがけの上にあるので、足下にひろがる一面
の見はらしはじつに立派でした。立っていると、身がひき
しまるようなつめたい山のおいがふいてきました。

指さされた方を見ると、向かいの山脈の一か所に日が
あたって、厚い森の上に、青いもやのようなものがゆらい
でいます。あそこの向こう側に行けば、もう、日本軍のい
るところなのです。

「この村の近くには、イギリス軍も、インド兵も、グルカ兵もいません。今晚はゆっくりお休みになれます。」と案内人はいいました。

たしかに、ここは心配がなさそうでした。他の村とは、よほど離れています。この村の前は削（けず）りたてたようながけです。そこからのぞきこむと、はるかにふかい谷の底に急流が白いあわをかんでいます。村のうしろも、大きながけです。その上に、わしがぐるぐると輪をかいて飛んでいます。村の中央に広場があつてその左右は森ですが、それも熱帯らしい、ふかい、暗い、底がしれないような森で、われわれ五十人ほどの日本兵がここにはいつてきたことは、容易にしれるはずはありません。

隊長は、ここで、三日ほど十分に休養して、これから先の準備をすると、いいました。

村からは、村長はじめ大ぜいの人が出てきて、迎えてくれました。われわれは広場に立っている大きな草ぶきの家をあたえられました。ごちそうもできました。酒までできました。兵隊たちは、大いによろこびました。

村人たちはしきりにもてなしてくれました。それで、思ひもかけぬ 宴（えん）会になって、いつのまにか一種の演芸会のようなものがはじまってしまいました。

若い村人が、十人ほど並んで、ここの民謡（よう）をきかしてくれました。みな髪がちぢれて、目が青白くみえる

ほど、ぱっちりとすんでいます。

しかし、膚（はだ）は、この高い山地に住んでいるせいか、それほど黒くありません。かえってわれわれ日本兵の方が黒いくらいです。みな上半身ははだかで、はでな色のルーンジをしてはだしでいます。うたう歌は騒がしくきこえながら、よく聞くと、かなしげなものです。切れ目なくつづいて、もうしまいになるかと思うと、また勢いづいて長く尾をひきます。単調な、ものうい熱帯の哀（あい）調です。

村人の歌がすむと、今度は、わたしたちが合

（141.jpg 挿絵あり 上段下段あり）

唱しました。なんといっても、長いあいだ練習をして、歌で評判の「うたう部隊」です。いろいろな曲をうたいましたが、ことに「荒城の月」が非常なかつさいでした。まったく、この曲は名作です。どこに行っても、どんな無教育な土民からも、すぐに好かれたのは、ふしぎなくらいでした。

歌の声にひかれて、この村の人が大勢あつまってきた。この国の人々はお祭りが好きです。何かというと、すぐにだしをひきだして、うたって踊ります。この山の中の村人たちは、わが隊がはいつてきてから、まるでお祭り気分でした。みなにこにこ笑って、あらそってわれわれをもてなす工夫をしてくれました。われわれの歌は、そのお

唱しました。なんといっても、長いあいだ練習をして、歌で評判の「うたう部隊」です。いろいろな曲をうたいましたが、ことに「荒城の月」が非常なかつさいでした。まったく、この曲は名作です。どこに行っても、どんな無教育な士民からも、すぐに好かれたのは、ふしぎなくらいでした。

歌の声にひかれて、この村の人が大勢あつまってきました。この国の人々はお祭りが好きです。何かというと、すぐにだしをひきだして、うたって踊ります。この山の中の村人たちは、わが隊はいつてきてから、まるでお祭り気分でした。みなにこにこ笑って、あらそってわれわれをもてなす工夫をしてくれました。われわれの歌は、そのお礼のつもりでした。

村人たちは、われわれの歌を、まるで儀式の

ときのようにまじめにきいていました。老人がしきいにすわっています。子どもたちが窓に腕をかさねて、その上にあごをのせて、のぞいています。家の前の広場のやしの木の下にも、赤ん坊をおぶった女がしゃがんでいます。いずれも、この国の人々のくせで、やせた手足をふかく折りまげて、じっと動かずにすわっているのです。

人々が、ことに感心したのは、水島上等兵の堅琴でした。彼は腰かけて、両ひざのあいだに楽器をすえて、いつものように精魂こめてひきました。そうして、堅琴に飾ったらの花と赤い羽毛をゆすって、両手ではげしくかき鳴らしました。

すると、きき手の中から、一人の少女が、はねるような軽い足どりで出てきました。年は十

がらしてあります。頭の上に小さな塔をのせているようです。

少女は、へやのまん中に立って、満場を見まわしてから、踊りの姿勢をとりました。首をか上げ、左手はすつと前にのばして指をそろえて、立て、右手は胸にひきつけて、てのひらを外に向けて、親指と人差指で輪をつくりました。そうして、すくにも動きだしそんな様子で、大きな黒いぶどうの粒のようなひとみをうごかして、しきりに、堅琴をひいてくれ、と催促をするのです。

水島は、堅琴をかきたてました。曲は「春らんまん」をマーチ風に変えたものです。

少女は踊りはじめました。首を横にむけ、足をたがいちがいにさせて、ひじでも手首でも、ありとあらゆる関節で直角を作って、それをま



一人の少女が出て踊った

二、三歳で、胸と腰を布できりきりとしばって、腰には真みたいに見えるそり返った飾りをつけています。しなやかな手足が、つやつやと光っています。

髪は丸くゆって、上に行くほど細くと

札のつもりでした。

村人たちは、われわれの歌を、まるで儀式のときのようにまじめにきいていました。老人がしきいにすわっています。子どもたちが窓に腕をかさねて、その上にあごをのせて、のぞいています。家の前の広場のやしの木の下に

も、赤ん坊をおぶった女がしゃがんでいます。いずれも、この国の人々のくせで、やせた手足をふかく折りまげて、じつと動かずにすわっているのです。

人々が、ことに感心したのは、水島上等兵の豎琴（たてごと）でした。彼は腰かけて、両ひざのあいだに楽器をすえて、いつものように精魂（こん）こめてひきました。そうして、豎琴に飾ったらんの花と赤い羽毛をゆすって、両手ではげしくかき鳴らしました。

すると、きき手の中から、一人の少女が、はねるような軽い足どりで出てきました。年は十二、三歳で、胸と腰を布できりきりとしぼって、腰には翼みたいに見えるそり返った飾りをつけています。しなやかな手足が、つやつやと光っています。

髪の毛は、丸くゆって、上に行くほど細くとがらしてあります。頭の上に小さな塔をのせているようです。

少女は、へやのまん中に立って、満場を見まわしてから、踊りの姿勢をとりました。首をかしげ、左手はすつと前にのばして指をそろえて立て、右手は胸にひきつけて、てのひらを外に向けて、親指と人差指で輪をつくりました。そうして、すぐにも動きだしそうな様子で、大きな黒いぶどうの粒のようなひとみをうごかしてしきりに、豎琴をひいてくれ、と催促をします。

水島は、豎琴をかきたてました。曲は「春らんまん」を

マーチ風に変えたものです。

少女は踊りはじめました。首を横にむけ、足をたがいちがいにさせて、ひじでも手首でも、ありとあらゆる関節で直角を作つて、それをまた別の直角に折りかえしながら、ゆつくりと踊りました。

ほそい手足は、ちよつとへびのように動きます。てのひらがひらひらとひるがえつて、あちこちに見えます。そして、足はゆるやかにさまざまなわをえがきます。まったく、かわいらしい、めずらしい、そして忘れられない踊りでした。

若者たちは口々にほめことばをあびせながら、花を投げました。

この踊りと豎琴は、いくども、くりかえしを求められました。とうとうこれがしまうと、水島は、村民たちの驚嘆の声におくられて、へやのすみに行つて、そこに腰をおろして、ひざをかかえこみました。

それから、また、われわれの合唱になりました。

「秋の月」や「からたちの花」や「野ばら」などはいずれもわたしたちが、子どものときから口ずさんでいる、いい節の歌です。わたしたちはうたっているうちに、われを忘れました。これらの歌にはみな、だれにとつてもそれぞれの思い出がまつわっているものです。「ああ、あのときにはこうだった。おかあさんが、きょうだい、あんな顔

をしていた。こんなことを言っていた。」と目に見えてくるのです。それを、こうした思いもかけぬ異境の山の中で、しかも追われてあすの命も分からずに逃げているという、思いもかけぬ境ぐうでうたうのです。

たれもかれも、胸の中の言いがたい思いをこめて、うたいつづけました。

そのうちにふと気がつきました。これはどうしたことでしょう。いつのまにか、あたりには、ビルマ人が一人もいなくなっていました。

あの少女も、若者たちもいません。さつきまでしきりに料理の世話をやいていた村長もいません。今夜の泊まりの準備をひきうけていた案内人もいません。あたりは食器やいすが散乱したままで、われわれだけがこの家の中でうたっていたのです。

戸外を見ても、窓の下にも、広場にも、人影はありません。みな知らないうちにすーっと消えてしまったのです。さては、とわれわれははっとしました。そうして、「うたをやめろ！」とどなりました。

ビルマの村にはいつて歓待されているうちに村人が、いなくなってしまう。すると、どこからか敵兵があらわれ、日本兵を襲撃する。こうしたことは、よくあることなのです。村人が通報するのです。いま、われわれもこういう目に会いかけているらしいのです。

すぐに戦鬪の用意にかからなくてはなりません。その態勢に人員を配置しなくてはなりません。大切なものを安全なところへ入れて、掩護（えんご）物（ぶつ）の陰（かげ）にかくれて、地に穴をほらなくてはなりません。それで、ある者は武器をとりに行こうとし、ある者は家の外にとび出ようと思いました。

すると、隊長は「動いてはいかん！」といいました。そして、低い声で、しっかりと、

「うたをつづけろ！」と命令しました。

それから、息を殺して、ささやくように早口にいいました。

「いま、われわれが気づいたことを、相手にさとられてはならぬ。われわれはのんきに歌い続けていなくてはならぬ。そうして、その間に用意をするのだ。まだビルマ人がいなくなったばかりだから、敵はすぐにはやっこないだろう。われわれが気がついたことを相手がさとつたら、相手はかえって早く攻めてくる。」

隊長は、こういうのです。

なるほど、と、みんなは思いました。そうして、また、合唱をつづけました。

こうしている間にも、数人の者が外から見られても分からないように、床の上をはって、武器のある所へ行って、それをとってきてそれぞれの持主に渡しました。渡さ

れた者はできるだけゆっくり歌いながら皮ひをしめ、ゲートルをまき、銃や弾を身につけました。

うたいながら、柱の陰から双眼鏡でうかがうと、もう広場のむこうの森の中に、たしかに、グルカ兵らしい姿が見えます。インド兵のターバンも見えます。かれらは、散兵線をつくるために、木のあいだに散開しているのです。われわれは、「ああ玉杯」をうたいながら、興奮して身ぶるいしました。そうして、あの荘（そう）重な悲壮な曲を、これが一期（いちご）の思い出だと思つてうたいました。そのあいだにも、隊長はせわしくささやくように命令をあたえて、われわれを十人くらいずつに分けて、方方に配置しました。

そうした指図をしながら、隊長は、歌のきれめになると命じました。

「手をたたけ！ 笑え！」

われわれは、手をたたいて、どっと笑い声をあげました。これは、なかなか苦しいことでした。何しろ、森の中には機関銃がこちらをむいていて、いつ火をふいてくるかわからないのですから。

そのうちに、ようやく大ていの準備はできました。

ただ一つ残った大仕事がありました。それは爆薬を入れた箱が車につんで、広場においてあるのですが、それをもっと手近な安全なところに運んでこなくてはならない

のです。

その方法は、どうしたらよからうか——、みなは歌をうたいながら考えました。あの箱に一つでも敵の弾丸があったら、もうおしまいです。車につんだ爆薬が、全部炸（さく）裂してしまいます。われわれはこういうときの智恵にすぐれている水島上等兵の方を見ました。彼もうたったり、笑ったり、豎琴をひいたりしながら、一生懸命に考えていましたが、やがて考えついたとみえて、隊長と相談をしました。

隊長と水島とで、手はずをきめたので、われわれは列をつくって陽気な歌をうたいながら、家の外へくり出しました。水島が肩からつるした豎琴をひきながら先頭にたっています。次の者は、さつき若者たちが投げた花を花束にしてかかえています。そうして一同は、笑い興じて、ある者はビルマの踊りのまねをしてふざけて騒ぎながら、水島を車の上にかつぎあげました。

水島は爆薬の箱の上につつ立って、立てた片ひざの上に豎琴をおいて、にぎやかにかなでました。われわれは事をかこんで、手に手に花をふりながら、合唱をはじめました。

こちらの計画は、こういう風にして、お祭りのだしでもひいているようなかつこうに見せて爆薬の事を引きこんでしまおう、というのです。



爆薬を積んだ車を引きこむ

(144 . j p g 挿絵あり 上段下段あり)

こうして、車を引きだしてからは、なるべくゆっくりとした息のつづく曲をえらびました。このときにうたったのは、「庭の千草」と「はにゆうの宿」でした。

森の中の様子をうかがうと、もう散開を終わったとみえて、動く人影も見えません。しんとして静まり返っています。

われわれは、みなことばどおり、必死になってうたいました。今にも森の中から火ぶたがきられるかと気づかいました。そして、はやく、しかも遠目には何か冗談でもしているようにして、重い車を押さなくてはなりませんでした。

もしここで森の中から弾が飛んできて、この箱にあたったら、上にのっている水島はもとより、われわれはみな死ぬのです。

車はすこしずつ動きだしました。われわれは車を押しながら「はにゆうの宿」をうたいました。息も苦しく、顔をしかめてしかもできるだけ声をきれいにそろえました。車の上では、水島が得意のこの曲の伴奏を、たからかにひきつづけました。

やがて、車はもう四五メートルで目的のところに着くまでになりました。

急にあたりが暗くなりました。熱帯ですから昼と夜の境がはっきりして、日が落ちるとたちまちにまっくらになるのです。これはこちらにとってはこの上なく有利なことでした。もうほかの準備もすっかりできました。あちらこちらの暗い物陰に、三人五人ずつうずくまって、銃の引金に指をかけています。隊長も指揮刀に手をかけて、突撃の命令を下す瞬間を待って、敵の方をじつとにらんでいます。

車を首尾よく引きこんだときには、「はにゆうの宿」の合唱がちょうど終わったときでした。

隊長は指揮刀をすらりと抜きました。車を引きこんだ者たちも、歌をやめて、銃をとりました。そのしばらくの静寂（じやく）のあいまに、はるかかなたの谷底の水の音がにわかにか高まって、はっきりと聞こえました。

少し前まで、賑かにさえずりかわしていた鳥も、もうすっかり寝静まりました。

隊長は刀をあげました。

兵隊たちは、突貫のウオーツという声をあげかけました。

そのとき……、ふと、隊長はのどまで出かけていた号令の声を止めて、立ちどまりました。

ふしぎなことには、森の中から、一つの歌の声があがったのです。あかるい、高い声で、熱烈な思いをこめた調子で「はにゆうの宿」をうたっているのです。

隊長はもう走りだした一人の兵隊をつかまえました。そうして、両手をひろげて、うしろから飛びだそうとするわれわれを押しとめました



日本兵とイギリス兵との合唱

(145. jpg挿絵あり。上段下段あり)

「まで！」と隊長は大きな声で叫びました。「あの歌をきけ！」

森の中の歌声は、たちまち二つ三つと数を増し、ついに

はあちらからもこちらからもそれに和しました。そしてそれは「はにゆうの宿」の節を英語で「ホーム・ホーム・スウィート・スウィート・ホーム」とうたっているのです。われわれは、顔を見あわせました。これは、どうしたとということだろうか？ 森の中にいるのは、われわれの命をねらうおそろしい敵ではなかったのだろうか？ 村の人々だったのだろうか？ そんならこんな心配をするのではなかった。そう思うと、にわかにはっとしました。そうして武器を下に置きました。

森の端の方では、別の一団の声が「庭の千草」の節をうたっています。しかし、それも「……ザ・ラスト・ローズ・オブ・サマー………」と英語です。

森の中は歌の声で一ぱいになりました。とおくの川のがけの陰からも、合唱がおこりました。われわれもそれに合わせてうたいました。

月が出ていました。涼しげな青い光が、あたりを一面にそめています。樹々のあいだは、ガラスの柱を幾本も立てたようになっています（その中を、森から広場へ、人影がばらばらと走り出てきました）。

よく見ると、それはイギリス兵でした。

かれらは、いくつもの塊（かたまり）になって合唱しています。思いをこめて「スウィート・ホーム」や「ザエフー・スト・ローズ」をうたっているのです。「はにゆうの宿」も

「庭の千草」も、もともとは、イギリスの古い歌の節なのです。ことに「はにゆうの宿」はイギリス人が自慢をすつかれらの家庭の楽しみをうたったもので、すべてのイギリス人は、これをきくと、自分たちが幼かったころのこと、母親のこと、故郷のことを思うのです。それが、こんなビルマの山の中で、危険きわまりないと思っていた敵を包囲していたときに、その敵がしきりにうたっているのをきいたのですから、なんともいえない異様な感動をうけたのです。

こうなるともう敵も味方もありませんでした。戦闘もはじまりませんでした。イギリス兵とわれわれとは、いつのまにか一しよになって合唱しました。両方から兵隊が出ていって手を握りました。ついには、広場の中央に火をたいて、それをかこんで、われらの隊長の指揮で一しよにこれらの曲をうたいました。

一人の背の高いインド兵が、ポケットから家族の写真を出して、うたいながら、たき火の光でながめていました。彼はその写真をわれわれにも見せました。写真には、奥さんと二人の子どもが、やしの木の下で笑ってうつっていました。この人は、カルカッタの商人だということでした。

一人の何国人だかよく分からない兵隊は、われわれにも家族の写真を見せろといいました。

一人の戦友が、日本のおばあさんの写真を出すと、彼はそれをほおにあてて、せつぷんをしました。

一人の血色のいいイギリス兵が「イフ・ア・ボデイ・ミタ・ボデイ：」とうたいました。それと同じ節を、一人の日本兵が「夕空はれて：」とうたいました。すると、そのイギリス兵は日本兵と肩を組んで、あたりを大股（また）に歩きました。

日本兵は「ああ、わがはらから、たれとあそぶ」と声をはりあげました。ここで、またあたらしい合唱が始まりました。水島はさまざまの合の手を入れて、これに伴奏しました。これは、イギリス兵からも非常なかつさいを受けました。彼がたき火の炎に半面をてらされながら、ひいている顔を見ると、ほおには涙がながれていました。それを見て、どこの国の兵隊も涙をながして一しよにうたいました。

この夜、われわれはもう二日前にてい戦になっていたことを知りました。われわれは、武器をすてました。（「ビルマの豎琴（たてごと）」より。）

竹山道雄 独文学者、評論家。明治三十六年大阪府に生まれ、大正十五年東京大学卒業。ドイツ留学後東京大学教授となる。昭和二十六年職を辞し、評論界に活躍。かたわら東大と学習院でドイツ社会史とドイツ文学を講じ今日に至る。「ビルマの豎琴」「古都巡礼」「文学の思想性」その他著書が多い。

三 ことばのきまり（その一）

一 文章・文・文節

文章

小説や講演のように、文字や音声によって話題の筋が展開し、全体で一つのまとまりになったものを「文章」といいます。

文章には手紙の文章や、ふだんの会話のように短いものもあります。文章はみな大小いくつかのまとまり（段落）からなり、それらのまとまりが互いにつながりを持ちながら、全体として一つのまとまりを形づくっているのです。

なお、段落の初めは、行をあらためて書かれたり、しばらく息を休めてから話されたりするのがふつうです。

文

・ぼくは、大きな魚をつりました。

・ぼくは、得意になって、みんなの見ているところで、また魚をつりはじめました。

右のように「。」でくぎられた一続きのものを「文」といいます。

文には、長いのもあれば短いものもあります。

みな表現する人の態度や気持ちを表わした一まとまりのことばで、完結した意味を持っています。文章は、文が続けられてできるのです。

文の終わりには、「。」のほかには、「？」や「！」などのふ号をつけることがあります、これを読むときには、独特のこ とばの調子をつけたり、大きく息を休めたりします。

・「だれが落としたんだろう？」

・「きつと、さっきの人だ！」

・「もっていかなくてもいいよ。またすぐ来るからね。」

文節

・そこへ、学校の先生が 二、三人の生徒を連れては 行ってきました。

右の文を、できるだけくぎってみると、次のようになります。

・「そこへ」「学校の」「先生が」「二、三人の」「生徒を」「連れて」「は」行って」「きました」。

右のように、小さく くざられた一くぎりを「文節」と言います。

二 文の成分

文は、一つまたは二つ以上の文節からできています。言いかえれば、文節と文節は、互いにいろいろな関係をもつて、一つの文を形づくっていると云えます。その場合、文の構成の要素になっている文節や、文節の集まりを「文の成分」と言います。

文の成分には、主語、述語、修しよく語、独立語があります。

主語・述語

花がさく。色が美しい。

わたしは中学生だ。ノートがある。右の文で、「花が」、「色が」、「わたしは」、「ノートが」と「さく」、「美しい」、「中学生だ」、「ある」とは、「何々がどうする。」「何々がどんなだ。」「何々がなんだ。」「何々がある。」という関係をあらわしています。

この「何々が」にあたる文節を主語と云います。「どうする(しない)」「どんなだ(でない)」「何々だ(でない)」「ある(ない)」にあたる文節を述語と云います。

なお主語には「何々が」「何々は」だけでなく「**【風も吹く。】**」「**【きみこそ】**英雄だ。」「**【**ノートだ**】**ある。」と

いうような形もあります。

修しよく語

- ・ 赤い花がたくさんさく。
- ・ この色はたいへん美しい。
- ・ 小学生だったぼくはきょうから中学生だ。
- ・ さがし回ったノートがここにある。

右の「赤い」「この」「小学生だった」「さがし回った」は「花が」「色は」「ぼくは」「ノートが」という主語がどういうものであるかをくわしく述べています。また、「たくさん」「たいへん」「きょうから」「ここには」「さく」「美しい」「中学生だ」「ある」という述語を、どのように、いつ、どこになどと詳しく説明しています。このように、主語や述語の内容を詳しく述べる文節を修しよく語といいます。修しよく語は、次のように他の修しよく語を修しよくする場合があります。

- ・ 【今まで】 【小学生だった】 ぼくは
- ・ 【さんざん】 【さがし回った】 ノートが

独立語

- ・ 【どれどれ】、こっちへお見せ。
- ・ 【やあ】、【みなさん】 たのしそうですね。
- ・ 汽車が来るまで、ずいぶん待たされた。でも、ぼくは

早くきたことを後かいしません。

右の―のある文節は、主語でも述語でも修しよく語でもありません。他の文節とは直接どうというはつきりした関係がなく、やや独立しています。こういう文節を独立語と言います。独立語は、感動の気持ちや、応答、呼びかけ、などをじかに表わしたり、文と文をつないだりします。

と う 置

ふつうの文節の順序では、主語は述語よりも先に、(述語は文のいちばんあと)、修しよく語は、修しよくされる語よりも先にきます。ところが、次のように、その順序がひっくりかえっている例もあります。

・ どこですか、学校は。(学校は どこですか。)
・ かわいがってやろうよ、うちで。(うちで かわいがってやろうよ。)

右の例は、ある部分を強調したり、頭に浮かぶ順にことばを並べたりしたために、述語が主語よりも、また修しよくされる語が修しよく語よりも、先にきているのです。このような、ふつうの順序とは違った並び方をしているものをとう置と言います。とう置は、会話や詩の表現に多く現われます。

省略

文には主語と述語とが備わっているのが、ふつうです。しかし、実際には、次のように、その一方がない場合もあります。

・いつか 止まっていたんだよ。(そのとけいは)

・この とけいが? (止まっていた?)

右の例は、文脈などの助けによって、() の中のことばがなくても、理解できます。このように、文の成分が欠けている場合を省略と言います。しかし、省略することによって意味があいまいになったり、誤解されたりすることのないように注意しなければなりません。省略も、会話や詩の表現などに多く用いられます。

三 単 語

単語

・右手に 大きい 建物が 見えた。

右の四つの文節のうち、「大きい」は、それ以上こまかく分けられません。他の文節はもつとこまかく「右手・に」「建物・が」「見え・た」と分けられます。「右手」は「右手に・右手の・右手が」などともいえるし、「に」は「右手に・建物に・学校に」などとも言えるからです。このように分けた一つ一つのことばを単語と言います。

右の文の「大きい」という文節は、一つの単語でできています。「右手に」は二つの単語でできています。「見えたのです。」という文節であれば「見え・た・の・です」と四つの単語でできていることになります。つまり、文節は、一つまたは二つ以上の単語でできていると言えます。

複合語

単語の中には・二つ以上の単語が合わさって一つの語になっているものがあります。そういう単語を特に、複合語と言います。文法のうえのはたらきは複合語も、一つの単語と同じです。

青空（青い・空、ソラ↓ゾラ）

さかだる（さけ・たる、サケ↓サカ、タル↓ダル）

名高い（名・高い、タカ↓ダカイ）

木の葉（木・の・葉、キ↓コ）

右のように、複合語になった場合、下の語の部分の音にごったり、上の語の音が変わったり、また音が変わらないまでも、アクセント（音の高低強弱の関係）が変わったりします。

複合語の組み立てには、もとの単語と単語との間で、いろいろな関係がなりたっています。

たとえば

「名高い」は「名が高い」（上の語が主語の格）

「青空」は「青い空」（上の語が修しよく語の格）

「親子」は「親と子」（上の語と下の語とは対等の格）

の関係にあります。そのほか、「行き過ぎる・読み始める」「われわれ・人々」のような組み立て方もあります。

接頭語・接尾（び）語

単語の中には、それだけでは単語でないものとうしが合わさって、一つの語となったものがあります。その場合にも、複合語と同じように音がにごったり、変わったり、またアクセントが変わったりすることがあります。

・お【米】【ご】苦勞ま【ま】夜中【とり】あつかう
【こ】ざっぱり【全】校【諸】国【すつ】とばす

・田中【くん】きみ【たち】五【人】六【番目】廿

【さ】苦【しみ】寒【がる】学者【ぶる】春【めく】
あせ【ばむ】

右の—のある部分は、単独に使われることはなく、必ずある単語といっしょになって、一つの語を作り、ある意味をつけくわえたり、調子を強めたり、語の文法上の性質を変えたりします。このうち、単語の上につくものを接頭語下につくものを接尾語といいます。

自立語・付属語

・【右手に】【大きい】【建物が】【見えた】。

単語の中には、右の文でみるように、右手・大きい・建物・見え(る)のように、それだけで文節の作れるものと、「に・が・た」のように、それだけでは文節が作れず、必ずある語の下について、文節を作るものがあります。前者のような単語を、自立語と言い、後者のような単語を付属語と言います。

活用

単語の中には、また「右手・建物・に・か」のように、用い方によって、その語の形が変わらないものと、「大きい・見え(る)た」のように、形が変わるものがあります。

- ・ 大きい (大きくなる・大きかった・大きければ)
- ・ 見え (見えない・見える・見えれば)
- ・ た (：たろう：：たら (ば))

このように形が変わることを活用すると言い、形の変わる単語を、活用のある単語と言います。それに対して、形が変わらない単語は活用のない単語と言います。ですから「右手・建物」は自立語で活用のない語。「大きい・見え(る)」は、自立語で、活用のある語。「に・が」は付属語で活用のない語、「た」は、付属語で活用のある語ということになります。

右のように、単語のもっている文法上の性質によって、

すべての単語を分類することを、品詞分類といいます。また、そのようにして分けられた、それぞれの種類を、品詞といいます。

単語のもつ文法上の性質とは、単独で文節がつけられるかどうか、活用があるかないか、主語になるか、述語になるか、修しよく語になるか、独立語になるか、などのことです。

四 主語になる語

主語

(1) 【来るのが】 おそい。【行くのは】 いやだ。

(2) 【白いのが】 ほしい。【きたないのは】 捨てよう。

(3) 【静かなのが】 うれしい。【はなやかなのは】

きらいだ。

(4) 【ぼくが】 読もう。【学校は】 楽しい。

右の—のある部分は、「が・は」をともなって、主語になっていますが、(1)・(2)・(3)は活用のある語に、助詞のがついたものであるのに対して、(4)は活用もなく、単独です。この【ぼく・学校】のような単語を名詞(体言)といいます。

名詞

名詞は、

(1) の活用がない。
(2) 付属語をともなつて主語や述語や修しよく語になる。
る。

(3) 単特で独立語になる。

1、【海】が見える。【ここ】は山のちよう上だ。【三十】は五の六倍です。(主語になつてゐる例)

2、日本のまわりは【海】だ。ぼくのすまいは【ここ】だ。五の六倍は【三十】です。(述語になつてゐる例)

3、【海】の深さをはかる。【ここ】の部分をけずる。もう【三十】になつた。(修しよく語になる)

4、海、ぼくはこれを愛する。【ここ】、ここがぼくの家だ。【三十】、それは五の六倍です。(独立語になる)

名詞のうち、時・数を表わすものは、単独で修しよく語になることもあります。

5、【昔】あつたことです。

【きのう】行つた。

【三つ】買う。

本を三回読む。

名詞は、さらに次のように分けることがあります。

イ 固有名詞

人名、地名、書名など、同じ種類の他のものと 區別するために、そのものに与えられた名。

リンカーン、ブラジル、富士山、グワラニー。

ロ ふつう名詞

固有名詞に対して、物やことからの名を一般的に表わしたもの

人、土地、書物、文法、会議、主語、ガラス、コップ、動物、植物、

数 詞

数量を表わしたり、数によつて順序を表わしたりするもの。

一、二つ、三人、四列、五番目、第六、第七号、第八番目、九リットル。

ニ 代名詞

右の三つとはだいぶ性質がちがい、話し手の立ち場をもとにして、自分と対象と、どういう関係にあるかということから、その対象をさし示すもの。

わたし、あなた、かれ、どなた、ここ、そちら、あそこ、どっち。

代名詞

・【きみ】、【それ】をとつて くないか。」
・【これ】かい。【これ】はぼくの本だよ。きみのは【あれ】だろう。」

同じ本でも、聞き手の近くにあるときにはそれとさされ、話し手の近くにあるときにはこれとささられています。もし両者から離れた所であれば、あれとさされるでしょう。また話し相手からは、きみとよばれ、自分が話し手となった場合には、ぼくと言います。このように、自分が対象と、どういう関係にあるかという、話し手の認め方によつて、同一の人でも、事物でも、ちがった言い方のされるところに代名詞の特色があります。この使い分けを表にすると、次のようになります。

注意

近称―話し手が自分を中心とした範囲の中にあると認められた場合。

中称―話し手が聞き手を中心とした範囲の中にあると認められた場合

遠称―話し手が自分と聞き手のどちらの範囲でもなく、しかも両方に理解できると認められた場合。

不定称―何をさすかが はっきりしない場合

形式名詞

名詞のうち、特に形式名詞とよばれるものがあります。形式名詞は、上に修しよく語をともなって用いられ、きわめて、ちゆう象的な意味を表わします。また文字で書かれる場合には、かな書きにするのがふつうです。

・そういうことはない。やめた【ほう】がいい。できる【はず】もない。(主語)

・明朝出かける【つもり】だ。今、読む【ところ】だ。楽しいのは本を読んでいる【とき】です。(述語)

・きみの言う【とおり】だ。その【うち】に返事を書こう。クラスの【ため】につくす。(修しよく語)

他から転じた名詞

【行き】はよいよい、【帰り】はこわい。

話がうまい。

人の【受け】がよい。

家の【近く】を見わたす。【遠く】が見える。

右の―のある語は、もともとは「行き、帰り、話し、受け、近く、遠く」という活用のある語ですが、この場合には名詞となっています。(「が・を・に」に自由に続いて主語・修しよく語になれば名詞)意味も「往路・帰路・話し方・評判・近い所・遠い所」となっていることに注意しましょう。

コソアドことば

『(1) これ それ あれ どれ

(2) 【こう】読む。そう言う。【ああ】する。どう書く。(副詞―主語になれない。用語を修しよく。)

(3) 【この】文章。【その】言い方。【あの】水。【どの】書き方。(連体詞。主語になれない体言を修しよく)

(4) 【こん】な本。【そんな】話。【あんな】人。【どんな】字。(形容動詞―主語になれない。活用する)』

さきの表(ひょう)で見たように、他称に用いられる代名詞の基本には「コ・ソ・ア・ド」の体系がありました。ところが、「コ・ソ・ア・ド」の体系をもつものは、代名詞のほかにもあります。

これらを総称して「コソアドことば」ということがあります。コソアドことばには、文章を簡単にするはたらきがあります。

(この「ことばのきまり」その一)の続きは十一巻の巻末にあります。

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
192	どっちみち 覚悟 disposição para agir 安らかに(だ)	202	メモ	209	限度
193	へりくだった(る)	203	市場		品質
194	麗啓 前書き 時候 安否 字配り	204	繊維 fibra 農耕 練った(る) 紡いだ(く) 手工業 麻 linho 羊毛 la 天然		紡績 fição 貸し切り
195	念じ 敬意 留め書き 敬称	205	細織物 製法 特産物 糸車 綿製品 供給する fornecer 農業国 復活し(する) restabelecer 輸出国 毛織物	210	敷地
196	代名詞 pronome	206	生糸 sêda em rama 近東 経て(る)	212	合成繊維 fibra sintétic 身辺
197	おどけた(る)	207	またたく間 亜熱帯 zona sub-tropical 流域 bacia fluvial 沿岸 litral	213	直方体 打ちほごされ(る)
198	大意 要旨 論説 artigo つかめない(る) こみ入って(る) 筆者	208	三角洲 delta 必ずしも 労力 たやすく(い) 南半球 牧草 工業化され(る)	215	金属 鑄 工程
199	訓練 手がかり 解説			216	精巧さ 事務室 化合物 弾力
200	語句 強調し(する)			217	雑貨店
201	実例 exemplo verídico 対照させ(る) 論証 argumentação 引例 末尾 個所			218	卸し売り venda por atacado 一手に 消費者 consumidor 利益 lucro 数量
202	潜在先			219	独占 monopólio ひとり占め 平均した(する)

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
223	多数決	227	元首 chefe do Estado 任期 直轄領 terretório 知事 Governador do Estado	228	空軍 Aeronáutica 最高裁判所 控訴裁判所 軍事
224	生活様式 決議され(る) 機関 órgão 大本 基づいて(く) つり合い	228	つかさどる 下院 Câmara dos Deputados 改選され(る) 指名され(る) 外務 Relações Exteriores 大蔵 Fazenda 法務 Justica e Negocios Interiores 商工 Comércio e Indústria 運輸 Viação e Obras Públicas 文部 Educação e Cultura 鉱山 Minas e Energia 厚生 Saúde 農務 Agricultura 陸軍 Guerra 海軍 Marinha	229	満十八歳 登録 投票場 投票用紙 cêclula 騒がしい 案外
225	基本 内閣 gabinete まかない(う)			231	立候補者 candidato 平生 政見 演説会 comício
226	総理大臣 分担し(する) 犯し(す) 義務 司法 jurisdição 判決 訴え(る) 裁判 立法 legislação 三権 確立し(する)			232	道々
227	唱える 政党 partido 軍部			233	参加する 棄権し(する) abstenção
				234	世論 opinião pública 主権
				235	無気力 いたづらに おおやけ ゆだね(る)

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
139	時機 スライディング セカンド 複敏 <small>な</small> (だ) agil ゴロ ひねくれた <small>(る)</small> 右翼線	陽気 <small>な</small> (だ) 145 自慢 146 新緑 葉緑素 clorofila でんぶん amido 炭素同化作用 体積	152 用材 用途 車両 国花 flor simbólica de um país 選定 <small>し</small> (する)	153 特殊 果皮	154 生能 こなす 食道 区別 下等 <small>な</small> (だ)
140	捕球 <small>し</small> (する) ノー・ステップ フライ トス ダブル・プレイ けんせい <small>し</small> (する) ファースト ベース カバー <small>し</small> (する) 長打され <small>(る)</small> 外野手 中継	147 分量 樹木 糖類 glicose 脂肪 gordura たんぱく質 albumina 茎 貯蔵され <small>(る)</small> 地下茎 穀類 148 発芽し germinar 多年生 149 胞子 esporo	155 魚類 不用物 はいせつ 分類する classificar	156 羽毛 157 うろこ escama こうら 幼生 larva 成体 ひれ barbatana	158 1対 複眼 単眼 気門 traquéias tubulares 特徴 característico
141	爆発 <small>し</small> (する) 満塁 かっさい ピッチング 頭脳 <small>な</small> (だ) 発揮 リード	雄しべ estame 雌しべ pistilo 内側 がく cálice やく antera 子房 ovário はいしゅ óvulos かっ色	159 節足動物 artropode 巻貝 外とう膜 manto 胴 tronco 軟体動物 molusco	160 単一細胞 unicelular	
142	バッテリー 野手 打撃 強敵 ベスト	150 進化 <small>し</small> (する) evoluir 原産 151 染料 tintura 宝庫 達する 直径 diametro	161 共生 simbiose たよ <small>っ</small> て <small>(る)</small> 寄生 parasitar 外敵 強者 弱者 横取りする 天敵	162 人なつこい 獣類 唯一 斑点 mancha	163 敏しょう 捕食する 臭気
143	もとおれ <small>(る)</small>		164 栄養価 加工 <small>して</small> (する) indústria ほ乳動物	165 緩慢 こけ 有益 <small>な</small> (だ)	166 人語 保護鳥 aves protegidas みだりに
144	水車 かなた	152 家具	167 群れ	168 すみか 適応させ <small>(る)</small> しばしば 落葉 こげ茶色 保護色 ことさらに 目だたせ <small>(る)</small> 警戒色	169 けられて <small>(る)</small> 168 光線 平行 paralelo 電球 反射 refletir 169 角度 屈折 refração 170 各種 171 潜望鏡 双眼鏡 屈折作用 近眼 miopia 老眼 presbita 撮影機 filmador 映写機 projetor 172 区別 <small>して</small> (する) プリズム prisma にわか雨 173 透明 transparente きしむ のこぎり 騒音 174 音波 波長 振幅 175 回数 サイクル 以下 超音波 ondas supersôni- cas ultra-som 176 山びこ eco 等しく <small>(い)</small> 共鳴 177 つりがね

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
179	いしずえ	180	実用 <small>な</small> (だ) 事務 <small>な</small> (だ) 明快 挨拶 転動 transferência 敬具	181	幹事 representante da turma 前略 母校 意義 おくり合わせ 日時 会費
182	至急 同封 <small>し</small> (する) 御中	183	通学 <small>し</small> (する) せがんで <small>(む)</small>	185	朝露 停留所 parada de ônibus 代筆 <small>し</small> (する)
188	有意義 <small>な</small> (だ) 未知 自己紹介 師範学校 Escola Normal 農事試験場 Instituto Agronômico	189	集散地 カーニバル	191	忠言 寿命 duração de uma vida

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
92	爱国者		ともって(る)	102	しり込み
	秘法		すみやかに(だ)		圧して(る)
	大家		ゆがんだ(む)		金貨
	紹介 apresentacão		子どもだまし	103	ぼう然と atônito
93	前もって		ごらんにいれ(る)		かささいする
	おぼつかない	98	くわえた(る)		給仕
	呼びりん		あっけにとられ(る)	104	うず高く(い)
	玄関		行儀よく		金満家
	お待ちかねで(だ)		飯りとじ		ほめそやし(す)
	あいそよく		ざわつかせる		ゆう然と
	突き当たり		微笑		欲心
	口ひげ	99	かねかね	105	…た てまえ
94	拝見		ぞうさなく		強情に(だ) obstinação
	陰気な(だ) combrio		つもり		せせら笑い(う)
	手ごろな(だ)	100	念を押す		尽きない
	古ぼけた		ぶしつけだ		もとで capital
	裂ける		おのように		始末する
	糸目		恐れ入ります		申し分
	あらわに(だ)		とんちやくする		しごく
	紅茶		まともに		容易に(だ)
	葉巻き charuto	101	暖炉 lareira	106	押し問答
95	精霊 espirito		雑談		はめに たちいたり(る)
	催眠術		氣 caça		ためらい(う)
	つまみ上げ(る)		競馬 corrida de cavalos		気乗り
	ずり寄せ(る)		おうへいに(だ)	107	血相 fisionomia
96	じゃこう		一任する		家作 casa de alugar
	感嘆		手品師	108	せつな
	むぞうさに(だ)	102	てんで		のみならず
	はや		うながす		矢もたてもたまらなく
	心棒		おもむろに		(い)
	きもをつぶして(す)		カフス		決闘 duelo
	万一		燃えさか(る)		キング
97	度胸		あらざも	109	魂 alma
	まばたき		やけど		剣

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
139	時機		陽気な(だ)	152	用材
	スライディング	145	自慢		用途
	セカンド	146	新緑		車両
	機敏な(だ) ágil		葉緑素 clorofila		国花 flôr simbólica de
	ゴロ		でんぶん amido		um país
	ひねくれた(る)		炭素同化作用		選定し(する)
	右翼線	147	体積	153	特殊
140	捕球し(する)		分量		果皮
	ノー・ステップ		樹木	154	生能
	フライ		糖類 glicose		こなす
	トス		脂肪 gordura		食道
	ダブル・プレイ		たんぱく質 albumina		区別
	けんせいし(する)		葦		下等な(だ)
	ファースト		貯蔵され(る)	155	魚類
	ベース		地下茎		不用物
	カバーし(する)		穀類		はいせつ
	長打され(る)	148	発芽し germinar		分類する classificar
	外野手		多年生	156	羽毛
	中継	149	胞子 esporo	157	うろこ escama
141	爆発し(する)		雄しべ estame		こうら
	満塁		雌しべ pistilo		幼生 larva
	かささい		内側		成体
	ピッチング		がく cálice		ひれ barbatana
	頭腦的な(だ)		やく anthera	158	1対
	発揮		子房 ovário		複眼
	リード		はいしゅ óvulos		単眼
142	バッテリー		かっ色		気門 traquéias tubulares
	野手	150	進化し(する) evoluir		特徴 característico
	打撃		原産	159	節足動物 artrópode
	強敵	151	染料 tintura		巻貝
	ベスト		宝庫		外とう膜 manto
143	もとおれ(る)		達する		胴 tronco
144	水車		直径 diametro		軟体動物 molusco
	かなた	152	家具	160	単一細胞 unicelular

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
31	非凡 extra ordinário 国威 各界 名士 pessoas importantes 悲痛な(だ) angustioso 死の床 leito da morte 職務	48	のぞき見 いそべ 暗唱 recitar de cór 49 鼻声 voz fanhosa 親ひとり子ひとり 50 うらやましそう にせどもり		うやうやしく(い) respeitosamento 代議士 就任 文筆
32	外交	53	感動	64	ひらめいた(く) よろめき(く)
33	劇 演劇 人間生活 きそい(う) 職場 娯楽 理想 古典劇 放送劇	要素 具体的 54 じゅうたん tapête びろうど veludo 55 まさに 一瞬 em segundos もたげた(る) 56 めりこんだ(む) すくんで(む) おののかせ(る) 57 かがめて(る) 58 貴族 fidalgo 首領 chefe 戦士 勇士 59 行進し(する) たどり(る) さわやかに suave 60 しなやかな(だ) flexível 炎 labareda ひとみ 召使 criado 61 夜営 かすめて(る) 捕われの身 63 かたみ lembrança	65	発砲し(する) 傷口 ferimento したたって(る) pingar 山刀 66 死体 67 ずぶぬれ ベッド 68 敷布 lençol すすり泣き 縦じま listrado vertical 死神様 69 飢え死にさせ(る) morrer de fome 思知らずだ ingrato 70 うるんだ(む) 71 にじり寄って(る) 72 裏手 はかばかし(く)(い) 例年 todos os anos はかどり(る) 74 妙に(だ) 階段 escada しびれた(る) 76 翌朝 葬式 参列し(する) 狩り	
34	朗読会 recital				
35	半円 meio círculo				
38	口調 決をと(り)(る) 生意気 39 手のあいてる 40 とぼけて(る)				
41	登場 aparecer no palco 突きつけ(る) にらんだ 42 よこせ(す)				
43	わからずや 振り切(っ)て(る) recusar				
44	忘れんぼ				
45	いな穂 espiga de arroz				
46	自信				
48	退場 sair do palco				

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
77	かけ金 まくら ものすごい 台風 暴風雨 tempestade むざんに	84	…じゃけえ〔方言〕 …けのう〔方言〕 ひょういじり …しおって〔方言〕 えっと〔方言〕 あかんぜ〔方言〕 もちっと 奇抜 …かいな〔方言〕 ええんじゃ〔方言〕	87	修身 見込み たんせい 88 くってかか(る) 恐縮し(する) ごと ぐちっばい malho 89 げんのう けがれた(る) 小使 くすぶった(る) ためつすがめつ 冷淡な(だ) もろうところ〔方言〕 …しえんのう〔方言〕
78	根こぎ 愈(く)(い) えぐられる(る)	85	参考品 exemplar 85 出ちよった(る)〔方言〕 …じゃったのう〔方言〕 おおけえ〔方言〕 …じゃったけのう〔方言〕 かさばとる〔方言〕 volumoso 口を入れた(る) …もせんくせして〔方言〕 だまっとれ〔方言〕	90	結局 afinal 月給 ゆくえ 豪家 familia rica 愛ひよう 恨む
79	野獣 うろついて(く) がんじょうな(だ) solido おり jaula	86	裏通り しもた屋 格子 干しがき …てつかえせえな〔方言〕 五寸 なんぼかいな〔方言〕 ぼろさん〔方言〕 まけときゃんしょう〔方言〕 売らんといて〔方言〕 つかあせえのう〔方言〕	91	芸術院 上京し(する) 92 魔術 magica しぐれ 人力車 かいわい 竹やぶ 西洋館 かじぼう 車夫 瀬戸もの porcelana 表札 長年
80	さらって(う) raptar				
81	ひょうたん 以来 熱中し(する) 茶渋 residuo de chá 臭み mau cheiro				
82	凝り(る) 屋台店 はげ頭 こっとう屋 荒物屋 駄菓子屋 専門 especialidade				
83	茶の間 あぐらをかいて(く) 手入れ こたつ おそらく…ろう 古ひよ いわゆる 平凡な(だ) t. ial				

169	171	171	171	171	171	173	174	174	174	174	175	176	178
屈折	潜望鏡	精巧	顕微鏡	撮影機	映写機	騒音	振動	波紋	濃い	振幅	超音波	等しく	旅愁
178	180	180	180	180	180	181	181	181	182	182	182	182	184
恋し	依頼	事務	拝啓	住宅	皆さん	泉学園	幹事	お互い	普及会	至念	同封	御中	秀男
185	185	186	186	188	188	190	191	191	192	192	194	194	195
朝露	恵子	越し	宿	交換	範	訳	寿命	及び	避ける	覚悟	謹啓	尋ねる	留め書き
195	195	196	196	198	198	201	204	204	204	204	204	204	204
殿	封筒	迷惑	私	扱い方	要旨	個所	繊維	編んで	紡いだ	練った	栽培	織機	麻
204	204	205	206	206	206	207	207	207	207	208	209	209	209
羊毛	天然	供給	生糸	蚕	朝鮮	急速	亜熱帯	流域	メキシコ湾	沿岸	三角州	限度	改良
209	209	213	216	216	216	217	218	219	219	218	219	219	220
紡績	郊外	束	娯楽	施設	弾力	腐らず	卸し	独占	砂糖	ひょうりょう	売買	平均	貨幣
220	224	224	224	225	226	226	226	227	227	227	228	228	228
減る	心掛	基づいて	納め	内閣	分担	犯し	訴え	共和党	倒し	直轄領	大蔵	厚生	控訴
229	230	233	235	235									
結婚	願がしい	棄権	衰えない	門									

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば	
0	法科大学	20	著作		赴任し(する)	
	中途	21	偉人		文書	
	退学し(する)	22	大理石 mármore		有数	
	在学中		外相 chanceler		…通	
	画集		永眠し(する)	27	帝制 regime imperial	
	滞在し(する)		生家		共和制 regime republicano	
	修業	23	彫像 estátua		仲介者 árbitro	
	影響		外交官 diplomata		客死し(する)	
	彼独自		業績		後任	
	近代画家	24	才知 tino		覚え書き	
	大成し(する)		手腕 tato		主張	
	欧米		徹底し(する)		裁決	
	賞賛され(する)		ir até o fim		主張し(する)	
	陳列され(する)		発揮する	28	解決	
9	宇宙 cosmo		いずこ		權益	
10	だんらん		創刊し(する) fundar		彩食	
	reunião da família		唱え(る) libertar		傑作	
11	じゅうず rosário		除き(く)	29	所論	
12	芝草 relva		友邦 país amigo		エピソード episódio	
	ささやか(な)だ	25	現実		さいそくし(する)	
	黒ずんだ		考慮し(する)		apressar	
	ふさ		折衝 negociação		熱意	
13	あさって debicar		高潔	30	支持し(する) defender	
	ものうげ		学識		確定し(する)	
14	きらめき cintilar		献身的		推され(る)	
15	パロン		期待され(る)		就任し(する)	
	サン・ジョン祭り		遊学し(する)		対抗し(する)	
18	しかめづら		26	任命され(る)		antagonismo
	ひよっとこ		判事		障地 posição(militar)	
20	作詩		使命		拡大	
	著述		秘書 secretario		公正(な)だ	
	受賞		平和条約 tratado de paz			

55 叫び	55 胸	55 耐え	55 一瞬	56 仰いだ	56 恐ろし	57 感謝	57 祈り	57 胸	58 弓	59 勇みたつ	59 放たれ	59 灰	59 吹いて
59 偉く	60 浮かんで	60 炎	60 夢	60 召使	61 増し	61 沈み	61 弓矢	63 印	63 就任	64 空模様	64 染め	64 踏む	64 砂
65 一匹	65 発砲	65 傷口	65 奥	65 雌じか	65 撃ち殺し	65 腹	65 肝臓	67 迎え	67 降り	67 激しく	67 違い	67 添って	67 乳
68 端	68 松林	68 絞じま	69 飢え死に	72 裏手	72 赤ン坊	73 見舞い	73 芋畑	74 妙	74 段階	75 涙	76 裂ける	76 翌朝	16 葬式
76 狩り	76 実り	77 ふじ豆	77 獣	77 食卓	77 背中	77 薄く	77 湿った	77 荒れ果て	78 危く	78 沼	79 野獣	79 猛獣	79 家畜
81 縁	81 茶渋	81 臭み	81 抜く	82 凝り	82 浜通り	82 駄菓子屋	83 巻いて	83 飽かず	83 軒	84 奇抜	86 干し	86 五寸	86 普通
87 銭	87 見込み	88 恐縮	88 捕え	88 割って	89 捨てる	89 冷淡	89 賢い	90 豪家	90 恨む	92 魔術	92 瀬戸もの	92 表札	92 紹介
93 玄關	94 拝見	94 陰気	94 紅茶	94 箱	95 精霊	95 催眠術	95 描き	96 感嘆	96 心棒	97 度胸	97 一冊	98 行儀	98 翼
98 微笑	99 冗談	101 銀座	101 暖炉	101 猟	101 競馬	102 床	104 盛り	105 強情	105 渡し	107 札	108 決闘	109 魂	109 剣

109 明らか	110 自殺	111 鍛える	112 幾日	112 探る	114 克服	114 怠らない	115 前髪	115 一粒	115 飯粒	115 一筋	115 乱れ	115 熟練	115 戒めた
116 臨む	116 探究心	116 好き	117 状況	117 知恵	117 崇拜者	117 神殿	117 伺い	117 お告げ	118 信仰	118 賢者	120 時刻	120 励行	122 免状
123 洗たく	123 看護法	123 簡単	123 裁縫	126 展覧会	128 鍛錬	129 柔道	130 収穫者	130 看護婦	131 雑誌	131 水泳	132 尊い	133 丈夫	135 余暇
136 鑑賞	137 伴なり	137 充実	137 開拓	137 修繕	137 催す	137 招待	138 隣り	138 一生懸命	138 久保田	139 攻撃	139 犠牲性	139 墨	139 盗墨
139 機敏	139 右翼	139 斜め	140 捕球	140 距離	140 乱暴	140 連絡	140 中継	141 爆発	141 応援	141 頭腦的	145 誇り	145 自慢	146 堅い
146 葉緑体	147 街路	147 樹木	147 窒素	147 糖類	147 脂肪	147 茎	147 貯蔵	147 地下茎	147 溶けて	147 水蒸気	148 発芽	148 枯れる	149 胞子
149 雄しべ	149 柄	149 花粉	149 子房	150 茂った	151 染料	151 宝庫	151 枝	151 直径	152 用途	152 森林	152 赤紫	152 光沢	153 特殊
155 肺	155 循環器	156 は乳類	156 羽毛	157 幼生	158 一对	158 触觉	158 節	158 特徴	158 網	158 腹部	159 外とう膜	159 胴	159 吸盤
159 軟体	160 警戒色	161 妨げる	161 衰弱	161 巢	162 比較的	162 特異	162 唯一	162 斑点	163 一般	163 臭気	165 緩慢	167 群れ	168 筒

新しい漢字

—のしるしは前にほかの読み方で出たもの。

0	0	8	9	10	10	11	11	11	11	12	13		
彼	陳列	窓	宇宙	灯	妨がい	甘	離れ	壁	影	丸	芝草	丘	若い
13	14	14	15	17	19	20	20	21	22	22	22	23	
寝かし	眠り	笑い	踊った	閉じ	穴	著述	受賞	偉人	刻まれ	外相	永眠	記し	碑
23	23	23	3	24	24	24	24	25	25	25	25	25	25
彫像	数え	遂げた	暮われ	手腕	徹底	発揮	唱え	除き	含んで	考慮	双方	折衝	献身
25	25	26	26	26	26	26	26	26	27	27	27	27	27
将米	滞在	帯び	秘書	交渉	活躍	赴任	詳しく	贈り	尽くし	仲介	頼み	客死	裁決
28	28	28	29	29	29	30	30	30	30	31	31	31	31
寝食	著わし	傑作	迫って	寝泊り	監督	推され	対抗	到着	陣地	非凡	国威	輝かせ	悲痛
31	31	33	33	34	34	34	35	35	35	35	37	38	38
床	感んだ	演劇	盛ん	朗読会	机	関根	幕	並べ	腰かけ	原稿	押える	拍手	生意気
39	39	39	40	40	41	41	43	43	43	45	46	47	48
見詰め	舞台	なん枚	驚く	探ぐる	登場	突き	振り	逃げる	遅れ	いつ穗	困る	惜しい	我
49	49	50	50	50	50	54	54	54	54	54	54	54	55
泣き声	肩	仲	握手	握る	痛い	敷き	傾いて	娘	疲れ	柔らか	載せ	伸ばす	突然

元文部省図書監修官

監 修 林 実 元

(在東京)

編集執筆 (ABC順)

古 野 菊 生

二 木 秀 人

加 藤 千 重 子

岡 崎 親

坂 田 忠 夫

武 本 由 夫

表紙・挿絵 (ABC順)

福 島 近

星 ルリ子

日 本 語 (10)

中 級 用

一九七〇年十一月十日

定価

円

一九七〇年十一月十七日

著 者

日 伯 文 化 普 及 会

日本語教科書刊行委員会

発 行 者

日 伯 文 化 普 及 会

ブラジル、サン・パウロ市サン・ジヨ

アキン街三八一

印 刷 者

東京都千代田区神田神保町三ノ二九

株式会社 帝国書院

代表者 守屋紀美雄

発 行 所

日 伯 文 化 普 及 会

ブラジル、サン・パウロ市

サン・ジョアキン街三八一